グローバルから真のグローカルへ

校　長　　磯　村　　要

20～30年ほど前に「グローカル」という言葉がもてはやされたことがありました。語源は「Think Globally, Act Locally.（地球規模で考え、地域で行動せよ。）」だと言われましたが、その表現どおり、この言葉は世界の視点から自分の地域での行動を考え直すという文脈で使われることが多かったのではないでしょうか。つまり、当初の「グローカル」は、グローバルからローカルへという、いわば一方通行の傾向が強かったのではないかと思われます。

その後、情報技術の長足の進歩や経済環境の急激な変化等により、ローカルな課題をグローバルな視点から考えることは当たり前のこととなりました。さらに、自然環境の問題のように、グローバルとローカルの両側面を切り離しては解決しえない課題が大きく注目されるようになりました。それに伴い、「グローカル」は再評価され、新しい意味を帯びるようになったと思います。

たとえば、昨年1月、スイスで世界経済フォーラム年次総会（ダボス会議）が開催されましたが、会議の運営を行う8名の議長の1人に兵庫県西宮市出身の20代の女性が選ばれました。坂野晶さんはNPOの理事長として、人口約1,500人の山間の町、徳島県上勝町で「ごみ排出ゼロ」を目指して活動しておられます。徹底したゴミの分別収集に日々地域で地道に取り組む人物を、世界が自分たちのリーダーとして認めたのです。会議に臨むに当たり、「ローカルな視点から、世界に課題を提起したい」と坂野さんが言っていたことが強く印象に残っています。

今、グローバルとローカル、双方の視点を自由に行き交い、グローバルとローカルの別なく自分の課題を見つけ出し、解決に向けて努力するという、真の意味で「グローカル」な資質・能力を備えた人物が求められています。本校では平成26年度から地域の大学や企業等と連携し、自然科学分野への興味・関心を高める教育活動に取り組むグローカル・リーダーズ・イン・サイエンス（GLiS）類型の研究開発を進めてきました。

平成27年度からは、SGH事業の指定を受け、「食と健康」をテーマに据え『三方よし』の精神を継承するグローバル・ビジネス・リーダーの育成を目指して教育課程の研究開発に着手し、本年度指定期間の5年が終了します。この間、海外でのフィールドワークを取り入れた課題研究及び4技能の育成を目指した英語教育を2本の柱として教育課程の研究開発に取り組み、お陰様で、本冊子で御報告するように、いずれにおいても大きな成果を上げることができました。特に課題研究では、「三方よし」という日本の商道徳における互恵精神を再発見しつつ、各自のテーマを社会課題と関連させて、グループでの議論を深め、その成果を広く発信するという探究活動型のプログラムを確立しました。

今後は、これらの２つの研究開発事業を統合し、生徒の主体性や協働性を伴った創造的思考力を育成する探究活動を中心とした新しいプロジェクトを立ち上げたいと考えています。地域の大学や企業、自治体等と連携を深めた教育活動を展開し、食文化やビジネスのみならず広く世界や地域の課題を自分の課題として捉え、解決を目指すグローカル・リーダーの育成を学校全体で目指します。

SGH事業の取組に長らく御理解、御指導、御支援をいただいた皆さまに心から感謝を申し上げるとともに、本冊子を御高覧の上、新しいプロジェクトに向けて改めて御意見、御助言等をいただきますようお願いいたします。本校の生徒たちが真のグローカル・リーダーとしての基礎を育み、未来を切り拓く人物として育つことを心から願って巻頭の御挨拶といたします。

目次

巻頭言

第１章　本校 SGH の概要
1　SGH テーマ（概要）.....1
2　平成 31 年度研究開発実施計画書.....2
3　平成 31 年度研究開発完了報告書.....5
4　SGH スケジュール　【年度別】.....16
5　総合的な学習（探究）の時間の年間計画.....17
6　SGH 年間行事実施一覧.....18

第２章　研究開発の内容
1　各学年の SGH プログラム
(1)　第３学年.....24
(2)　第２学年.....24
(3)　第１学年.....24
(4)　成果.....25
(5)　今後の取り組み.....25
2　外国語教育
(1)　「英語の型」による発信ができる４技能伸長プログラム開発(1 年).....26
(2)　「英語の型」による発信ができる４技能伸長プログラム開発(2 年).....27
(3)　「英語の型」による発信ができる４技能伸長プログラム開発(3 年).....28
3　海外研修
(1)　２年　海外フィールドワーク(ニューヨーク・イタリア).....29
(2)　１年　海外フィールドワーク(台湾).....42
4　企業・大学との連携
(1)　企業との連携.....48
(2)　大学との連携.....48
(3)　今後の取り組み.....48
5　その他の活動
(1)　県伊祭（学校祭）.....49
(2)　小学校英語アクティビティー出前授業.....50
(3)　海外大学フェア.....53
(4)　成果発表会.....54

第 3 章　課題研究活動の評価およびアンケート等の調査結果と分析

1　SGH 企画推進委員，および SGH 運営指導委員一覧と委員会の記録 56
2　アンケート等の調査結果と成果分析
(1)　本校志望理由の変遷.....60
(2)　意識調査(平成 30 年度 1 年生総合的な学習の時間他) 60
(3)　SGH アンケート結果.....64
(4)　GPS-Academic 73
(5)　英語外部検定結果 77
(6)　SGH 辞退者の追跡調査 86
(7)　卒業生追跡調査.....87

第 4 章　関係書類

1　平成 31 年度教育課程表.....95
2　評価ルーブリック(1 年生).....96
3　ポスター審査のルーブリック(1 年生) 97
4　SGH Presentation Evaluation Sheet(2 年生).....98

第 1 章　本校 SGH の概要

1　SGH テーマ（概要）

2　平成 31 年度研究開発実施計画書
（別紙様式１）

平成 31 年 2 月 4 日

研究開発実施計画書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　兵庫県神戸市中央区下山手通 5-10-1
管理機関名　兵庫県教育委員会
代 表 者 名　教育長　西上　三鶴　　印

1　実施種別
□　幹事校
■　幹事校以外　兵庫県立伊丹高等学校

2　研究開発名
「三方よし」の精神を継承するＧＢＬ（グローバルビジネスリーダー）育成プログラム開発

3　研究開発の概要
継続的な発展に不可欠な「三方よし」の精神を備えたグローバルビジネスリーダー育成プログラムを開発する。地元のグローバル企業の実地調査と国際交流姉妹校との連携を基に多様性の受容力と好奇心を育て、日本の「食」の強みを再発見し、具体的なアイデアにして、日本語でも「英語の型」でも発信できる生徒を育成する。

4　事業の実施期間
契約日～平成 32 年 3 月 31 日

5　平成 31 年度の研究開発実施計画
1）基本の考え方
本校ではグローバルビジネスリーダーを「日本文化の理解の上にたち、異文化を受容しつつ差異に目を向けてビジネスチャンスを見いだし、アイデアの実現に向けた交渉を経て地域や社会に貢献する人材」と定義する。日本の地方生活文化と古くからの商道徳である「三方よし～売り手よし、買い手よし、世間よし～」の互恵の精神の息づく、商人の町伊丹のグローバル企業や、数年の歴史を刻んできた米国、台湾の姉妹校との交流、さらに近畿一円の大学との連携授業を生かして、『食と健康』をテーマに「日本再発見―この国の『食』の強みを発信する」実践プログラムを構築する。この実践プログラム開発は、今後高校生が日本各地で独自の生活文化を具体的なアイデアにして世界に発信するモデルとなることを目指す。
平成 31 年度は、探究的なプロセスを重視して課題解決型の研究を意図した前年度の取り組みをさらに推し進め、運営方法や指導方法の改善を加えて、プログラムを完成させる。
改善点を含めた具体的なプランは次の通りである。
ア）1 年生は、課題の発見から研究計画作成までに時間をかけた上で、国内外でのフィールドワーク調査にとりかかる。
イ）4 人でグループを作り、5 グループ 1 ゼミの形態で取り組む指導体制において、1 ゼミにつき主担当と副担当を置き、複数の眼でグループの進展状況を把握できるようにする。
ウ）2 年生以降も SGH 活動を継続する生徒は、国内・イタリア・ニューヨークの 3 グループのいずれかに属して個人研究を進め、対象地域が抱える問題の発見から解決策の提案までを行うとともに、その過程で認識できた日本の食の強みを発信する。
エ）3 年生では、活動成果を論文にまとめる。また地元の企業をはじめ、学校説明会などで来校する中学生、その保護者、中学校教員、また文化祭での発表機会を使って地域の方々にアピールし、SGH の成果を伝える。

2）課題研究
①　第 1 学年
平成 31 年度入学生 280 名全員に対し、グローバル課題としての「食と健康」を共通テーマとし、各自の関心分野において見いだした課題にアプローチする探究学習をグループ単位で行う。
ア）探究活動の充実と「食と健康」の探求テーマの多様化
(1) 年度当初に、課題研究に関する基本的な考え方を集中して学ぶ機会を設ける。
(2) 「食と健康」をより広い視座で捉え直す意図で、「食と文化」「食と自然」「食と人間」

「食と社会」の 4 分野を設定し、分野ごとに自身の興味関心に沿って「食と健康」への切り口を学ぶ機会を設ける。

イ）さらなる協働的な学びの促進

(1) 各生徒が関心を持った分野ごとでグループを登録し、探究活動を進めていく。

(2) ゼミ内での報告会を通して担当教員と議論を進める中で、生徒の協働的な学びを深める。

ウ）食文化の探求

いずれのゼミにおいても、食と生活文化の関わり、嗜好の変遷、健康への意識など、身近な話題から始めて、他との比較を通して差異に焦点を当てた課題研究を進める。

「アジア高校生架け橋プロジェクト」留学生を 1 名受け入れ、総合的な探求の時間を中心に「食」を話題に交流を深め、異文化理解を図る。

2 年生での修学旅行先となる台湾の風土や食文化理解を深める学習を取り入れ、アジアの中での日本の食の可能性を追求する。

エ）日本の食の強みを発信する

訪日した国際交流姉妹校の生徒とのディスカッションを通して、「日本の食の強み」を見いだすことを目標に課題研究を進める。12 月の海外フィールドワークで現地生徒と協働して調査研究を行い、その成果を 1 月に実施する校外成果発表会で発表する。

② 第 2 学年

海外フィールドワークを体験した生徒をコアメンバーとして、「食と健康」のテーマに沿った探究学習をさらに進める。

ア）設定課題への新たなアプローチ

SGH 指定後 4 年間で蓄積したビジネスアイディアや発想のプロセスについて学び、海外での「Japan Fair」に向け、問題意識に根差した食に関わる提案の具現化をはかる。

イ）企業との連携拡大

グローバルな経営戦略を展開する地元企業との連携、及びフィールドワーク先の企業との連携を強化する。生徒自らが考案した食に関わる提案に対するアドバイスをもらい、秋に予定されている海外での「Japan Fair」でその成果を発信する。

ウ）国内外の大学との連携や海外大学フェアを活かした、英語での 4 技能運用能力の向上

2 学年の 7 月に海外大学フェアを開催し、各方面の大学関係者等による、各国の大学事情・入試制度等の講演を実施し、海外大学への興味・関心を高める。

2 学年の SGH コアメンバーを軸に、立命館大学食マネジメント学部での先端研究に触れ、専門家や学生との意見交換を通して研究内容の深化を図る。

2 学年の海外フィールドワークでは、現地の大学を訪問し、食の提案及びディスカッションを行う。各自が設定したテーマでアンケートやインタビュー等の調査を行い、研究内容の修正・発展につなげる。

エ）日本の食の強みを発信する

訪日した国際交流姉妹校の生徒や大学の留学生とのディスカッションを通して、食をテーマとした課題研究の最終形を、多様性への敬意のうえに「日本の食の強みを発信すること」に置く。海外の姉妹校訪問時に実施する「Japan Fair」や 1 月に実施する校外成果発表会、また 2 月「高校生国際問題を考える日」で、その成果を発表する。

③ 第 3 学年

第 1 ・2 学年でのフィールドワークの成果をとりまとめ、食に関わる課題研究論文を完成させる。また、フィールドワークから持ち帰った成果を発信・還元する。

ア）課題研究の集大成

修正を加え練り直してきた各自のプランを、現地で食を専門とする人々や一般の人々の興味関心を引き、賛同を得られる内容にまで高める。

イ）成果の発信

協力企業への報告・提言、学校説明会、小学校での英語アクティビティー、文化祭での展示企画の機会を通じて、これまでの SGH 活動の成果を地域の方々にアピールする。

ウ）グローバルキャリア形成講座

リサーチやエッセイ・アプリケーションフォームの作成を通し、3 年間の課題研究を統括し深化させる。

3）校内組織

①企画部（独立した校務分掌上の専門部）…全体計画策定、統括、渉外、実務全般

②SGH 課（企画部内の専門課）…SGH 全般に関する企画運営、統括、渉外、実務全般

③各学年総合的な学習の時間担当者会議･･･総合的な学習の時間運営についての計画・協議

全教員が総合的な学習の時間を担当する。

各学年の SGH・総合学習担当者と企画部中心に計画し、担当者全員で打合せをする。

4）年間計画　　FW:フィールドワーク　　GC:グローバルキャリア形成

	1年	2年	3年
4月	課題研究オリエンテーション	課題研究計画作成	英語論文作成
5月	グループ登録 探究テーマ別講演会	課題研究計画発表会 FW エントリー締切 国内調査	英語論文作成 発信還元準備
6月	課題研究テーマ決め	課題研究計画改善 国内調査 FW 選考	文化祭で発信還元
7月	課題研究計画書作成 FW エントリー締切	FW 準備	英語論文完成 GC 講座受付
8月	文献調査 FW 選考	FW 準備	GC 講座個別指導
9月	課題研究計画発表	NY/イタリア FW	論文指導
10月	台湾受入・調査	国内 FW 調査結果分析・まとめ	論文指導
11月	調査結果分析	発表準備	面接指導
12月	ポスター発表 台湾 FW	校内成果発表会	
1月	校内成果発表会 校外成果発表会	校外成果発表会	
2月	論文作成	英語論文作成	
3月		英語論文作成	

＜添付資料＞
・平成 31 年度教育課程表

6　事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
課題研究および 成果発表	兵庫県立伊丹高等学校 伊丹アイフォニックホール	企画部長　川村　道雄 SGH 課長　　佐藤　司
フィールドワーク	台中市立台中第二高級中等学校 ニューヨーク市立大学附属バルーク高校 食科学大学（イタリア） 立命館大学	企画部長　川村　道雄 SGH 課長　　佐藤　司

7　課題項目別実施期間

業務項目	実施期間（　契約日　～　平成 32 年 3 月 31 日　）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
課題研究		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
フィールドワーク						○	◦		○			
成果発表									○	○		

※計画は事業計画書提出時のものであり、実際の事業着手は契約締結後とする。

8　所要経費
　別添のとおり

【担当者】

担当課	高校教育課	ＴＥＬ	０７８－３６２－９４４７
氏　名	辻　登志雄	ＦＡＸ	０７８－３６２－４２８８
職　名	主任指導主事	e-mail	

3　平成 31 年度研究開発完了報告書
（別紙様式３）

令和２年３月　　日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　兵庫県神戸市中央区下山手通 5-10-1
管理機関名　兵庫県教育委員会
代 表 者 名　教育長　西上　三鶴　　印

令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を，下記により提出します。

記

１　事業の実施期間
令和元年４月１日（契約締結日）～令和２年３月３１日

２　指定校名
学 校 名　兵庫県立伊丹高等学校
学校長名　磯村　　要

３　研究開発名
「三方よし」の精神を継承する GBL（グローバルビジネスリーダー）育成プログラムの開発

４　研究開発概要
継続的な発展に不可欠な「三方よし」の精神を備えたグローバルビジネスリーダー育成プログラムの開発を目指し、今年度は中間評価を受けて大きく変更した昨年度のプログラムをベースにさらなる改善を加えた。探究的なプロセスを重視し、課題の発見から研究計画作成までに時間をかけた上で、国内外のフィールドワークやインタビュー・アンケート調査を行った。ロジックを重視して調査結果の考察を行い、１年生では全員が日本語での発表、論文作成、2 年生は英語での発表、論文作成を行った。学年ごとに段階的に成果発表会を行い、各段階で選抜された個人やグループには課外での指導を重ね、最終の校外成果発表会は学年を越えての共有と学びの場となった。これらの探究活動は、地元のグローバル企業や、アメリカ、台湾の姉妹校との連携を基に進め、校外での活動や外部人材の活用が活性化した。５年間の試行錯誤を経て、探究学習のひとつの「型」を開発できた。

5　管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

業務項目	実施日程											
	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
企画推進委員会		○								○		
運営指導委員会				○							○	
成果発表会										○		
高大連携による支援、ALTの増員	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

（2）実績の説明

①高大連携による支援

県教育委員会と包括連携協定を結んでいる３大学（京都大学、大阪大学、神戸大学）の協力を得て、課題研究に係る教授・大学院生の派遣、外国人留学生の活用等、手厚い支援を行うための体制を整えている。(伊丹高校対象生徒数５９２名)

②成果の普及と還元

京都大学との共催で「令和元年度高大連携課題研究合同発表会　at京都大学」（１１月）(伊丹高校対象生徒数１名）を、SGH指定校である県立兵庫高等学校を幹事校とし、大阪大学との共催で「高校生『国際問題を考える日』」（２月）(伊丹高校対象生徒数９名）を実施したほか、県内のSGUである関西学院大学での、探究甲子園（３月）を後援するなど、生徒に成果発表の機会を持たせ、研究成果の普及と還元を図った。（３月の探究甲子園は新型コロナウイルス感染症の影響により中止）

③ALT（外国語指導助手）の増員

県内におけるグローバル人材育成拠点校と位置付け、ALTを重点配置した。日常の英語活動や異文化理解に係る教育を強力に推進したほか、英語によるプレゼンテーションの指導、海外フィールドワークの事前指導の充実を図った。(伊丹高校対象生徒数：９０３名)

④委員会を通した管理と指導助言

企画推進委員会（５月・１月)、運営指導委員会（７月・２月）及びアイフォニックホールで行った成果発表会（１月）に担当指導主事を派遣し、大学・企業・関係機関関係者等の専門家と意見交換を図りながら、SGH事業の成果と評価をもとに指導助言を行った。

6　研究開発の実績

（1）実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	１０月	１１月	１２月	1月	2月	3月
課題研究		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
フィールドワーク						○	○		○			
成果発表									○	○		

（2）実績の説明

令和元年度 SGH の取組を、１年生２８０名全員と、２年生１０名（課題研究とフィールドワーク両方を行う者を SGH 継続生徒と位置づけて実施）、３年生１９名（２年から SGH を継続している者）を対象として報告する。

①　課題研究内容

《第１学年》

課題研究は４人を１グループとして活動させ、５グループ（２０人）を１ゼミとして１人の教員がゼミ主担当として指導に当たった。さらに、複数の視点で指導するために、各教員は副担当として別の１つのゼミにかかわる形にした。課題発見から論文作成までの流れに沿って、担当教諭と班員間のフィードバックを密にしながら、活動の評価基準に即した振り返りを行って、活動を継続させた。

本校の課題研究のテーマである「食と健康」に関連する課題研究のテーマ設定に当たり、「食と文化」「食と自然」「食と人間」「食と社会」の４分野を設定し、立命館大学から小沢道紀准教授を招いて講演会を行った。それによって課題研究のテーマ設定に当って自分の興味関心と社会課題を関連づける視点を培った。４人グループの設定は、この講演会を聴いた後に、各生徒の興味関心のある分野を調査し、同じ興味関心の者が集まるように、クラスを越えて学年全体で設定した。

さらに、神戸大学の石川慎一郎教授による「探究テーマの決め方」と題する講演を聞き、課題研究におけるテーマ設定の大切さや課題研究における具体的な留意点を学んで目指す到達目標を明確に持ち、活動に対する意欲を高めた。

１学期は、キーワード調査を手始めに、グループ内で個別調査、共有を繰り返し、研究テーマを設定した。リサーチクエスチョン、研究手法をグループ内で話し合い、「グループワーク進捗状況報告書」によってゼミ担当教員とも進捗状況を共有しながら進め、そこから研究計画書作成に取り組んだ。

２学期には、日本プレゼン・スピーチ能力検定協会大阪代表、たつみ都志氏による、目・声・手を活かすワークショップを特色選抜入学生（GLiS）が２回受講し、身につけたスキルを１年生他クラスに出向いて授業をすることで、協働的な学びを促進させた。

「課題研究項目別チェック表」を用い、研究計画の満たすべき要件をグループ内の生徒どうしでチェックし、またゼミ指導担当者がチェックすることによって、自分たちの研究の足りない部分を見つけ、その点を改善していくという流れをつくった。実際にリサーチを行う上でも、客観的なエビデンスを重視することを心掛けさせた。

本校を訪れた台中市立台中第二高級中等学校生２０名に対して、５つのグループがアンケートをとり、また、Google フォームを活用して台中市立台中第二高級中等学校生や教員に対して３つのグループがアンケートをとって、日本の高校生のデータとの比較を行い新たな問いを立てるなど工夫を凝らした。

合同ゼミ成果発表会でポスター発表を全グループが行い、学年全体で代表６グループを選抜した。代表６グループは、１月の校内成果発表会で神戸大学の石川慎一郎教授との質疑応答から学んだことを生かし、その校内成果発表会で選抜された３グループが伊丹アイフォニックホールでの課題研究成果発表会に臨んだ。質疑応答で企業の方からの質問にひるまず真摯に向き合う姿勢、着眼点の良さが評価されたグループもあった。

希望者を選考した１９名の生徒は１２月に台湾フィールドワークに行き、台中市立台中第二高級中等学校生の自宅にホームステイして、自らの課題研究のテーマについて家庭や学校で調査や発表や議論を行った。台中第二高級中等学校は、職員、生徒ともに大変協力的で、授業内に英語でプレゼンとディスカッションを行い、台湾の生徒から多くのフィードバックをもらうことができた。帰国後、その成果をグループで共有し、課題研究に活かした。

台湾フィールドワーク参加者のうち３名が第７回「国際問題を考える日」（兵庫県教育委員会・大阪大学・WHO 神戸センター主催）のポスターセッションで他校生から刺激を受け、プレゼンテーションへの意欲をさらに高めた。

全生徒が、１年間の研究の成果を研究論文の形でまとめた。

学期ごとや報告会、発表会ごとに、教員と生徒相互の評価をルーブリックで行うようにし、コメントも付けてフィードバックすることを行ったので、各グループは、自らの研究を見直す機会、参考意見を聴く機会が多くあった。また、学期ごとにリフレクションシートで自己評価と学びや研究成果を言語化し記録した。

《第２学年》

第２学年では、ニューヨーク・イタリアを対象地域とし、個人単位で問題発見から解決に至る課

題研究に取り組んだ。課題の発見から仮説の立て方、リサーチの方法等、課題研究の手法やリサーチペーパー作成について、ALT 等から主に英語で年間通して学んだことで、プレゼンテーションなど英語でのアウトプット能力が向上した。今年度はより早期の１年の３学期からテーマ設定やリサーチに取り組むことで、一層時間をかけて手厚く個別に指導助言をしてテーマやリサーチプランを熟考する機会が増え、テーマ設定の多様性や研究内容の深化が進んだ。

６月に各対象地域別のフィールドワークの選考会を国内調査とフィールドワーク計画のプレゼンテーションの形で行った。夏季休業中には、一般社団法人 Glocal Academy 代表理事、岡本尚也氏に来校していただき、各生徒が自らの研究で行き詰っている点などを質問し、それに対する岡本氏の指導を SGH 継続生全員が共有することによって、フィールドワークに向けて課題研究の内容や調査方法を再考した。全員が、希望する地域でのフィールドワークを行い、現地でのフィールドワーク後も国内でもリサーチを継続させながら、１１月の国別成果発表会、１２月の校内成果発表会での代表選考に向けてプレゼン内容の修正を繰り返しリサーチペーパーも完成させていった。代表者は１月の成果発表会で発表を行い、発表者以外の生徒も発表会運営の様々な役割を担った。

また、SGH 全国高校生フォーラム、第７回「国際問題を考える日」、「WWL・SGH×探究甲子園」では、英語によるポスタープレゼンテーションなどを行い、聞き手との実りある対話を進め、豊かな表現力やコミュニケーション能力を身に付けるとともに、論理的思考力を培った。

学年全員を対象として７月に海外大学フェアを実施し、９カ国の大学関係者等による各国の大学事情や入試制度に関する話を聞いたことで、海外の大学への興味・関心が芽生え、将来の進路選択の幅が広がる生徒が現れた。

《第３学年》

２年生の２学期以降、論文作成をおこない、修正を繰り返し、３年生の１学期で仕上げた。事後に国内や海外に連絡を取り、追加のリサーチを行う者もあり、探究の深化につなげた。SGH 活動の発信還元として、学校祭での来場者への SGH 活動の展示とアンケート調査、2 年生の SGH 継続生とともに伊丹市内の複数の小学校へ出向き、英語アクティビティ出前授業を実施した。

２学期以降は、今後のキャリアを見据えて活動の総括を行った。課題研究を振り返って総括することで、どのように社会に貢献するのかという「三方よし」の考えが深まり、SGH 活動を活かして大学に合格、進学する生徒が複数名出た。

②フィールドワーク内容

《第１学年》

姉妹校提携を結んでいる台湾の台中市立台中第二高級中等学校を本校生１９名が１２月に訪問し、台中二中生の自宅にホームステイしながら、フィールドワークを行った。

１９名の選考に当たっては、エントリーしてきた生徒にフィールドワーク計画のプレゼンを準備させ、夏季休業中に面接を兼ねてプレゼンテーションを行った。生徒は４人グループで進めているテーマを発展させる形で、英語のプレゼンテーション原稿を作成し、台湾ではプレゼンテーションと実地調査を行った。

３年目の中間評価を受け、４年目、５年目は、それまでのビジネスアイディアを英語にして発表する形式から、食と健康に関する探究に重点を移行させた。また、事後の活動を大事にし、調査結果の分析を年度末の論文に活かせるようにして、次年度への継続をよりスムーズにした。

現地でのディスカッションや街頭調査において、台湾の高校生の協力が得られたことで、フィールドワークの内容を課題研究に直結させやすくなった。事前準備では、ALT による昼休みの「ランチミーティング」や発表内容の英語の指導を行った。明確な課題に基づいた問題解決に至る道筋が見えるプレゼンテーションであることに意識を向けさせ、本番での発表を聞き手に強くアピールするものへと進化させた。データの読み取りやアンケートのとり方など、約３か月に及ぶきめ細かな指導を継続した結果、生徒は探究学習の基礎力が身についたといえるまで成長した。

《第２学年》

今年度の２年 SGH 継続生徒は、２チームに分かれ、２学期にニューヨーク・イタリアでフィールドワークを実施した。

＜ニューヨークフィールドワーク＞

・企業訪問調査

日本料理店「梓」と Shake Shack 1 号店で、経営理念や集客戦略など、ビジネス展開上の工夫について学びを深め、各生徒の課題研究テーマについて、経営者側の視点からアドバイスを受けた。

・NY 姉妹校での Japan Fair 開催

プレゼンテーションとアンケート、および質疑応答を行った。また、バルーク高校パートナーと授業に参加し、NY の高校生の積極的な授業参加態度に刺激を受けた。学年集会で日本文化紹介を行い、空手や日本舞踊を披露し交流を深めた。

・コロンビア大学訪問

学生にアンケート調査やインタビュー調査を行った。大学生活や将来の夢などを会話することができた生徒もいて、英語でのコミュニケーションの経験を積んだ。

・街頭調査

各自の課題研究に関わる企業をリサーチし、チェルシーマーケットや各種スーパーマーケットの店舗を訪れて商品を購入したり、観察調査やインタビューを実施したりした。

＜イタリアフィールドワーク＞

・課題研究プレゼンテーションとディスカッション、高校生対象の Japan Fair 開催

食科学大学で学生対象に各自の課題研究についてプレゼンテーションと意見交換をした。また、ブラ・アルバの高校生に向けて日本文化紹介として茶道のお点前、お団子づくりを体験してもらったり、アンケート調査に協力してもらったりした。

・企業・団体訪問調査

食のテーマパークである FICO（ボローニャ）を訪問し、ボローニャ地域の郷土料理であるパスタの手作りワークショップやマルチメディアで体験しながら学べるパビリオンなどもあり、体験と知識を組み合わせることで学びを深めた。また、エコビレッジの Casa Rotta では、持続可能な農業や昔ながらのパン作りを体験し、効率や便利さを追求することと持続可能性の両立について考えた。それ以外でもそれぞれの生徒の課題研究テーマに沿って、給食センター、BIO ショップ、スーパーマーケット、市場、ヴィーガンレストラン、魚屋、観光協会などを訪問し、観察・インタビュー調査を行い、現地を訪れたことで新しい発見や課題が得られた。

・ホームステイ体験

ブラ市内の一般家庭で２泊３日のホームステイを体験した。現地の人々の生活や文化に触れ、交流を深め異文化理解につながった。特に、ホストファミリーの２家庭は小学校の先生のお宅であったため、生徒の課題研究のアンケート調査を小学校でしていただいたり、インタビュー調査にもご協力いただいたり、調査結果にご助言いただいたりと課題研究を進める上でもまたとない機会となった。

７　目標の進捗状況、成果、評価

＜目標の進捗状況、成果、評価＞

「三方よし」の精神を継承するグローバルビジネスリーダーの育成を目標とし、ア）好奇心を育てる、イ）多様性を受容する力を育てる、ウ）発信力を育てる、エ）論理的思考力を伸ばす、の４項目について検証・評価をしている（報告書　第３章（3））。検証方法は生徒アンケートによる自己評価、保護者アンケート、教員アンケートによる評価、及び指導担当教員による評価、検定等の実績人数を用いて行った。なお、生徒の自己評価と指導担当教員による評価には、ルーブリックを使用している。（報告書第４章２、３）

ア）好奇心を育てる

・アンケート結果から、「国際交流に対する積極性」、「チャレンジ精神」、「グローバルな社会課題への関心」の３項目とも、SGH 生徒（１年では海外フィールドワーク参加生徒）の自己評価がそれ以外の生徒と比べて高い。ただし、SGH 生徒の年度ごとの比較で見ると、SGH プログラムを大きく変更する前の方が高い。これは、SGH 生徒（海外フィールドワーク参加生徒）の選考方法を変更したことが関係していると考える。変更前は、研究発表で評価の高かった者の中から海外フィー

ルドワークへの参加を希望する者を全学年から選考したが、変更後は、発表会を行う前に、希望者の中から選考を行った。
・海外大学フェアの実施によって海外進学に対する意識が大きく向上した。（報告書　第３章（3））
・教員が感じている生徒の変化について、アンケート結果から、チャレンジ精神に対する評価は、SGH プログラムを大きく変更する前の方が高い。変更前は、１年生では個人が食と健康に関する商品開発を目指すという「起業家精神」を促す面があったが、変更後は、４人グループで食と健康に関するリサーチクエスチョンを立てて、課題発見から解決提案型の探究活動を行う形にしたことが関係していると思われる。
・プログラムを変更し、フィールドワークや成果発表会の時期を変更したことによって、フィールドワーク参加が目標から探究活動の一部になった。その効果で、フィールドワーク終了後に、新たに見えた解決策のためにアンケートを取り直したり、外部の人にインタビュー調査を行ったりといった研究をさらに継続・発展させる生徒も多く現れた。
イ）多様性を受容する力を育てる
・アンケート結果から、異文化理解の深まりにおいて、特に SGH 生徒の数値が高く、生徒全体でも、この項目の自己評価が最も高かった。
・グローバルなものの考え方、他者と関わる社会貢献活動において、アンケート結果から、1 年生フィールドワーク参加生徒の意識の高さがうかがえる。
・３年生で行ったグローバルキャリア形成講座では、３年時までの探究活動を振り返り、気付きや学びを大学入学後の計画や将来のキャリアに繋げ、よりよい社会のためにどのように貢献できるかを再考する機会となり、「三方よし」の精神である社会貢献について深く考えるようになった。
ウ）発信力を育てる
・アンケート結果から、意欲とスキルの両面において、３学年とも SGH 生徒の自己評価が高いことがわかる。
・アンケート結果から、保護者は、スキルの面について学年を追うごとに身についたと感じている割合が高くなるが、意欲の面では学年を追うごとに評価がやや低下している。1 年では全員が SGH 活動に参加しているため、意欲が目に見えやすいが、２、３年では一部の SGH 継続生のみになっていること、学校生活の中では、SGH 関連以外の場面でも発信する場面があること、２、３年では１年と比べて人間関係がある程度定まり固定化されやすいことなどが要因として考えられる。
・教員が感じている生徒の変化についても、発信力のスキルの面が高評価であった。
・生徒の探究活動の内容やそれを支えるリサーチスキルと思考力、日英両言語による発信力は５年で大きく変化し、それは、英語外部検定の結果（報告書　第３章２（5））や、次のエ）の項目で述べる GPS-Academic の結果にも表れている。
・英語外部検定の結果は、３年間の伸長点数平均比較で見ると、SGH２期生では、２年まで SGH 活動を継続した生徒の平均値が 302.0 であるのに対し、継続しなかった生徒の平均値が 219.5 であり、SGH 継続生の伸びが大きいことがわかる。SGH３期生でも、SGH 継続生の平均値が 221.1 であるのに対し、継続しなかった生徒の平均値が 185.3 であり、同様のことが言える。
エ）論理的思考力を伸ばす
批判的・協働的・創造的思考力を測定し、上から S・A・B・C・D の５つのレベルで評価する GPS-Academic（ベネッセコーポレーション）の今年度の結果（報告書　第３章２（4））から、以下のことが読み取れる。（高校卒業時の到達目標はレベル A となっている。）
・３年生は批判的思考力、協動的思考力、創造的思考力、３つすべての思考力において３割から４割弱がレベル A 以上に属しており、３つの思考力のバランスが良い。
・昨年度との比較から、学年が進行するにつれて上位のレベルが増えていることもわかり、力がついていることが読み取れる。
・４年間で、どの学年においても C・D レベルが減少し、S・A レベルを増加することができている。
・SGH 継続生はそれ以外の生徒と比べて、３つの思考力とも S・A レベルの割合が高い。SGH 継続生は、テーマ設定から研究論文作成までの間、担当教員や ALT とやりとりしながら研究のやり直しや修正を何度となく行っている。これらの活動が３つの思考力の伸長に大きく影響していると考える。

＜SGH 中間評価を受けてのこれまでの改善・対応状況＞

次の点について、平成３０年度に変更を加え、良い結果が得られた部分が多かったので、令和元年度もこの形で行い、さらに指導体制などに改善を加えて実施した。

ア）１・２年生の課題研究プログラムの見直し

中間評価を受け、身近な興味関心から出発して「食と健康」への切り口を考え、それに関連した社会的な課題発見から解決に至る道筋を見通せるプログラムへと移行させていった。担当者や専門家との、また１年生はグループ、2 年生は SGH 継続生同士での対話に時間をかけたり、年度末の論文作成において自身の研究を振り返ったりする時間が、論理的思考を培う機会となっている。令和元年度は、すべてのグループに複数の教員が指導にかかわる指導体制にしたことによって、複数の異なる視点で指導助言することができるようになった。１年生のゼミ内成果発表会の場も合同ゼミ成果発表会に変更した。

イ）フィールドワークの位置付けの捉え直し

調査活動後に、リサーチを再度試みる時間を設け、その成果を発表会の場で発信できるように、フィールドワークの選抜方法と時期、成果発表会の時期をそれぞれ変更した。それに伴い、事前指導が英語力や発信力の向上だけなく、その前段階で不可欠なリサーチの手法、論理的・批判的思考の訓練となるように計画を組み直し、課題研究を深める一段階としてのフィールドワークの位置付けを明確にした。

８　５年間の研究開発を終えて

（１）　教育課程の研究開発の状況について

「三方よし」の精神を継承する GBL（グローバルビジネスリーダー）育成プログラムの開発を目指して研究開発を行ってきた。１年生では全員に「食と健康」に関する課題研究に４人グループで取り組ませることにより、探究活動の基礎となる考え方を習得し、リサーチクエスチョンの設定の手法や、エビデンスに基づくロジックを重視した検証の重要性を学び、リサーチスキルとしての情報の収集力、データ分析力の基礎を身に付けることができる内容とすることができた。２年生では、SGH 継続生が、１年で身に付けた課題研究に必要な力を一層伸長させるため、新たに個人で課題研究のテーマを設定し、海外、国内フィールドワークを行うことにより、グローバルな視点で物事を見る力と、英語の型で発信できる４技能の伸長を図るプログラムとすることができた。３年生では、SGH 継続生がリサーチペーパーの完成を行い、研究成果を地域へ発信することにより、グローカルな視点で自らの研究内容を見直す機会とすることができた。

本校の SGH プログラムは、SGH 指定以前の教育課程で保障されていた他教科の時間を削ることなく、週当たり１時間の総合的な探究の時間の内容を大きく改変・充実させることによって行い、さらに各学期末の特別編成時間割において数時間を確保して行った。１年生は全員が SGH プログラムに参加したが、全員に対しての指導はできるだけこの時間内で行えるようにプログラムを計画した。一方で、台湾、アメリカ、イタリアの各海外フィールドワークに参加する生徒に対しては、昼休みや放課後、夏季休業中等の課外の時間に、延べ４０時間程度指導した。また、１年生では、合同ゼミ成果発表会で選抜された６グループ（２４人）や校内成果発表会で選抜された３グループ（１２人）に対して、放課後に延べ３０時間程度を指導に充てた。その他、校外での各種発表会に参加した生徒に対しては、昼休みや放課後に延べ４０時間程度の指導を行った。

SGH プログラムの研究開発に取り組んだことにより、校内組織も改変され、探究的な活動を行っていくための体制がつくられた。SGH プログラムを主として計画、立案する部署として企画部が校内組織として設置された。

SGH の指定を受けてからは、原則全職員が総合的な探究の時間を担当するようにしたため、教員１人当たりの授業持ち時間数は増加したが、全職員がほぼ毎年、何らかの形で探究的な活動の指導にかかわることになり、企画部がプログラムを提示する場である総合担当者会議も各学年で年間１０回程度開かれ、プログラムの進め方について教員間で活発に議論が行われる機会も格段に増加した。

外部講師を招いて探究活動の進め方について等の講演会や講習会を生徒向けや教員向けに行う機会も格段に増加した。

以上のような様々な要因、効果により、この５年間で、本校における探究的な活動を行う上での意

識向上が進み、教員の指導力も大きく向上した。
１年生で全生徒に SGH プログラムを行ったことは、困難な面もあったが、学校全体として探究的な学習を当たり前のこととして取り組む機運を生むことに大きく役立ったと考える。
以上のように、５年間の試行錯誤を経て、探究学習のひとつの「型」を編み出すことができたので、目標とするプログラム開発は達成できたと考える。

（２） 高大接続の状況について
本校では、SGH プログラムの開始当初から、立命館大学、関西学院大学、神戸大学に協力をいただいている。
立命館大学には、食マネジメント学部の教員の方々に、生徒向けの講演会をしていただいたり、生徒の研究計画への個別の助言指導をしていただいたり、生徒の成果発表会において質疑や評価、講評をしていただいたりした。また、年度によっては、生徒のフィールドワーク先として、大学に出向いて課題研究の発表やインタビュー等をさせていただいたりもした。
関西学院大学には、SGH 甲子園で本校生徒が毎年発表を行ったり、SGH 活用入試で高校での探究活動の経験を活用して受験し合格した者も毎年出ている。SGH のプログラムではないが、１年生の特色クラス４０人が理工学部のリサーチフォーラムに続けて参加もしている。
神戸大学には、複数の教員の方々に、生徒向けの講演会をしていただいたり、生徒の研究への個別の助言をしていただいたり、生徒の成果発表会において質疑や評価、講評をしていただいたりした。また、SGH のプログラムではないが、１年生特色選抜入学生（GLiS）が大学に出向き、理学部の模擬授業を受講している。
その他、京都大学の課題研究発表会において本校生がポスター発表を行ったり、大阪大学が主催者としてかかわっている「国際問題を考える日」に毎年生徒が参加し発表を行っている。
大学の単位履修制度については、設置していない。

（３） 生徒の変化について
生徒へのアンケートの結果（報告書　第３章（3））の中で、SGH 生と SGH 外生の違いに注目してみてみる。ここで、SGH 生とは、２、３年生では、過去に国内外のフィールドワークに一度でも参加した者を指し、１年生では全員が SGH プログラムに参加したが、その中で国内外のフィールドワークに参加した者を SGH 生としている。SGH 外生とはそれ以外の生徒を指す。
今年度３年生だった７２回生のアンケート結果では、「好奇心」に関する項目、「多様性」に関する項目、「発信力」に関する項目の全８項目すべてにおいて、SGH 生と SGH 外生との間で肯定的な回答の割合に大きな差がみられた。また、昨年度卒業の７１回生から今年度１年生の７４回生までの１年次の比較でも、同様の傾向が見てとれる。これらの結果から、SGH プログラムは、SGH プログラムで伸ばしたい力を高校入学後に付けさせるために有効であったことが、生徒の実感調査の面として言える。
次に、１年次の SGH 外生、つまり、SGH プログラムを週１回の総合的な探究の時間で取り組んだ生徒について分析してみる。８項目の質問のうち、今年度の１年生の SGH 外生が肯定的な回答をした割合が６０％を越えたのは、「高校入学以降、異文化理解が深まった」、「積極的に他者と関わってコミュニケーションをとる意欲が向上した」の２項目であった。過去の回生と比べると、どちらの項目も SGH４年目、５年目に当たる７３回生、７４回生の肯定的な回答の割合が有意に高かった。このことは、中間評価後のプログラム変更の効果であると考えられる。これ以外の項目で、中間評価後のプログラム変更で有意に向上したと考えられる項目は、「高校入学以降、チャレンジ精神が身についた」、「高校入学以降、グローバルな社会課題への関心が深まった」、「高校入学以降、グローバルなものの考え方ができるようになった」の４項目が挙げられる。逆に、中間評価後のプログラム変更で有意に下降した項目は１つもなかった。
本校では初めて SGH１期生から海外進学者が複数出て、その流れは継続している。また、１期生では大学１回生で起業した生徒も出た。
以上は生徒全員のアンケート結果からの分析であるが、生徒を指導していて感じさせられるのは、生徒一人ひとりの個人に目を向けると、この SGH プログラムの効果は生徒によって大きく異なるということである。生徒自身がプログラムの活動に意味を見出すことができるようにプログラムを立案

しているが、それが意欲的、自発的な活動につながらなければ、生徒の変容にはあまりつながらない。しかし、前向きにプログラムに取り組んだ生徒には、明らかに大きな効果を及ぼしており、これからの社会を生きていくうえで貴重な学びをすることができたであろうことを確信させられる。その意味で、この SGH プログラムによって人生が変わるくらいの経験をすることのできた生徒も多くおり、全体のアンケート結果の数字だけでは見えてこない生徒の変化であると考える。そのことは、卒業生追跡調査の自由記述欄の記述からもうかがい知ることができる（報告書　第３章（7））。

（４） 教師の変化について

今年度の教員アンケートの結果（報告書　第３章（3））によると、高校入学後の生徒の変化について、肯定的な意見が８０％を越えた質問項目は、全８項目のうち「異文化理解が深まった」、「積極的に他者と関わってコミュニケーションをとる意欲が向上した」、「プレゼンテーション力、表現力、発信力が身についた」の３項目であった。それ以外の５項目についても、７０％を越えるものが４項目あり、SGH 活動を通じて生徒に身に付けさせたいと考える項目の大半について、多くの教員が効果を認めている。

本校の SGH プログラムの良い点として本校の教員が最も評価している点は、「全員参加型であること」、「総合的な探究の時間の活性化」である。他方、最も問題と感じている点は、「活動時間の不足」であった。また、今年度自身に起こった変化について最も回答数が多かったのは、「多忙感の増加」であった。「アクティブラーニングのスキル向上」、「日本の将来に対する意識」、「フィールドワークの指導力向上」、「他の教師との協働性」などについても一定数の回答が見られた。これらの回答結果となった理由や背景については、のちに述べる（６）で触れることにする。

一方で、（１）でも述べたように、この５年間で、本校における探究的な活動を行う上で、教員の意識は大きく向上し、指導力も伸びたと言える。特に、アンケート結果にもあったように、全員参加型であることによって、学校全体として探究的な学習を当たり前のこととして取り組む機運を生むことができたと考える。

（５） 学校における他の要素の変化について（授業、保護者等）

総合的な探究の時間以外の各教科への波及効果については、各教科の授業の中に、探究活動的な要素を取り入れることの必要性について、SGH 関連の教員研修会などを経て、認識が教員間で共有されてきている。実際に授業に取り入れることができている割合はこれから高まっていくことが期待される。授業を工夫して、批判的思考力、協動的思考力、創造的思考力を伸ばすにはどうすればいいか、教科内で工夫をする試みも進められている。新学習指導要領の実施に向けて、SGH の取り組みで先駆けて行ってきた取り組みが、今後各教科の指導においても結実していくように取り組んでいきたい。

保護者のアンケート結果によると（報告書　第３章（3））、子どもに関する回答で、肯定的な回答の割合が際立って高かったのが、「自主的に他者と関わって社会貢献活動に取り組む意欲が向上した」（９７％）、「積極的に他者と関わってコミュニケーションをとる意欲が向上した」（９９％）であった。一方で、肯定的な回答の割合が低かったのは、「高校入学以降、国際交流活動に積極的にかかわるようになった」（２４％）、「高校入学以降、グローバルなものの考え方ができるようになった」（３６％）である。１年生では全生徒がそれまで知らなかった者どうしでグループを組み、課題研究活動を行ってきたが、国際交流に直接かかわった生徒は３０名程度で少なかったのでこのような結果になったと思われる。生徒自身と保護者の回答に開きがある項目も多いので、保護者に対して学校での活動の理解を深めていただく取り組みがさらに必要である。

その他として、地元のグローバル企業である小西酒造や松谷化学工業とは、SGH の申請時からいろいろとアドバイスをいただいたりして関係を深め、SGH 指定後も企画推進委員のメンバーとして入っていただいたり、生徒向けの講演会をしていただいたり、成果発表会での質疑をしていただいたりと、様々な面で協力していただいた。三井住友銀行とも、企画推進委員のメンバーに入っていただいてアドバイスをいただいたり、成果発表会での質疑をしていただいたりと、様々な面で協力していただいた。これらの地域とのつながりは、SGH 指定終了後にも本校の財産として継承していくことができると考えている。

（６） 課題や問題点について

課題は大きく分けて３つあると考えられる。生徒の活動時間の面、教員の活動時間の面、予算の面の３つである。

まず、生徒の活動時間の面について述べる。前述したように、本校の SGH プログラムは、SGH 指定以前の教育課程で保障されていた他教科の時間を削ることなく、週当たり１時間の総合的な探究の時間で行っている。その時間で行えることについては限りがあるため、海外フィールドワークに参加する生徒や、各発表会で選抜された生徒については、その活動の多くが昼休み、放課後、長期休業中等の課外の時間となった。海外フィールドワークに行かず、選抜もされなかった生徒と同じように各教科の宿題や予習、復習と小テストの学習があり、さらに、ほとんどの生徒は部活動にも参加しているため、海外フィールドワークに参加したり、選抜で選ばれたりした生徒は多忙であり、時間との闘いの面もあった。もう少し時間をかければ研究内容が深められるにもかかわらず、それがかなわなかった場面も多かった。

この点については、SGH 活動を行う生徒を全体から分けて、その生徒用の教育課程を組むことによってかなり緩和できる可能性があるので、そのような形で行った他の SGH 指定校の取り組みも参考にして、今後の取り組みに生かしていくことも必要かもしれない。

２点目の教員の活動時間の面についても同様である。前述したように、生徒の探究活動の指導のかなりの部分が課外の時間となったこと、及び、総合的な探究の時間の指導を手厚くする目的で原則として全職員が総合的な探究の時間を担当するようにしたことによる持ち時間数の増加などが原因で、教員の多忙感が増した（報告書　第３章（3））。教員の多忙感が増すことは、指導の質を上げるための取り組みを行う時間を確保しにくくする面がある。もう少し余裕があればさらに質の高い指導を行うことができ、生徒はもちろん、教員自身の達成感や充実感にもつながると考えられ、指導の好循環が生まれる。教員配当を増やすことで根本的な解決になるが、現実には教育課程の工夫や業務内容の精選等で対応していくことが必要になる。

３点目の予算の面について述べる。本校では３つの国に海外フィールドワークに行ったが、これは SGH 予算のおかげである。SGH 予算によって引率者の旅費を確保できたので実施することができた。また、３か国のうち、アメリカ（ニューヨーク）とイタリアは、生徒の家庭が負担する額が大きかったが、SGH 予算のおかげでその一部を補助することができたことも実施する上で大きかった。SGH の指定終了後は、教員の活動時間の面と合わせて、これらの予算が確保できないこともあり、海外フィールドワークについては見直しを行い、国際交流事業として海外とのつながりを維持していくことを計画している。

SGH 予算のおかげで、探究活動に不可欠と言ってもよいタブレット型パソコンを購入できたことも大きかった。しかし、まだまだ台数や通信環境の面で整備が必要である。一方で、このような新たなＩＴ機器の導入が進むほど、その管理業務という仕事が新たに教員にのしかかることになる。前述の教員の多忙感が増すひとつの要因となっているのは課題である。

（７） 今後の持続可能性について

今回開発したプログラムは、来年度以降も、探究学習の「型」の部分を残し、必要な変更を加えた上で、本校での課題探究学習がより充実していくように進めていく。

具体的には、１年生では、「食と健康」のしばりをなくし、生徒が自分の興味・関心に沿ったテーマについて課題を設定して探究活動を行う。新学習指導要領の「総合的な探究の時間」の目標にある「実社会や実生活と自己の関わりから問いを見いだす」ことができるよう、地域と関連付けた課題設定を行わせ、自分の探究が地域にどう貢献できるかを考えさせる。４人グループで行うことや、ゼミ形式などの指導体制、指導者との進捗状況等の共有ツールの用い方、段階的な成果発表の場を設けグループを選抜していく形式など、基本的な「型」は SGH で開発したものを継承する。

２年生では、１年生で身に付けた課題研究の手法等の基本知識を活用して、より深く探究活動が行えるように、個人またはグループで、１年間かけてテーマ設定から研究論文作成までを行う取り組みを新たに始める。

現行の２年生では、SGH 継続生が海外フィールドワークを含めた個人の探究活動、SGH 継続生以外が文系が論述総合（グループ活動）、理系が実験科学（グループ活動）を行っていたが、それに変わる取り組みである。SGH 継続生の指導に手厚く割り当てていた教員配置を学年全体に配分するこ

とにより、１教員で１２～１５人の生徒を指導する体制をつくって行う。この各教員が担当するゼミの中で、今まで SGH 活動の中で培ってきた手法の活用や関係協力機関との連携を行っていけたらと考えている。各段階でゼミ内報告会や学年全体の成果発表会、学校全体の成果発表会を行い、これまで同様、発表の機会も多く設ける。また、校外で発表する機会も維持して、レベルの高い意欲的な研究が行えるように促していきたい。また、全員が研究論文を仕上げて１年間を終えるスケジュールとする。

３年生では、２年生までで行ってきた課題研究を発展させたいと考えている生徒には、課外で指導を行い、高校での探究活動を活用した大学入試等に臨ませたい。

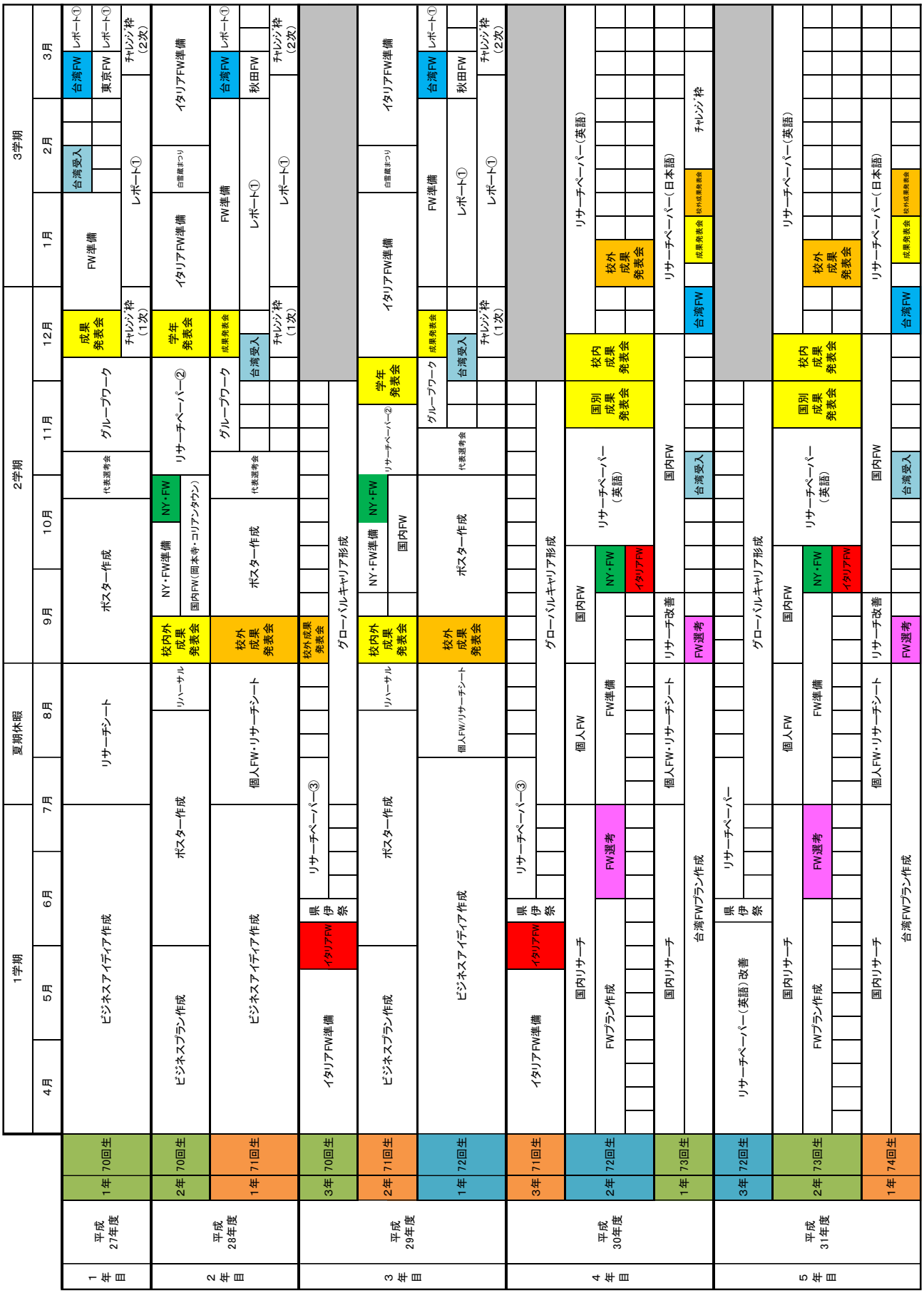
３年生での総合的な探究の時間では、ゼミ形式ではなく、クラス単位で授業を行う。言語表現活動と協働的活動に重点を置き、プログラムを立案する。

海外フィールドワークについては、（６）で述べたように、SGH の指定終了後は、教員の活動時間の面に加えて、予算が確保できないこともあり、見直しを行い、国際交流事業として海外とのつながりを維持していくことを計画している。

【担当者】

担当課	高校教育課	ＴＥＬ	０７８－３６２－９４４７
氏　名	辻　登志雄	ＦＡＸ	０７８－３６２－４２８８
職　名	主任指導主事	e-mail	Toshio_tsuji@pref.hyogo.lg.jp

4　SGH スケジュール　【年度別】



5 総合的な学習（探究）の時間の年間計画

1年	授業数	SGH
4月12日（金）	①	オリエンテーション
4月19日（金）	②	探究講座(1)（クラス単位）
4月26日（金）	③	探究講座(2)（クラス単位）
5月3日（金）		祝日
5月9日（木）	④	4分野講演会（立命館大学 小沢氏）
5月17日（金）	⑤	講演会「探究入門」（神戸大学　石川氏）
5月24日（金）		中間考査
5月31日（金）	⑥	「問い」をシェアリング & 研究テーマ決め
6月7日（金）	⑦	グラフの読み方&「問い」を立てる
6月14日（金）		県伊祭
6月21日（金）	⑧	発表準備
6月28日（金）	⑨	発表準備＆リフレクションについて
7月5日（金）		期末考査
7月11日（木）	特活	企業講演会（小西酒造・松谷化学）
7月12日～18日	⑩	ゼミ内中間報告会（研究テーマについて）
	⑪	テーマ修正＆夏期リサーチ計画
9月6日（金）	①	研究計画書作成＆提出
9月13日（金）	②	GLiS生によるプレゼン講座
9月20日（金）	③	リサーチ開始＆発表準備
9月27日（金）		体育祭
10月4日（金）	④	合同ゼミ中間報告会
10月11日（金）	⑤	リサーチまとめ・分析＆ポスターの説明
10月18日（金）	⑥	ポスター作成／台湾生に対する調査準備
10月25日（金）		中間考査
11月1日（金）	⑦	ポスター作成／台湾生に対する調査準備
11月8日（金）	⑧	ポスター作成／台湾リサーチまとめ分析
11月15日（金）	⑨	発表準備
11月22日（金）	⑩	合同ゼミ成果発表会(1)
11月29日（金）	⑪	合同ゼミ成果発表会(2)
12月6日（金）		期末考査
12月13日（金）	特活	GPS Academic 2コマ
12月23日（月）	特活	GPS振り返りワーク
12月13日～20日	⑫	研究要綱作成
1月10日（金）	①	研究要綱完成
1月17日（金）	特活	校内成果発表会（5,6限）
1月24日（金）	②	研究論文作成／発表者リハーサル
1月30日（木）	特活	校外成果発表会(午後)
1月31日（金）	③	研究論文作成
2月7日（金）	④	研究論文提出
2月14日（金）		入試準備
2月21日（金）		学年末考査
3月2日～10日	特活	GPS振り返り

2年	授業数	SGH（主に国内）	論述総合	実験科学
4月11日（木）		身体測定		
4月18日（木）		遠足		
4月25日（木）	①	リサーチテーマ作成(1)	ガイダンス	ガイダンス(緑創館)
5月2日（木）		祝日		
5月9日（木）	②	リサーチテーマ作成(2)	NIEグローバル課題探究	Ⅰ－1
5月16日（木）	③	中間報告会(プレ選考)	NIEグローバル課題探究	Ⅰ－2
5月23日（木）	④	FW計画(1)・国内リサーチ	テーマ探し	Ⅰ－3
5月30日（木）	⑤	FW計画(2)・国内リサーチ	グループワーク(1)	Ⅰ－4
6月6日（木）	⑥	探究テーマ修正(1)	グループワーク(2)	Ⅰ－5
6月13日（木）	⑦	探究テーマ修正(2)	グループワーク(3)	Ⅰ－6
6月20日（木）	⑧	FW選考①	発表内容まとめ	Ⅰ－7
6月27日（木）	⑨	FW選考②	クラス内発表	Ⅰ－8
7月4日（木）		期末考査		
7月8日～17日	⑩	FW準備	秋の学年発表会に向けて	Ⅰ－9
7月12日（金）	特活	海外大学フェア（2～4限）		
8月28日（水）		講演会(9:30～10:30)		
9月5日（木）	①	国内中間報告会	グループワーク(4)	Ⅱ－1
9月12日（木）	②	プラン改善	グループワーク(5)+レポートの書き方	Ⅱ－2
9月19日（木）	③	立命館大への準備	ポスター作成(1)	Ⅱ－3
9月26日（木）		体育祭予行		
10月3日（木）		大学模擬授業		
10月10日（木）	④	立命館大へ	ポスター作成(2)	Ⅱ－4
10月17日（木）	⑤	まとめ・発表準備	発表準備＋レポート作成(1)	Ⅱ－5
10月24日（木）		中間考査		
10月31日（木）	⑥	まとめ・発表準備	ゼミ内発表会	Ⅱ－6
11月7日（木）	⑦	国別成果発表会(1)	学年発表会代表チーム選出	Ⅱ－7
11月14日（木）		芸術鑑賞会		
11月21日（木）	⑧	国別成果発表会(2)	レポート作成(2)	Ⅱ－8
11月28日（木）	⑨	総合発表会		
12月5日（木）	⑩	リサーチペーパー	レポート完成・提出	Ⅱ－9
12月12日（木）		期末考査		
12月13日（金）	特活	GPS-Academic（2コマ）		
12月18日（水）	特活	SGH校内成果発表会（3，4限）		
12月23日（月）	特活	GPS振り返りワーク		
1月9日（木）		修学旅行		
1月16日（木）	①	リサーチペーパー	小論文学習①	
1月23日（木）	②	発表会打ち合わせ	小論文学習②	
1月30日（木）	③	校外成果発表会	小論文模試	
2月6日（木）	④	リサーチペーパー	小論文からの発展	
2月13日（木）	⑤	リサーチペーパー	小論文からの発展	
2月20日（木）		学年末考査		
2月27日（木）		学年末考査		
3月2日～10日	特活	GPS振り返り		
	特活	小論文講演会		

40分

3年	授業数	論述：表現活動	SGH
4月8日（月）		始業式	
4月15日（月）	①	YF	県伊祭準備・リサーチペーパー
4月22日（月）	②	論述ウォーミングアップ①	県伊祭準備・リサーチペーパー
4月29日（月）		祝日	
5月6日（月）		祝日	
5月13日（月）	③	論述ウォーミングアップ②	県伊祭準備・リサーチペーパー
5月20日（月）	④	YF	県伊祭準備・リサーチペーパー
5月27日（月）		中間考査	
6月3日（月）	⑤	YF	県伊祭準備・リサーチペーパー
6月10日（月）	LHR	YF（6/27LHR振替）	
6月17日（月）		県伊祭代休	
6月24日（月）	⑦	志望理由書の書き方①	
6月27日（木）	⑧	志望理由書の書き方②	
7月1日（月）		期末考査	
		論述：テーマ別	グローバルキャリア形成
9月2日（月）		始業式・課題考査	
9月9日（月）	①	導入・テーマ①	GC形成講座
9月16日（月）		祝日	
9月18日（水）	②	テーマ①	GC形成講座
9月23日（月）		祝日	
9月30日（月）	③	テーマ②	GC形成講座
10月7日（月）	④	テーマ②	GC形成講座
10月14日（月）		祝日	
10月15日（火）	⑤	テーマ③	GC形成講座
10月21日（月）		中間考査	
10月28日（月）	⑥	テーマ③	GC形成講座
11月4日（月）		祝日	
11月11日（月）	⑦	テーマ③	GC形成講座
11月18日（月）	⑧	テーマ④	GC形成講座
11月25日（月）	⑨	テーマ④	GC形成講座
12月2日（月）	⑩	テーマ④	GC形成講座
12月9日（月）		期末考査	
12月13日（金）	特活	GPS－Academic(2コマ)	
12月23日（月）	特活	GPS振り返りワーク	
1月13日（月）		祝日	
1月20日（月）		センター自己採点（午後）	

← 賛成・反対で書く。（ミニ）ディベートなど。

6　SGH 年間行事実施一覧

日付		内容	参加者数（人）			発表者数（人）			所要時間(分)	備考(講師名や校内・校外など)
			1年	2年	3年	1年	2年	3年		
4月1日	月	企画部会議（部内分掌について等）							75	
4月2日	火	企画部会議(1年担当者会議に向けて)							125	
4月4日	木	企画部・総務部合同会議(台湾受け入れ)							50	
4月4日	木	1年総合担当者会議(1)							20	
4月5日	金	GLiS 新入生へ平成30年度活動報告	40	39			39			
4月8日	月	2年総合担当者会議(1)							40	
4月9日	火	3年総合担当者会議(1)							40	
4月11日	木	1年総合担当者会議(2)							60	
4月12日	金	1年総合：オリエンテーション	280				2			校内
4月12日	金	3年 SGH：放課後ミーティング			20					校内
4月17日	水	2年 SGH：放課後ミーティング		10						校内
4月17日	水	企画部会議(1年担当者会議に向けて)							60	
4月19日	金	1年総合：探究講座(1)	280							校内
4月22日	月	3年 SGH：県伊祭準備・論文の進捗状況説明			20					校内
4月23日	火	企画部会議(FW 引率者について)							20	
4月25日	木	2年 SGH：ガイダンス,ALT 授業（ポスターと発表内容確認）		20						校内
4月25日	木	1年総合担当者会議(3)							40	
4月26日	金	1年総合：探究講座(2)	280							校内
5月7日	火	企画部会議(企画推進委員会について)							93	
5月9日	木	2年 SGH：ALT 授業と中間報告会の準備		10						校内
5月9日	木	1年総合：分野別講演会	280							校内 立命館大学 小沢道紀推教授
5月10日	金	企画部会議（台湾受け入れについて）							75	
5月10日	金	企画部会議（1年担当者会議に向けて）							40	
5月13日	月	3年 SGH：県伊祭の準備			20					校内
5月13日	月	企画部会議（台湾 FW について）							15	
5月14日	火	台湾受入 or FW 希望生徒対象：台湾生によるプレゼン	42		6					校内
5月14日	火	2年総合担当者会議(2)							45	
5月16日	木	2年 SGH：中間報告会兼 FW プレ選考		10			10			校内
5月16日	木	1年学年集会：阪大 Seeds などの外部講座について	280				3			校内
5月17日	金	2年 SGH：Lunch Meeting（3年生よりアドバイス）		10	17					校内
5月17日	金	1年総合：講演会 （探究テーマの決め方）	280							校内 神戸大学 石川慎一郎教授

日付		内容	参加者数（人）			発表者数（人）			所要時間(分)	備考(講師名や校内・校外など)
			1年	2年	3年	1年	2年	3年		
5月17日	金	企画部会議（1年ゼミワークについて）							140	
5月20日	月	3年SGH：県伊祭・小学校アクティビティーの準備			20					校内
5月21日	火	企画部会議（1年担当者会議に向けて）							80	
5月22日	水	企画部会議（1年担当者会議に向けて）							65	
5月23日	木	2年SGH：テーマ修正		10						校内
5月23日	木	1年総合担当者会議(4)							60	
5月27日	月	令和元年度SGH第1回企画推進委員会							60	講師4名
5月28日	火	企画部会議（1年担当者会議に向けて）							150	
5月29日	水	小学校英語アクティビティー出前授業事前打ち合わせ			2					校外（笹原小）
5月30日	木	小学校英語アクティビティー出前授業事前打ち合わせ			3					校外（摂陽小）
5月30日	木	2年SGH：テーマ修正・発表準備		10						校内
5月31日	金	1年総合：ゼミワーク（テーマ決定）	280							校内
5月31日	金	企画部会議（1年担当者会議に向けて）							43	
6月3日	月	3年SGH：小学校英語アクティビティーおよび県伊祭の準備			20					校内
6月4日	火	小学校英語アクティビティー出前授業事前打ち合わせ			2					校外（鴻池小）
6月5日	水	2・3年SGH：県伊祭準備		2	2					
6月6日	木	2年SGH：テーマ修正・発表準備		10						校内
6月6日	木	1年総合担当者会議(5)							25	
6月7日	金	1年総合：ゼミワーク（課題研究テーマ決定）	280							校内
6月7日	金	小学校英語アクティビティー出前授業事前打ち合わせ			2					校外（昆陽里小）
6月11日	火	企画部会議（1年担当者会議に向けて）							43	
6月13日	木	2年SGH：テーマ修正・発表準備		10						校内
6月15日	土	県伊祭：2,3年SGH展示		10	20					校内
6月18日	火	GTEC（2年生）Speaking Test		118						校内
6月19日	水	GTEC（2年生）Speaking Test		118						校内
6月20日	木	GTEC（2年生）Speaking Test		79						校内
6月19日	水	1年台湾FW参加希望者説明会	31							校内
6月20日	木	2年SGH：FW選考(1)		10			5			校内
6月20日	木	1年総合担当者会議(6)							24	
6月21日	金	1年総合：ゼミワーク（研究概要作成）	280							校内
6月21日	金	小学校英語アクティビティー出前授業事前打ち合わせ		9	11					校内
6月26日	水	企画部会議（運営指導委員会に向けて）							40	

日付		内容	参加者数（人）			発表者数（人）			所要時間(分)	備考(講師名や校内・校外など)
			1年	2年	3年	1年	2年	3年		
6月27日	木	2年SGH：FW選考(2)		10			5			校内
6月27日	木	2年海外大学フェア：打ち合わせ							30	
6月29日	金	1 年総合：ゼミワーク（研究概要作成）	280							校内
6月29日	金	SGH合同連絡協議会･事業別連絡会								校外(筑波大学)
7月2日	火	令和元年度SGH第1回運営指導委員会							75	講師4名
7月5日	金	小学校英語アクティビティー出前授業リハーサル		4	11					校内
7月8日	月	小学校英語アクティビティー出前授業(笹原小学校)		4	12		4	12		校外
7月8日	月	トビタテ！Japan説明会	5							校内
7月9日	火	企画部会議（海外FWについて）							55	
7月10日	水	1年総合：ゼミ内中間報告会	280							校内
7月10日	水	小学校英語アクティビティー出前授業リハーサル		2	11					校内
7月11日	木	GTEC（1,2年生）	280	315						校内
7月11日	木	2年SGH：FW準備		10						校内
7月11日	木	1年総合：企業講演会	280							校内 (株)小西酒造 西川広之氏 (株）松谷化学工業 多鹿直樹氏
7月11日	木	小学校英語アクティビティー出前授業(鴻池小学校)		2	11		2	11		校外
7月11日	木	2年海外大学フェア：事前準備							40	
7月12日	金	1 年総合：ゼミワーク（夏期リサーチ準備）	280							校内
7月12日	木	2年海外大学フェア		315						校内 講師9名
7月12日	金	小学校英語アクティビティー出前授業リハーサル		4	13					校内
7月16日	火	小学校英語アクティビティー出前授業(昆陽里小学校)		2	10		2	10		校外
7月17日	水	1年台湾FWエントリー生徒説明会	20							校内
7月17日	水	小学校英語アクティビティー出前授業(摂陽小学校)		2	10		2	10		校外
7月24日	水	GTEC(1年)　Speaking　Test	80							校内
7月25日	木	GTEC(1年)　Speaking　Test	80							校内
7月26日	金	企画部会議（1年担当者会議に向けて）							110	
7月26日	金	GTEC(1年)　Speaking　Test	80							校内
7月26日	金	2年SGH：海外フィールドワーク保護者会		9						校内
7月29日	月	GTEC(1年)　Speaking　Test	40							校内

日付		内容	参加者数（人）			発表者数（人）			所要時間(分)	備考(講師名や校内・校外など)
			1年	2年	3年	1年	2年	3年		
8月2日	金	企画部会議（1年担当者会議に向けて）							150	
8月22日	木	1年FW選考				8				校内
8月26日	月	1年FW選考				11				校内
8月28日	水	2年総合担当者会議(2)							45	校内
8月28日	水	3年総合担当者会議(2)							50	校内
8月28日	水	課題研究に関する職員研修会 および2年SGH生徒対象講演会		10						校内 Glocal Academy 岡本尚也氏
8月29日	木	企画部会議(1年担当者会議、来年度について)							110	校内
8月29日	木	2年SGH:ニューヨークFW保護者会		5						校内
8月30日	金	1年総合担当者会議(7)							36	校内
9月2日	月	始業式：小学校英語アクティビティー出前授業報告	280	315	312		2			校内
9月3日	火	1年台湾：集会	19							校内
9月4日	水	1年台湾：Lunch Meeting	19							校内
9月5日	木	2年SGH：ＦＷ準備および研究内容確認		20						校内
9月6日	金	1 年総合：ゼミワーク（研究計画書作成）	280							校内
9月9日	月	3年グローバルキャリア形成講座(1)			7					校内
9月10日	火	1年台湾FW保護者説明会(1)	19				1			校内
9月11日	水	1年台湾：Lunch Meeting	19							校内
9月12日	木	2年SGH：ＦＷ準備および研究内容確認		20						校内
9月13日	金	1年総合：プレゼン講座とゼミワーク	280			40				校内
9月15日	日	2年ニューヨークFW(～21日まで)		5						校外
9月18日	水	1年台湾：Lunch Meeting	19							校内
9月18日	水	3年グローバルキャリア形成講座(2)			6					校内
9月19日	木	2年SGH：ＦＷ準備および研究内容確認		5						校内
9月20日	金	1年総合：研究計画書作成	280							校内
9月25日	水	1年台湾：Lunch Meeting	19							校内
9月26日	木	企画部会議（1年担当者会議に向けて）							85	
9月27日	金	企画部会議（来年度以降の企画部の在り方等管理職と打ち合わせ）							40	
9月30日	月	3年グローバルキャリア形成講座(3)			5					校内
10月2日	水	1年台湾：Lunch Meeting	19							校内
10月3日	木	1年総合担当者会議(8)							30	
10月2日	水	1年台湾：Lunch Meeting	19							校内
10月4日	金	1年総合：中間報告会	280			280				校内

日付		内容	参加者数（人）			発表者数（人）			所要時間(分)	備考(講師名や校内・校外など)
			1年	2年	3年	1年	2年	3年		
10月7日	月	3年グローバルキャリア形成講座(4)			5					校内
10月7日	月	台湾受け入れ保護者会	19		2					校内
10月9日	水	1年台湾：Lunch Meeting	19							校内
10月10日	木	2年SGH：ＦＷ準備およびまとめ		20						校内
10月10日	木	2年SGH:イタリアFW保護者会		5						校内
10月11日	金	1年総合：リサーチ、分析、ポスター論文作成	280							校内
10月15日	火	3年グローバルキャリア形成講座(5)			5					校内
10月18日	金	1 年総合：リサーチ、台湾受け入れアンケート等	280							校内
10月24日	木	企画部会議（1年担当者会議に向けて）							95	
10月26日	土	2年イタリアFW（～11/1日まで）		5						校外
10月28日	月	3年グローバルキャリア形成講座(6)			4					校内
10月31日	木	2年SGH：まとめと成果発表会に向けて		10						校内
10月31日	木	1年総合担当者会議(9)							38	
11月1日	金	1年総合：代表選考会に向けて	280							校内
11月2日	土	台湾生徒受け入れ（～11/7）	19		2					校内
11月4日	月	高大連携課題研究合同発表会		1			1			校外(京都大学)
11月7日	木	2年SGH：国別成果発表会/FWまとめ		10			5			校内
11月8日	金	1年総合：代表選考会に向けて	280							校内
11月11日	月	3年グローバルキャリア形成講座(7)			4					校内
11月14日	木	企画部会議（1年担当者会議に向けて）							105	
11月15日	金	1年総合：代表選考会に向けて	280							校内
11月18日	月	3年グローバルキャリア形成講座(8)			4					校内
11月21日	木	2年SGH:国別成果発表会/リサーチペーパー作成		10			5			校内
11月22日	金	1年総合：合同ゼミ成果発表会	280			140				校内
11月25日	月	3年グローバルキャリア形成講座(9)			4					校内
11月27日	水	企画部会議（1 年担当者会議他打ち合わせ）							75	
11月28日	木	1年総合担当者会議(10)							20	
11月28日	木	企画部会議（2 年校内成果発表会打ち合わせ）							50	
11月29日	金	1年総合：合同ゼミ成果発表会	280			140				校内
12月2日	月	3年グローバルキャリア形成講座(10)			4					校内
12月3日	火	企画部会議（選考と1年担当者会議に向けて）							150	
12月5日	木	2年SGH:国別成果発表会/リサーチペーパー作成		10						校内
12月11日	水	企画部会議（1年担当者会議等）							180	
12月13日	金	GPS-Academic	277	310	311					校内

日付		内容	参加者数（人）			発表者数（人）			所要時間(分)	備考(講師名や校内・校外など)
			1年	2年	3年	1年	2年	3年		
12月13日	金	1年代表者集会	24							校内
12月13日	金	1年台湾：事前指導（放課後）	19							校内
12月13日	金	1年台湾 FW 保護者会(2)	19							校内
12月16日	月	1年台湾：事前指導（放課後）	19							校内
12月17日	火	1年台湾：事前指導（放課後）	19							校内
12月18日	水	GTEC		310						校内
12月18日	水	2年 SGH 校内成果発表会		310			6			校内 外部 ALT2 名
12月19日	木	GTEC	280							校内
12月20日	金	1年総合：研究要綱作成/発表スライド作成	280							校内
12月20日	金	1年台湾 FW（～25日まで）	19			19				校外
12月22日	日	2019年度 SGH 全国高校生ﾌｫｰﾗﾑ		2			2			校外(東京)
12月23日	月	GPS-Academic の振り返りワーク	280	310	311					校内
12月24日	火	終業式：ニューヨーク FW 発表	280	310	311		3			校内
12月26日	木	校外成果発表会打ち合わせ								校外(ｱｲﾌｫﾆｯｸﾎｰﾙ)
1月7日	火	企画部会議（総合担当者会議に向けて）							105	校内
1月7日	火	2年総合担当者会議(3)							30	
1月7日	火	1年総合担当者会議(11)							40	
1月10日	金	1年総合：研究要綱作成/発表スライド作成	278							校内
1月16日	木	2年 SGH：発表準備、ﾘｻｰﾁﾍﾟｰﾊﾟｰ		10						校内
1月17日	金	1年校内成果発表会	278			24				校内 神戸大学 石川慎一郎教授
1月23日	木	2年 SGH：校外成果発表会打ち合わせ		10						校内
1月24日	金	1 年総合：研究論文作成・代表者発表準備	278							校内
1月27日	月	企画部会議（総合担当者会議に向けて）							50	校内
1月29日	水	1年総合担当者会議(12)							35	校内
1月30日	木	課題研究校外成果発表会	278	10		12	2			校外(伊丹ｱｲﾌｫﾆｯｸﾎｰﾙ)講師6名
1月30日	木	令和元年度 SGH 第2回企画推進委員会							60	校外(いたみﾎｰﾙ会議室)講師6名
2月6日	木	2年 SGH：発表準備、ﾘｻｰﾁﾍﾟｰﾊﾟｰ		10						校内
2月6日	木	企画部会議(来年度について)							50	校内
2月7日	金	1 年総合：研究論文完成・国際問題発表準備	278							校内
2月11日	火	高校生国際問題を考える日	3	6		3	6			校外(神戸ﾌｧｯｼｮﾝﾏｰﾄ)
2月20日	木	令和元年度 SGH 第2回運営指導委員会								校内 講師5名
3月21日	土	探究甲子園		5			5			校外(関西学院大学)
3月23日	月	終業式：イタリア FW・台湾 FW 発表	278	310		2	2			校内

第 2 章　研究開発の内容

1　各学年の SGH プログラム

SGH プログラムを主に実施しているのは各学年の『総合的な学習（探究）の時間』で、どの学年も単位数は 1 である。各学年の SGH プログラムの概要は次の通りである。

(1)　第 3 学年

学期	内容	備考
1 学期	・リサーチペーパー修正・完成 ・学校祭での還元発信 ・小学校英語アクティビティー出前授業	 第 2 章 5(1)を参照 第 2 章 5(2)を参照
夏休み以降	・グローバルキャリア形成講座	

(2)　第 2 学年

学期	内容		備考
1 学期	・ALT's Lesson ・テーマ設定・リサーチプラン作成 ・中間報告会…リサーチプランについて(4 分発表＋4 分質疑応答) ・FW 計画 ・海外大学フェア ・FW 選考　(15 分発表＋5 分質疑応答)		 第 2 章 3(1)(ア)を参照 第 2 章 5(3)を参照
2 学期	イタリア FW グループ	ニューヨーク FW グループ	
	・フィールドワーク準備 ・イタリア FW ・FW 結果分析、まとめ	・フィールドワーク準備 ・ニューヨーク FW ・FW 結果分析、まとめ	第 2 章 5(1)(イ)を参照
	・リサーチペーパー作成 ・国別　成果発表会　（5 分発表＋3 分質疑応答） →　各国より 3 名を選考、12 月の校内成果発表会へ		第 2 章 5(4)を参照
	・2 年 SGH 校内成果発表会　（5 分発表＋3 分質疑応答） イタリア 3 名，ニューヨーク 3 名　発表 →　各国より 1 名を選考、1 月の校外成果発表会へ		第 2 章 5(4)を参照
3 学期	・校外成果発表会打ち合わせ ・令和元年度　SGH 課題研究成果発表会 ・リサーチペーパー完成		第 2 章 5(4)を参照

(3)　第 1 学年

学期	内容	備考
1 学期	・探究テーマ（4 分野）別講演会(5 月) ・探究テーマの設定(4～6 月) ・課題研究計画書作成 ・ゼミ内中間報告会(1) (7 月)……発表：3 分、質疑応答：3 分	第 2 章 4(2)を参照
2 学期	・ゼミ内中間報告会(2) (9 月初)……発表：3 分、質疑応答：3 分 ・改善・プレゼン準備(9～11 月) ・合同ゼミ成果発表会(11 月末) ……発表：4 分、質疑応答：3 分 ・研究要綱作成(12 月)	第 2 章 5(4)を参照
	台湾フィールドワーク参加生徒：FW 準備および FW	第 2 章 3(2)を参照
3 学期	・校内成果発表会(1 月中旬)……選考された 6 グループが発表 ・校外成果発表会(1 月末)……選考された 3 グループが発表 ・研究論文作成(3 学期中)	第 2 章 5(4)を参照

(4) 成果

（ア）第 3 学年

2 年時でイタリアとニューヨークのフィールドワークを並列し、フィールドワーク後のリサーチペーパー作成に、より時間を確保できるようにしたため、事後に国内や海外に連絡を取り、追加のリサーチを行う生徒が増え、PDCA サイクルをより多く回転させ、探究や学びの深化につながった。2・3 年で継続して研究をすることで、より各生徒の興味関心に沿ったテーマの多様性にも繋がった。

グローバルキャリア形成講座では、3 年時までの探究活動を振り返り、気付きや学びを大学入学後の計画や将来のキャリアに繋げ、より良い社会のためにどのように貢献できるかを再考する機会となり、「三方よし」の精神である社会貢献について深く考えるようになった。

（イ）第 2 学年

4 年目から実施されている改善プログラムは、問題発見から解決に至る探究活動を中心としたものである。探究テーマやリサーチクエスチョンなどの設定に時間を十分にとり、フィールドワーク計画の立案や国内リサーチを行う時間を 1 学期に行うことで、フィールドワーク先でのリサーチの質も向上した。生徒が発信する場（中間報告会、国別成果発表会、校内成果発表会、校外成果発表会）が、国別（全員）→校内（選ばれた 6 名）→校外（選ばれた 2 名）と選考を経て発表する機会を得ることが出来るシステムにしたことが、生徒によいモチベーションとなっている。

（ウ）第 1 学年

第 1 学年は「探究活動の基礎づくり」に位置付けられる。第 1 学年では、食の視座の拡張、データに基づいた研究手法の確立、リサーチ活動の充実を掲げて、4 人グループで活動をしている。また、課題発見から論文作成までの流れに沿って、担当教諭と班員間のフィードバックを密にしながら、活動の評価基準に即した振り返りを行った。これにより、到達点と課題を明確にして課題研究を進めることができるようになった。また、事後の活動を充実させ、調査結果の分析を年度末の論文に活かせるようにして、次年度への継続をよりスムーズにした。

海外フィールドワークでは、事前指導が英語力や発信力の向上だけなく、その前段階で不可欠なリサーチの手法、論理的・批判的思考の訓練となるように計画を組み直し、課題研究を深める一段階としてのフィールドワークの位置付けを明確にした。生徒はグループで進めているテーマを発展させる形で、英語のプレゼン原稿を作成し、台湾ではプレゼンと実地調査を行った。

(5) 今後の取り組み

（ア）第 3 学年

生徒は、2 年次までの探究学習で、①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現を繰り返す探究の過程を経験している。ヤング・フェスティバルに関わる表現活動を 3 年次の総合で取り入れ、探究の過程を学級全体（大きな集団）で経験することにより、一層協働的な探究活動を発展させる。グローバルキャリア形成講座は閉講する。

（イ）第 2 学年

課題研究の手法等の基本知識を 1 年生で身につけてきた。1 年生の活動はグループワークであり、個人のやりたいことが必ずしもすべて反映されるわけではない。そこで、2 年生では生徒自身の興味関心の高いテーマで探究ができるように、文系理系の区切りをとり探究テーマに合ったゼミに入って課題研究を行う。

（ウ）第 1 学年

SGH の終了に伴い、「食と健康」のテーマのしばりをなくし、生徒が自分の興味・関心に沿ったテーマについて探究できるようにする。さらに、新学習指導要領「総合的な探究の時間」の目標にある、「実社会や実生活と自己の関わりから問いを見いだす」ことができるよう、地域の課題を学び、最終的に自分の探究が地域にどう貢献できるかを考えさせる。グループ研究の形は継続する。

2　外国語教育

表１　過去３年間のプログラム内容

	１年時	２年時	３年時
１期生 (70 回生)	・多読・多聴（2 週間に１度） ・インタビュー&エッセイテスト（年 5 回） ・エッセイライティング	・多読・多聴（2 週間に１度） ・インタビュー&エッセイテスト ・ディスカッション&エッセイテスト（2 学期から） ・リサーチプロジェクト	・多読・多聴（2 週間に１度） ・インタビュー/ディスカッション&エッセイテスト ・エッセイライティング ・プレゼンテーションテスト
２期生 (71 回生)	・インタビュー&エッセイテスト ・エッセイテスト	・エッセイテスト ・ディスカッションテスト	・スピーキングテスト
３期生 (72 回生)	・暗唱テスト（1・2 学期） ・エッセイテスト ・ディスカッションテスト	・暗唱テスト（各学期１回） ・エッセイテスト ・ポスタープレゼンテーション ・ディスカッションテスト	・暗唱テスト（各学期１回） ・エッセイテスト ・ディスカッションテスト

＊年２回 GTEC 受検（3 年生は年１回）

(1)　「英語の型」による発信ができる４技能伸長プログラム開発(1 年)

（ア）ライティング技能

実施科目・実施形態	実施方法	評価・成果・課題
ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅰ授業 パフォーマンステスト	パフォーマンステストとして １学期に１回、2 学期に１回、エッセイテストを実施。辞書使用可。パフォーマンステスト前に、エッセイライティング指導として、ALT による授業を２時間入れて、書き方指導をした。エッセイ課題を計４回提出。	パフォーマンステストの Speaking Test と同時進行でテストすることで、効率よく実施できた。辞書の活用にも役立った。テスト前にガイダンス授業を各 2 回入れることで、エッセイフォーマットの定着を図れた。
GTEC 4 技能試験	年２回実施（7 月、12 月）	別紙英語外部検定試験結果参照
英語表現Ⅰ授業	・副読本 Portfolio 自由英作文をレッスン毎に書く。25 回分。 ・GTEC Skill Up Workbook のエッセイライティングを課題として提出。(４回分) ・問題集「英語４技能型テストへのアプローチ①」を使い計６回分の自由英作文に取組んだ。 ・定期考査に自由英作文を毎回出題。	様々なトピック（日常生活・学校生活から社会的問題）を扱うことで、視野が広まり、関連分野の語彙力が上がった。 課題として、間違いを恐れずに書くように指導する一方、どこまで間違いを訂正するのがよいのかと、そのバランスに戸惑いを感じる時がある。
進研模試	模試の中で、英語表現の問題に取り組む。また、その対策として問題集「WINSTEP」の英語表現の問題に取り組む。年３回実施	模試レベルで何が出題されているかに気づき、日常学習の動機とすることができた。

（イ）リスニング技能

実施科目・実施形態	実施方法	評価・成果・課題
ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅰ授業 英語表現Ⅰ授業	・テキストリスニング反復 ・定期考査に必ずリスニング問題を約 10 点分出題 ・問題集 Listening Laboratory に取り組む。20 回分 ・GTEC Skill Up Workbook のリスニング問題に取り組む。 ・問題集「英語４技能型テストへのアプローチ①」を使いリスニング問題に取り組む。	各 50 分授業の中で、必ずリスニング活動を入れることで、普段からの耳作りの環境を設けることができた。
GTEC 4 技能試験	年２回実施（7 月、12 月）	別紙英語外部検定試験結果参照
冬休み課題	冬休み課題としてリスニングに特化した。 教材：CD Book　耳で読む教材 Sherlock Holmes	イギリス英語を大量に聴く機会を設定できた。

進研模試	模試の中で、リスニング問題に取り組む。年３回。	模試で、その実力を測る。

（ウ）スピーキング技能

実施科目・実施形態	実施方法	評価・成果・課題
ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅰ授業 パフォーマンステスト	・パフォーマンステストとして １学期に１回、２学期に１回、３学期に１回、スピーキングテストを実施。パフォーマンステスト前に、スピーキング指導として、ALT による授業を１時間入れて、練習を積んだ。 ・GTEC Skill Up Workbook のスピーキング問題に取り組む。 ・問題集「英語４技能型テストへのアプローチ①」を使いスピーキング問題に取り組む。 ・授業の中で、ペアーワーク活動を取り入れ、スピーキング活動の時間を設定した。	できるだけカジュアルなトピックを選ぶことで、話しやすい環境をつくるよう心掛けた。どうしても、間違いを恐れて、まだまだ話す分量としては不足している。
GTEC4 技能実施	年に２回実施	別紙英語外部検定試験結果参照

（エ）リーディング技能

実施科目・実施形態	実施方法	評価・成果・課題
ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅰ授業	テキスト本文の速読 テキスト 10 課分と速読３課分を終了させた。	主に、速読をテーマとした授業形態で、パラグラフリーディングを実践した。
英単語テスト	毎週月曜日、英単語テスト実施	語彙力伸長を目指した。
GTEC4 技能実施	年に２回実施	別紙英語外部検定試験結果参照

(2)　「英語の型」による発信ができる４技能伸長プログラム開発(2 年)

主に週６単位の授業（コミュニケーション英語Ⅱ　３単位・英語表現Ⅱ　３単位）の中で行った内容である。

（ア）語彙増強指導

昨年度に引き続き、４月当初より、コミュニケーション英語Ⅱの授業の初めに単語集を用いて発音練習を繰り返しながら毎回語彙を増やしていった。そして週１回終礼の時間を利用して数分程度の単語小テストを行い、語彙力を確認した。問題は選択式や日本語で答える形式でなく、与えられた英文の中にすべて英語で答える形式で１学年のときより一貫してその形式を維持している。20 点満点とし、８割以上の 16 点を合格点とした。不合格の者には再試験を行い、定着を図った。

年間平均点は 16.5 点であり、ほぼ８割習得できたと言える。使用教材は英単語ターゲット 1900（旺文社）である。

（イ）発音音読テスト

２学期より、コミュニケーション英語Ⅱの授業の中で各課の終わりに発音音読テストを行った。英文の指示した箇所を読ませて評価を行った。このテストの実施により今まで英文を日本語のカタカナ読みで発音していた生徒が英語のイントネーション、アクセントを意識して発音できるようになった。

（ウ）交流生徒と交えたディスカッション

姉妹校提携にある台湾の台中市立第二高級中等学校と交流を行っており、毎年 20 名の台湾生徒が本校を訪れている。その生徒を英語表現の授業に参加してもらった。

あらかじめ相手校にテーマを事前に提示してもらい、教員が用意したワークシートに当てはめて自分の意見を整理して、台湾生徒とのディスカッションに臨んだ。

（エ）修学旅行先での姉妹校との交流

本年度の修学旅行から行き先が沖縄から台湾に変更になったのを機に、修学旅行のプログラムの中に、学校交流を組み込んだ。訪問先の台中第二中等学校で現地生徒の各教室に数名の本校生がクラスに日本文化を紹介し、交流を深めていった。

1 学期に各グループで紹介すべき内容を決め、紹介すべき手順を考える。2 学期以降は英語でどのように伝えていくか、共同作業をしながら進めていった。

（オ）年間を通じて

1 学年時から取り組んできた語彙の伸長は見られた。1 年次は多かった不合格者の数、（最大でクラスの半数が不合格になることがあった。）2 年次の後半になり、減少していった。

また、本年度から始まった、海外修学旅行のおかげで、英語を使おうとする態度に積極性が見られた。修学旅行での学校交流の訪問先での歓迎式典で歓迎の謝辞を英語で述べた生徒は特に英語の成績が優れた生徒とうわけではなく、自ら進んで手を挙げた生徒であった。

初の海外修学旅行ということもあり、改善する余地がまだまだあるが、今後はこの姉妹提携校の相手校生との交流に 4 技能成長プログラムをうまく兼ね合わせていきたい。

(3) 「英語の型」による発信ができる 4 技能伸長プログラム開発(3 年)

主に週 6 単位の授業（コミュニケーション英語Ⅲ 4 単位・英語表現Ⅱ 2 単位）の中で行った内容である。

（ア）長文内容把握

1 学期間、コミュニケーション英語Ⅲの教科書のテキストの概要 Retelling を指定語数に従って書いた。その後、生徒間で交換して添削した。担当が解答を例示した。

（イ）Performance test

1 学期末、コミュニケーション英語Ⅱの活動として、ALT との Team Teaching により各 HR で 1 回ずつ授業を行った。

ディベートの導入を図り、練習させた。昨年度に引き続き、弱点である反対意見を述べる．練習をし、討議を観察、ALT による評価を返した。

（ウ）語彙増強指導

4 月当初より英語表現Ⅱの毎回の授業冒頭で音声教材の model reading を利用した発音活動を行った。日本語の定義に反応して、英単語の発音をするもの。その後毎週月曜日の朝 15 分間で HR 単位の小テストを実施した。文章中での用法を空所補充で問う形式を継続し、15 点中 10 点以下の生徒は再テスト行い、合格を目指した。

全範囲の終了後は再度復習の範囲を課し、語彙の定着を図った。年間平均点は 13.2 点であった。使用教材は英単語ターゲット 1900(旺文社)である。

（エ）エッセイライティング

1 学期後半より大学入試問題の設問を元にエッセイライティングを行った。15 分間で mind mapping と Introduction, Body, Conclusion の構成を意識した作文をし、生徒間で相互評価を行った。文法 5 点、スペリング 5 点、語数 5 点、構成要件 5 点、内容 5 点の観点別評価を行った。教師の feed back も適宜行った。

（オ）年間を通して

特にエッセイライティングの活動に真摯な取り組みが見られた。個人的な体験を生徒相互に共有することが動機づけにつながったかと思われる。実用英語検定、GTEC4 技能での観点別評価問題にも抵抗なく取り組める下地ができたと考える。

3　海外研修

(1)　2 年　海外フィールドワーク(ニューヨーク・イタリア)

（ア）事前指導

昨年度から SGH プログラム改善として 1 年生台湾フィールドワークの実施時期を 3 月から 12 月に変更した。それに伴い、2 年生の課題研究のテーマ設定開始を 1 年生の春休みから 3 学期に、フィールドワーク参加者の選考も 2 年 7 月下旬から 6 月に変更した。この変更により、1 年生の 3 学期にテーマ設定を開始し、より早期に個々の興味関心に沿った多彩なテーマでフィールドワークの準備が余裕を持って実施することが可能になり、研究内容の充実につながった。

これまでのように授業での課題研究に必要な情報や手法のレクチャーと、リサーチペーパーやプレゼンテーションに網羅するべき項目のチェックシートを活用して、ステップ毎に締め切りを設け個別にフィードバックしながら進めた。5 月の中間報告会兼プレ選考では、それぞれの対象地域別に研究計画と国内リサーチに関する英語のポスター発表と疑応答を評価し、2 つの対象地域別にフィールドワーク希望者の人数が多すぎる場合はプレ選考も兼ねることとした。6 月のそれぞれ対象地域別の選考会では英語のプレゼンテーションと質疑応答で評価し参加者を選考した。選考会からフィールドワークまでの期間が長くなったおかげで、個別のフィードバックや指導をもとに、現地での発表やインタビュー、アンケートの改善や追加のリサーチに時間をかけることができた。

日時		レクチャー・プレゼン準備等	提出
2 月 6 日(水)	16:00	講義：課題研究について 【課題 1】新聞記事の切り抜き 【課題 2】キーワード・意味・定義調べ	
3 月 1 日(金)	13:00	講義：問いを立てよう 【課題 3】問いを立てる 【課題 4】NY とイタリアについて調べる 海外フィールドワーク希望予備調査配布	課題研究ノート【課題 1・2】
3 月 19 日(火)	13:30	講義：食と健康について 【課題 5】研究テーマの設定 【課題 6】仮説を立てる	課題研究ノート【課題 3・4】 海外フィールドワーク希望予備調査
4 月 8 日(月)	放課後		研究計画案
4 月 25 日(木)	5 限	オリエンテーション / 年間計画 / 1 学期の予定 Turn-in Schedule / タブレット配布 ポスターレイアウト・発表内容の確認 海外フィールドワークに関する調査配布 研究計画案個別指導	
4 月 26 日(金)	昼休み	チャレンジ生対象 タブレットと Power Point に関するレクチャー	
5 月 7 日(火)			ポスター原稿
5 月 9 日(木)	5 限	中間報告会説明・準備・発表順決定 評価シート+ Presentation Evaluation Sheet 配布 ポスター原稿返却 パスポート取得に関わる説明	海外フィールドワークに関する調査
5 月 15 日(水)	17:00		最終ポスター原稿
5 月 16 日(木)	5 限	中間報告会　英語ポスター発表 4 分発表+4 分質疑応答(生徒・ALT・英語教員) 生徒観客時：コメントシート(質問・改善点)	
5 月 23 日(木)	5 限	中間報告会　個別フィードバック配付 スライドフォーマットと必要事項について 個別指導	
5 月 30 日(木)	5 限	発表内容等改善	

		インタビュー・アンケートについて 個別指導	
6 月 6 日(木)	5 限	フィールドワーク選考会について 発表順決定 海外フィールドワーク第 1 回保護者会案内配布	
6 月 10 日(月) ～6 月 14 日(金)			スライドデータ (国内 FW 結果を含む)
6 月 13 日(木)	5 限	発表準備・個別指導	
6 月 19 日(水)	17:00		最終スライドデータ(NY)
6 月 20 日(木)	5 限	ニューヨークフィールドワーク選考会 発表 15 分+質疑応答 5 分(ALT・英語教員) 生徒観客時：コメントシート(質問・改善点)	
		発表準備(イタリア)	
6 月 26 日(水)	17:00		最終スライドデータ(イタリア)
6 月 27 日(木)	5 限	ニューヨーク選考結果連絡 個別フィードバック配付 プロフィール作成・提出について Japan Fair(日本文化紹介・学校紹介)計画	
		イタリアフィールドワーク選考会 発表 15 分+質疑応答 5 分(ALT・英語教員) 生徒観客時：コメントシート(質問・改善点)	
7 月 5 日(金)	11:30	イタリア選考結果連絡 個別フィードバック配付	
7 月 11 日(木)	3 限	リサーチペーパーについて(フォーマット等) イタリアフィールドワーク諸費用について配布 プロフィール作成・提出について(イタリア) 第 2 回保護者会案内配布(NY) 改善プレゼンスライドチェックスケジュール調整 昨年度フィールドワーク日報冊子配布 個別指導	第 1 回保護者会出欠票 パスポートコピー
7 月 18 日(木)	放課後		グループ FW プラン(NY)
7 月 19 日(金)	放課後	パフォーマンス（ソーラン節）練習	プロフィールデータ
7 月 22 日(月) ～7 月 30 日(木)		プレゼンリハーサル(ALT・英語教員で個別指導)	改善プレゼンスライドデータ
7 月 26 日(金)	17:00	海外フィールドワーク第 1 回保護者会	第 2 回保護者会出欠票(NY)
8 月 21 日(水)	9:00- 11:00	Japan Fair(日本文化紹介・学校紹介)リハーサル ハッピ配布（NY)	
8 月 26 日(月)	終日	プレゼンリハーサル(NY)	
8 月 27 日(火)	終日	プレゼンリハーサル(NY)	
8 月 28 日(水)	14:45- 15:45	課題研究に関する講演会 Glocal Academy 代表理事：岡本尚也氏	リサーチペーパー Background, Methods
8 月 29 日(木)	17:00	第 2 回保護者会(NY) 名刺配布	緊急連絡先(NY)
9 月 5 日(木)	5 限	2 学期の予定について 校外での発表機会について 個別指導	
	放課後	Japan Fair (日本文化紹介・学校紹介) リハーサル (NY)	
9 月 9 日(月)	放課後	Japan Fair (日本文化紹介・学校紹介) リハーサル (NY)	リサーチペーパー Domestic FW Results
9 月 12 日(木)	5 限	個別指導(アンケート作成) (NY)	

		現地緊急連絡先確認・FW 直前確認 個別指導 第 2 回保護者会案内配布(イタリア)	
9 月 15 日(日) ～9 月 21(土)		NY フィールドワーク (NY グループについては、これ以降事後指導へ)	
		イタリアの事前指導	
9 月 19 日(木)	5 限	個別指導	
9 月 24 日(火)			発表スライドデータ 発表原稿
10 月 2 日(水)	放課後	プレゼンリハーサル	
10 月 3 日(木)	昼休み	ミラノ宿泊税免税書類配布 日報・報告書について配布・説明	第 2 回保護者会出欠票
			リサーチペーパー Introduction
10 月 4 日(金)	放課後	プレゼンリハーサル	
10 月 10 日(木)	5 限	校外成果発表会について 国別成果発表会　発表順決定 イタリアでのアンケートについて プレゼンリハーサル	
	17:00	第 2 回保護者会	
10 月 17 日(木)	5 限	国別・校内・校外成果発表会について FW 直前確認 ハッピ配布	
10 月 25 日(金)	放課後	現地緊急連絡先確認	

（イ）フィールドワークの主な内容

＜ニューヨーク＞

ニューヨークフィールドワーク参加生徒の課題研究テーマは、トランス脂肪酸、環境問題とフェイクミート、ベジタリアンへの対応、食育、糖尿病を防ぐ食べ方である。姉妹校であるニューヨーク市立大学付属バルーク高校を訪問し、日本文化・学校紹介を集会で発表した他、それぞれのテーマについてプレゼンテーションを行い、意見交換やアンケート調査を行った。日本料理店「梓」や SHAKE SHACK へ企業訪問を行い、担当者から各生徒の質問に丁寧に答えていただいた。また、チェルシー・マーケットやスーパーマーケットを訪問し、それぞれのテーマに関して観察調査やインタビューを実施した。コロンビア大学訪問時にも大学生にアンケートやインタビューをする機会を得た。他のフィールドワーク同様、生徒はフィールドワーク中、毎日日報をオンラインの掲示板に投稿し、活動や気づきを記録し、担当者が毎日そのコメントに対してより探究が深まるようにフィードバックを返している。フィールドワーク終了後は記録を冊子化し、教員・生徒間の情報共有にも使われ、引き継がれてきている。

(a) ニューヨーク市立大学附属バルーク高校

・課題研究プレゼンテーションと授業参加

姉妹校のバルーク高校には 9/17(火)と 9/18(水)の 2 日間訪問した。初日はホストスチューデントと交流、授業参加、そして、フィールドワークのメインイベントである課題研究のプレゼンテーション・ディスカッションを行った。各研究について、現地の生徒から様々な意見を得たり、アンケート調査を行ったりしたことで調査が進んだ。さらに、現地の授業方法の違いを体験し、生徒の積極性を目の当たり

にしたことで、日本の文化や教育について気付かされることも多く、フィールドワーク後の学校生活にも良い影響を与えている。

・Japan Fair（伊丹高校紹介・日本文化紹介）

現地高校で 2 学年 120 名の前で Japan Fair の発表を行った。担当者との事前打合せで 2 時間の持ち時間ということで準備していたが、直前で 1 時間になってしまった。学校紹介のスライドを半分ほど割愛し、日本文化紹介（日本舞踊、空手パフォーマンス、浴衣の着付け体験など）に時間を多く割き、現地の高校生からは拍手喝さいを浴びた。その場で紹介できなかったスライドは学校の HP に掲載してもらうことになった。

(b) 企業訪問インタビュー（日本料理店「梓」、SHAKE SHACK）

「食と健康」という本校のテーマに沿って課題研究を進めている生徒のインタビュー先として SGH 事業 2 年目から訪問している「梓」と SHAKE SHACK に訪問した。担当者の方には、各生徒の課題研究の説明を聞いていただいた後、丁寧に質問に答えていただいた。人種のるつぼであるニューヨークならではの諸事情を踏まえての回答に学ぶところは多かった。

(c) コロンビア大学

大学構内を散策し、各生徒はアンケート調査やインタビュー調査を行った。初めは、大学生に声をかけることに尻込みしていた生徒だが、勇気をもって声を掛けると気さくに応対してくれた。大学生から課題研究についての質問に答えてもらっただけでなく、大学生活や将来の夢などの会話をすることができた生徒もいて、後で興奮気味に報告してくれた。知らない人に話しかけ、英語でコミュニケーションをとることができた成功体験は自己肯定感を上げたようである。帰国後の校外の交流会でも自ら他校生に話しかけるなどのコミュニケーション能力の向上が見られ、また、他校生との人脈作りに積極的になる姿もあった。

(d) チェルシー・マーケット、他スーパーマーケット

複数のマーケットに見学に行き観察調査を行った。トランス脂肪酸、ベジタリアン食、フェイクミートをテーマにしている生徒には特に良い観察の機会となった。

日程表

日	月日・曜日	発着地・滞在地		現地時間	交通機関	行　　程	食事	備考
1	9/15(日)	伊丹空港	集合	13:30		伊丹空港に集合		
		伊丹空港	発	14:40	JAL3006	空路、成田へ		私服
		成田空港	着	16:00		成田空港到着後、出国手続		
		成田空港	発	18:25	JAL004	空路ニューヨークへ		
						日付変更線	機	

		ＪＦＫ空港　　着 ＪＦＫ空港　　発 ニューヨーク　着	18:20	専用車	ＪＦＫ空港到着後入国手続 専用車にてホテルへ ホテルチェックイン 【ニューヨーク泊】	機	
2	9/16 (月)	ニューヨーク　滞			ホテルにて朝食 企業訪問・街頭調査 【ニューヨーク泊】	朝	規 準 服
3	9/17(火)	ニューヨーク　滞			ホテルにて朝食 バルーク高校訪問 授業参加・プレゼンテーション 【ニューヨーク泊】	朝	規 準 服
4	9/18(水)	ニューヨーク　滞			ホテルにて朝食 バルーク高校訪問 10 年生集会で日本文化紹介 授業参加【ニューヨーク泊】	朝	規 準 服
5	9/19(木)	ニューヨーク　滞			ホテルにて朝食 企業訪問・コロンビア大学 チェルシー・マーケット他 【ニューヨーク泊】	朝	規 準 服
6	9/20(金)	ニューヨーク　発 ＪＦＫ空港　　着 ＪＦＫ空港　　発	11:30	専用車 JAL003	ホテルにて朝食 専用車にて、ＪＦＫ空港へ ＪＦＫ空港到着後出国手続 空路、成田空港へ【機内泊】	朝 機	私 服
7	9/21(土)	成田空港　　着 成田空港　　発 伊丹空港　　着 伊丹空港　解散	14:40 16:55 18:10 18:40	JAL3005	成田空港到着後、入国手続 空路、伊丹空港へ 伊丹空港到着 伊丹空港にて解散	機	私 服

＜イタリア＞

今回イタリアフィールドワークに参加する生徒の課題研究テーマは、給食におけるフルーツ摂取量の比較、グルテンフリー、嫌いな食べ物克服の外的要因、魚の食文化、フードツーリズムである。それぞれのテーマと食と健康に係る訪問先で、観察調査やインタビューやアンケートを実施した。また、食科学大学の学生とアルバの現地の学生と交流の機会を設け、それぞれの課題研究に関するプレゼンテーションと質疑応答、ホームステイ先でも調査に協力していただいた。これまで同様、生徒はフィールドワーク中、毎日日報をオンラインの掲示板に投稿し、活動や気づきを記録し、担当者が毎日そのコメントに対してより探究が深まるようにフィードバックを返している。フィールドワーク終了後は記録を冊子化し、教員・生徒間の情報共有にも使われ、継続して引き継がれてきている。

ブラ市でのフィールドワークの様子は、複数の現地メディアの取材を受け、発信された。
https://www.ideawebtv.it/2019/10/29/dal-liceo-di-hitami-giappone-in-visita-alla-mensa-scolastica-di-bra-video-e-foto/
https://ilcorriere.net/bra-studenti-dal-giappone-in-visita-alla-mensa-comunale/
https://www.cuneocronaca.it/bra-studenti-dal-giappone-in-visita-alla-mensa-comunale-per-approfondire-i-temi-dell-alimentazione

(a) FICO in Bologna　（世界初の食と農業のテーマパーク）

世界初の食と農業のテーマパークである FICO は農業工場の意味である。食の価値を問い、生み出す場所で扱っているのは純正イタリア製品のみである。施設面積は 10 万㎡で東京ドーム約 2 個分の中に、マーケットだけなく、農場に動物や果物・野菜栽培などもある。食について「食べる」「買う」「学ぶ」ことができる。

・ワークショップ（この地域の郷土料理のパスタ作り）

ボローニャ地域の郷土料理であるパスタの手作りワークショップに参加した。卵と、とてもきめの細かい 00 番の小麦粉を混ぜてパスタ生地を作り、薄く延ばして四角に切り、チーズとハーブを混ぜた具材を 2 枚で挟んだもの、三角に折って両端をつなげてリング状にしたトルテリーニ、真ん中をつまんでリボン状にしたファルファッレ、溝のある板と木の棒で巻いて模様をつけたもの、余った部分は細かく切ってスープなどに使うなど、実際に伝統的な郷土料理の食文化を体験して学ぶことができ、最後は終了証もいただいた。作ったものは持ち帰れるが、その場で調理して食べることはできないため、併設されている食堂で、ボロネーゼソースのパスタなどを試食した。

・パビリオン　（マルチメディアで体験しながら学習ができる展示）

6 つのテーマ別(「人と火」「人と地球」「人：土からボトルまで」「人と海」「人と動物」「人と未来」)のパビリオンがあり、マルチメディアが駆使されており、体験して楽しみながら学ぶことができる。生徒の研究テーマである魚食文化に関わる「人と海」と「人と動物」のパビリオンに入場し、現在の漁獲量や魚資源、海洋環境について学びを深めた。

(b) BIO ショップ　Natura Si

4 年前に開店した BIO ショップである Natura Si に訪問し、グルテンフリー商品の取り扱い種類や数、グルテンフリー商品の受容の変遷、グルテンフリーコーナーの設置について観察調査とインタビュー調査を行った。顧客の質問にすぐに対応できるように、レジ近くにグルテンフリーコーナーを設置していること、専門的な知識を持った店員が常勤していること、4 年前の開店時には倒産するかもしれないと思われていたことなど伺った。現在では 100 店舗まで拡大している。グルテンフリーコーナーは棚 2 列に渡り、他に冷蔵商品もあり、非常に多様な代替食材を使った商品が数多くあり、ご好意で試食もさせていただいた。現在では店内の商品の 30%がグルテンフリーであるということである。また、果物の価格調査やインタビュー調査も行った。

(c) スーパーマーケット　Mercato de Alba

地元のスーパーマーケットである Mercato de Alba を訪問し、グルテンフリーコーナーや魚の販売方法、果物の価格について観察調査とインタビュー調査を行った。グルテンフリーコーナーは、こちらもレジに近い場所に設置されていた。魚は対面販売を行っていた。

(d) ヴィーガンレストラン　Hope's Food

ヴィーガンレストランの Hope's Food を訪問し、昼食を実際にいただきながら、店主の方にグルテンフリーなどについてインタビュー調査を行った。残念ながらグルテンフリーには対応していなかったが、アレルギーやヴィーガン対応のメニューなど、美味しさやファッションと両立させる工夫など伺った。

(e) ランゲ・ロエロ観光協会

ランゲ・ロエロ観光協会を立ち上げた元会長の方にインタビュー調査をお願いした。フードツーリズムを研究テーマとしている生徒が、自分の地元の現状と課題と解決策を提案し、ランゲ・ロエロ観光協会やスローフード運動との関りなどについてお話を伺った。1992 年に友達と 3 人で始めて、使用する食材は地元のものに限るなど厳密な協会のルールや目的を決め、特定の人や団体だけでなく、みんなが発展できるように、町全体で取り組み、難しいけれどもみんなで定期的に集まり、話し合いをしていくことが重要であると、協会の立ち上げから 160 もの会社やレストランが登録している現状へと発展していった経緯をお話しいただいた。また、生徒の解決策については、みんなで集まって話し合うこと、地元独自の食材を使うことなどご助言いただいた。

(f) Casa Rotta

自給自足・自然栽培での農業や加工食品に取り組んでいらっしゃる Casa Rotta に伺い、古い家や倉庫を自分たちで改築して暮らしていらっしゃる様子や、時間のかかる伝統的な酵母でのパン作りや、持続可能な農業などを体験させていただいた。自然豊かな環境で、できるだけ農薬や化学肥料を使わないように、植物の根を残して乾燥させることで土に自然の力をつけること、床が網になっている可動式の鶏小屋を移動させて鶏糞を肥料とすること、農薬を使わず虫の嫌いな植物を近くに植えることで虫を防ぐことなどの工夫で、自然の力がある土ができ、通常毎日やらなければいけない水やりも、ここでは 2 週間に 1 回で十分であることなど、実際に植え付けや収穫した野菜の試食、土に触れてみることで、体験しながら学ぶことができた。

(g) ブラ市給食センター

ブラ市給食センターは、今回参加生徒の多くの課題研究テーマに関わる訪問先であった。ブラ市長もお越しいただき、歓迎のご挨拶をいただいた。給食センター長からセンター内を案内していただきながら、生徒のインタビュー調査にご協力いただいた。併設されている小学校の生徒が、昼食の時間になると、食堂へやってきて、シェフが配膳する中で日々テーブルの座席を変えながら、先生も同じようにテーブルに座り、みんなで話しながら食事をするそうだ。教室は勉強をする場所なので、教室で食事をとることはない。好き嫌いや残すことへの指導はないが、シェフが食材や料理について説明をしながら声をかけたり、何よりも先生がおいしそうに食べたりことが食育につながるという考えだそうだ。ブラ市は内陸なので、魚料理に慣れていない生徒も多く、残すことも多いが、それでも魚料理に慣れ親しんでほしくて週に 1 回は魚料理を提供しているそうだ。市長からも 2 人の子供が給食センターでの食事で好き嫌いを克服したとお話しいただいた。フレッシュフルーツについては、毎日提供しており、日本の現状についても興味を持っていただき、果物の価格の高さや限られた給食費の課題をお話ししたところ、金額が障害となっていることに驚かれ、健康や食育はそれ以上に大切なものだという見解を示された。現状の解決策としては、野菜でも賄えるが、フレッシュであることが大切だとご助言いただいた。また、キロメートルゼロという取り組みで、地産地消を推奨し、基本的に地元の食材を使用することが義務付けられており、役所からの抜き打ちの検査もあるそうだ。アレルギー対策として、アレルギーを持つ人対象の食事は、1 人の担当者が全て別室で 1 つずつ調理し、料理を盛り付ける容器も異なる色を使って区別していた。小学校だけでなく、地域の高齢者にも給食を提供しており、1 人の担当者が配送・配膳し、食事が終わるまで同席するそうだ。1 人で食事をとらないようにということもあるが、誤飲等安全面や体調管理も担っているそうだ。他にも消防士や公務員などへも給食を提供している。イタリアの中でも特にブラ市の給食センターは優れたサービスを提供されているということであったが、食への誇りとこだわり、それに対する人的・金銭的・教育的配慮が行き届いていると感じた。生徒からも途切れることなく質問があり、それに一つ一つ丁寧にご対応いただき、非常に充実した訪問となった。

(h) 食科学大学

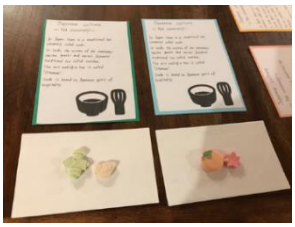
世界で初めて食を学問にした食科学大学を訪問し、キャンパスツアーと食堂で昼食をとり、大学院生と学部生約 10 名に生徒の課題研究のプレゼンテーションと質疑応答に参加していただいた。学生たちは授業があるため、昼休みの限られた時間の中ではあったが、興味を持って聞いていただき、食を学んでいる視点からさまざまな助言もいただいた。

(i) ホームステイ

ブラ・アルバ周辺で生徒一人一家庭にホームステイを 2 泊 3 日で受け入れていただいた。家庭料理もいただき、ピザを家族みんなで作る家庭も複数あった。それぞれの課題研究についてもご協力いただき、小学校の先生をしていらっしゃる家庭が 2 つあり、生徒の課題研究のアンケート調査も小学校で実施していただくことができ、結果についてもさまざまご助言いただいた。

(j) ブラ・アルバの高校生と交流

現地高校生約 10 名を対象として、日本文化の紹介で茶道のお点前・お団子づくりを一緒に体験してもらった。課題研究のアンケート調査にも協力していただき、高校生同士交流を深めることができた。



(k) Borgo Moretta 水曜朝市

定期・不定期の市場にいくつか訪れ、野菜や魚の販売方法や価格調査を行った。果物は特に新鮮で、kg 売りなど、日本との違いも感じられた。

(l) 魚屋 Pescheria del Molo

今回のフィールドワーク地はイタリアの内陸部で、海岸沿いのリグーリアなどには魚食文化が豊富だが、ブラ・アルバ周辺では魚食自体があまり浸透していないということであった。しかし、前述のブラ市給食センターでも週 1 回魚料理を提供されていたり、今回訪れた魚屋は、遠くの魚市場まで毎日魚を買い付けに行き、新鮮で多様な魚を提供していたりと、魚食文化導入の取り組みもあるようだ。この魚屋は地元でも人気でいつも混んでいるということであった。対面販売で、魚はそのまま売られており、大きいものはその場で切り身にしてもらっていた。お忙しい中、インタビュー調査にご協力いただいた。

日程表

日	月日・曜日	発着地・滞在地	現地時間	交通機関	行　　程
1	10/26	関西空港	08:45		関西空港集合
	(土)	関西空港発	10:45	AY078	関西空港から空路フィンランド・ヘルシンキへ
		ヘルシンキ着	14:40		ヘルシンキにてパスポートコントロールを通過
		ヘルシンキ発	16:10	AY1755	ミラノのマルペンサ空港へ
		ミラノ着	18:10	専用車	着後、専用車にてホテルへ移動
					ホテルチェックイン後、ホテルにて夕食
2	10/27	ミラノ	07:20	専用車	ホテル出発
	(日)		08:28	列車(2 等)	FRECCIAROSSA9602 でボローニャへ
		ボローニャ	09:29		着後、シャトルバスで FICO へ
			10:00		FICO 見学(日本語通訳ガイド)
			10:30		パスタ作りワークショップ
				バス	パビリオン見学等
			16:30	列車(2 等)	シャトルバスでボローニャ駅へ
			17:28		FRECCIAROSSA9640 でミラノへ。
		ミラノ	18:29	専用車	中央駅からホテルまで専用車で移動
			19:30		レストランで夕食

3	10/28 (月)	ミラノ ブラ アルバ	07:30 08:00 10:30 11:30 12:30 14:00 16:00 19:00	 終日 専用車	ホテル出発 ブラへ移動（166km） ビオショップ　Natura Si（グルテンフリー商品など） スーパーマーケット（魚売り場・グルテンフリー商品） ヴィーガンレストラン（アレルギー対策など） ランゲ・ロエロ観光協会（フードツーリズム） Casa Rotta（持続可能な食や農業アクティビティの取り組み） ホストファミリーと対面。各家庭へ。
4	10/29 (火)	ブラ アルバ	08:00 09:00 11:00 11:30 12:30 13:00 14:30 15:00 17:00 18:00	徒歩 専用車 専用車	ブラ駅に集合 ブラ市給食センター （フルーツ摂取量・食育・アレルギー対策・魚食文化） ブラ市長・給食センター長と面会 食科学大学へ移動 食科学大学キャンパスツアー 学食で昼食 食科学大学生へプレゼンテーションと意見交換 交流会場へ移動 ブラ・アルバの学生と交流 日本文化紹介とアンケート調査 ホストファミリーと交流 日本文化紹介とアンケート調査 各家庭へ。
5	10/30 (水)	ブラ ミラノ	08:00 09:00 10:30 11:00 12:00 14:00 16:30 19:30	 専用車 徒歩 徒歩 専用車 徒歩 専用車	ブラ駅集合・ホストファミリーとお別れ・出発 Borgo Moretta 水曜朝市 魚屋 Pescheria del Molo アルバ市内散策 スローフードレストランで昼食 ミラノへ移動 ミラノ市内観光 レストランで夕食
6	10/31 (木)	ミラノ ミラノ発 ヘルシンキ着 ヘルシンキ発	08:00 11:25 15:30 17:35	専用車 AY1752 AY077	ホテルから、専用車にて空港へ 出国審査を終え、空路フィンランド・ヘルシンキへ ヘルシンキにて乗り継ぎ、パスポートコントロールを通過し、関西空港へ向けて出発
7	11/1 (金)	関西空港着	10:00		関西空港着後、入国審査、税関検査通過後解散

（ウ）事後指導

フィールドワーク後は、調査内容の整理とデータ化や分析をして、英語のリサーチペーパーにまとめていく。リサーチシートに必要な項目をチェックリストで確認し、ALT と個別でやり取りを繰り返して完成させる。それ以外にも、A4:1 枚で写真を入れたフィールドワークの報告書と、フィールドワーク後協力いただいた方々に生徒がそれぞれお礼状も発送する。

フィールドワークの内容や得られた結果等を発信・還元するため、パネル作成や校内成果発表会、校外成果発表会、始業式での発表や、校外での発表機会にも参加する。

日時		レクチャー等	リサーチペーパー(RP) /プレゼン(P)	その他
		NY の事後指導		
9 月 30 日(月)	8:00			報告書提出
10 月 3 日(木)	放課後		RP: Introduction 提出	
10 月 10 日(木)	5 限	校外成果発表会について 国別成果発表会発表順決定		
	放課後		RP: NY Field Work Results 提出	
10 月 17 日(木)	5 限	国別・校内・校外成果発表会について確認		
10 月 31 日(木)	放課後		RP:Analysis 提出	
11 月 6 日(水)	17:00		P: 国別成果発表会発表スライドデータ提出	
		NY とイタリアの事後指導		
11 月 7 日(木)	5 限	国別成果発表会（NY） データ分析・発表準備(イタリア)		
11 月 8 日(金)	昼休み			全国高校生フォーラム代表者発表
11 月 11 日(月)	8:00			報告書提出(イタリア)
11 月 11 日(月) ～15 日(金)	放課後		P: Slide Final Check (イタリア)	
11 月 14 日(木)	放課後		RP: Italy Field Work Results 提出	
11 月 15 日(金)	放課後	探究甲子園代表者決定		全国高校生フォーラム書類 A 提出
11 月 18 日(月)	放課後			探究甲子園応募書類作成
11 月 19 日(火)	放課後			探究甲子園応募書類作成
11 月 20 日(水)	17:00		P: 国別成果発表会発表スライドデータ提出 (イタリア)	探究甲子園応募書類作成
11 月 21 日(木)	5 限	国別成果発表会	RP: Conclusion 提出(NY)	探究甲子園応募
11 月 28 日(木)	5・6 限	総合学年発表会		
	放課後	校内成果発表会結果発表 「国際問題を考える日」出場者・代表者決定	RP: Analysis 提出 (イタリア)	全国高校生フォーラム書類 B 提出
12 月 5 日(木)	5 限	校外成果発表会役割分担 リサーチペーパー作成 発表準備	P: 校内成果発表会：タイトル(日英)・要旨(日英)提出	
12 月 6 日(金)	放課後			「国際問題を考える日」コンテスト応募
12 月 13 日(金)	3・4 限	GPS-Academic 受験		
	放課後			終業式：NYFW 報告発表リハーサル 始業式：イタリア FW 報告発表練習 校内成果発表会練習

12 月 16 日(月)	15:00		P: 校内成果発表会発表スライドデータ提出	
12 月 17 日(火)	放課後	校内成果発表会リハーサル		始業式：イタリア FW 報告発表練習
12 月 18 日(水)	3・4 限	校内成果発表会		
	放課後	探究甲子園ポスタープレゼンテーション応募結果連絡		
12 月 19 日(木)	放課後		RP: Conclusion 提出(イタリア) RP: Research Paper 1st Draft 提出	PTA 会報：イタリア FW 報告原稿作成 全国高校生フォーラム事前打ち合わせ
12 月 20 日(木)	放課後	校内成果発表会結果連絡 校外成果発表会分担決定		PTA 会報：イタリア FW 報告原稿作成 「国際問題を考える日」発表練習
12 月 22 日(日)	終日	全国高校生フォーラム参加		
12 月 23 日(月)	2 限	GPS-Academic 振り返り		
	放課後			「国際問題を考える日」発表タイトル・要旨提出
12 月 24 日(火)	放課後			始業式：イタリア FW 報告発表練習 探究甲子園ラウンドテーブルディスカッション練習
1 月 15 日(水)	14:30			「国際問題を考える日」発表準備
1 月 16 日(木)	5 限	リサーチペーパー作成 小論文模試冊子配布 SGH 保護者アンケート配布	RP: Abstract 提出 RP: Research Paper 1st Draft Feedback 配付	校外成果発表会発表字幕準備
1 月 17 日(金)	放課後			校外成果発表会発表字幕準備
1 月 20 日(月)	放課後			校外成果発表会発表字幕準備
1 月 23 日(木)	5 限	校外成果発表会打合せ リサーチペーパー作成		校外成果発表会発表リハーサル
	放課後			校外成果発表会発表リハーサル 「国際問題を考える日」発表準備
1 月 24 日(金)	放課後			校外成果発表会発表リハーサル 「国際問題を考える日」発表準備
1 月 28 日(火)	昼休み			「国際問題を考える日」発表準備
1 月 29 日(水)	昼休み			「国際問題を考える日」発表準備
1 月 30 日(木)	昼休み		RP: Research Paper 1st Draft Corrections 提出	小論文模試提出

	5・6限	校外成果発表会		
1月31日(金)	放課後			「国際問題を考える日」発表準備
2月3日(月)	放課後			「国際問題を考える日」発表準備・練習
2月4日(火)	放課後			「国際問題を考える日」発表準備・練習
2月6日(木)	5限	リサーチペーパー作成 「国際問題を考える日」事前打ち合わせ・発表練習 探究甲子園準備		「国際問題を考える日」発表リハーサル
	放課後			「国際問題を考える日」発表リハーサル
2月7日(金)	放課後			「国際問題を考える日」発表リハーサル
2月11日(火)	終日	「国際問題を考える日」参加		
2月13日(木)	5限	リサーチペーパー完成 タブレット返却 探究甲子園準備	RP: Final Draft 提出	
3月2日(月)	放課後			探究甲子園準備
3月3日(火)	放課後			探究甲子園準備
3月4日(水)	放課後			探究甲子園準備
3月17日(火)	放課後			探究甲子園練習
3月18日(水)	放課後			探究甲子園練習
3月19日(木)	放課後			探究甲子園練習
3月21日(土)	終日	探究甲子園参加		

（エ）成果

(a) 論理的思考力の鍛錬と課題研究内容の深化

前年度の2月上旬からテーマ設定に関する指導を行い、春休みに各生徒がじっくりテーマ設定について考える時間を設けることができ、よりリサーチを充実させ、年々PDCAサイクルを多く回すようになってきた。このことにより、課題研究をさらに論理的に考える機会をじっくりとることができた。フィールドワーク終了後に、新たに見えた解決策のためにアンケートを取り直したり、外部の人にインタビュー調査を行ったりといった研究をさらに継続・発展させる生徒も多く現れ、課題研究の内容のさらなる深化が期待される。

(b) ニューヨークフィールドワーク

・英語4技能の鍛錬と英語学習へのモチベーションの向上

ニューヨークの姉妹校での課題研究プレゼンテーションを念頭に緊張感を持って準備したことや学校・日本文化紹介のための発表準備などを通して、英語の4技能をバランスよく鍛えることができた。現地での発表で姉妹校の生徒から大きな反応を得たり、ホストスチューデントとのコミュニケーションをしたりすることで、全員が「もっと英語を聞きとれるようになりたい！」「話せるようになりたい！」と口々に言っていた。帰国後の英語学習のモチベーションも持続している。

・臨機応変な対応力・判断力の向上

ニューヨークフィールドワークでの様々な体験や姉妹校での課題研究の発表の様子などが先輩から後輩へと受け継がれ、先輩の反省点やハプニングなどから、予定外のことにどう対処すべきかシミュレーションができ、予期せぬことに対処する心構えができた。実際に予定とは違う事態になっても慌てず対処できたことが複数回あった。一例を挙げると、集会で日本の学校と文化を紹介する際に時間が足りなくなってしまった時、学校紹介のスライドを割愛して時間を調整し、浴衣の着

付け体験など参加型のイベントに時間を割き姉妹校の生徒を楽しませることができた。この判断力は、課題研究の発表時から街頭インタビューなどにも生かされた。

(c) イタリアフィールドワーク

・フィールドワーク内容の充実

それぞれの生徒の課題研究テーマに沿った訪問先をアレンジすることで、フィールドワーク内容が充実した。限られた期間・予算の制約がある中、思い通りにいかない部分もあったが、自分から積極的に現地の人々へ質問や調査依頼の交渉をすることで、さまざまなデータや見解を得ることができた。各自の研究テーマや調査内容が明確になっていることが自主的な行動へと繋がっている。

・協働性の向上

お互いの調査を協力して進める中で、フィールドワーク参加者間の協働性が向上した。年度当初はお互いに初対面でよそよそしかったが、それぞれの強みを生かして役割分担をし、困難を共に乗り越える中で、チームとして機能するようになった。

・異文化への敬意と自国文化への誇りの芽生え

イタリアの豊かな文化、特に食文化や生活スタイルに触れることで、多様な考え方への理解が実体験として進んだ。人々の優しさや幸福度の高さも多くの生徒が口にすることである。相手の文化や考え方を尊重すること、そこから自国の文化を顧みて改めて気づくことなど、生徒の言動や記録に見られた。また、イタリア人との会話から自らの自国文化への知識不足に気づき、自国文化理解の必要性を感じた生徒もいた。イタリア人の田舎での暮らしへの肯定的な態度や田舎の特性を活かした地域活性化に、改めてその魅力に気づき、持続的な発展について考えることもできた。

(2) 1年　海外フィールドワーク(台湾)

（ア）募集・選考・保護者会などの流れ

今年度の第1学年の台湾フィールドワークの参加希望者として19名がエントリーした。希望者は、それまで「総合的な探究の時間」にグループ単位で行っていたテーマを主軸として、個人でポスターを作成し、さらに志望動機やフィールドワーク計画を書いた「面接シート」を提出した。それらの書類審査と日本語と英語での面接を選考の材料として19名を選考した。

5月31日（金）6限　総合的な探究の時間「台湾FW参加希望者説明会について」配布・説明
6月　7日（金）6限　説明会参加希望締切　ゼミ担当へ提出 → 企画部へ
6月19日（水）放課後　台湾FW参加希望者説明会
〔エントリーシート・志望動機・フィールドワーク計画記入用紙・A3ポスター用紙 配布〕
6月26日（水）昼休み　エントリーシート提出締切
7月17日（水）放課後　エントリー生徒選考日等説明会
〔選考スケジュール・台湾受入意思確認〕
8月19日（月）9:00～13:00　台湾受入意思確認・面接シート提出締切
8月20日（火）～27日（火）書類審査＋面接（日本語と英語で）＊A3ポスター持参
9月　2日（月）　結果配布、保護者宛て確認文書配布
9月　3日（火）昼休み　保護者署名入り確認書提出（FW参加者が正式に確定）
9月10日（火）17:00～　第1回保護者会（旅行者より保険とパスポート取得の説明）
＜11月2日(土)～11月7日(木)　台湾生徒ホームステイ受け入れ＞
12月13日（金）17:00～　第2回保護者会（しおり配布　日程等説明）

（イ）事前指導

(a) 情報教室（PC教室）の開放

本年度は、フィールドワーク参加生徒が確定した直後にタブレットを配布できたので、基本的な使用方法については配布時に説明することができた。情報教室は、毎週火曜日 16:00～17:00 に開放し、SGH課の教員が指導を担当した。PCを使用してのスライド作成を許可したほか、スライド作成にあまり自信がない生徒にとっては応用的な技術を身につけられる場となった。

(b) ランチミーティング（全 6 回）

フィールドワーク参加生徒は原則全員参加させ、毎週水曜日 12:50～13:20 に社会科教室にて実施した。ALT からテーマの絞り方やデータの読み取り方、発表の仕方、アンケートやディスカッションでの質問の仕方など、きめ細かい指導を行った。指導をすべて英語で行うことで、英語でのコミュニケーションに慣れさせる意図もあった。また、第 6 回目には、昨年度のフィールドワーク参加生徒との交流会を設け、疑問の解消、活動意欲の向上を図った。

(c) プレゼンテーションリハーサル

グループごとに計 3 回ずつ実施し、一人ひとりの発表が論理的で説得力のあるものになっているかを確認した。リハーサルは本番を見据えてオールイングリッシュのグループディスカッション形式で行い、発表後には、引率教員・ALT を交えて質疑応答を行った。

(d) その他

事前指導の補足として、11 月 2 日～7 日に実施された、台中市立台中第二高級中等学校（台中二中）訪問団受け入れについても説明する。台中二中の生徒の訪問目的は、本校生徒家庭でのホームステイ体験、英語によるディスカッション、本校での台湾の文化紹介、ケアヴィラ伊丹（介護老人保健施設）での年配者との交流であった。今年度は 20 名の生徒が来日した。本校生は、この期間に彼らと親交を深めたほか、彼らを対象としてアンケートの実施や、事前のリサーチを行うことができた。

台湾フィールドワークに向けての事前指導				
日時		レクチャー等	プレゼン準備	その他
9 月 3 日(火)	16:00	台湾 FW 参加者集会 今後の予定・タブレットの使用方法		ﾌﾟﾛﾌｨｰﾙ提出 ﾀﾌﾞﾚｯﾄ配布
9 月 4 日(水)	昼休み	Lunch Meeting ① Self-Introduction/Preparation Schedule/グループの決定(4 人 1 班)		
9 月 10 日(火)	16:00	PC 教室開放	スライド(PPT)作成	ALT 個別指導
	17:00	第 1 回保護者会		
9 月 11 日(水)	昼休み	Lunch Meeting ② Methods(Questionnaire/Interview)		
9 月 17 日(火)	16:00	PC 教室開放	スライド(PPT)作成	ALT 個別指導
9 月 18 日(火)	16:00	Lunch Meeting ③ Solutions		
9 月 20 日(金)	16:00		日本語スライド原稿 チェック締切	
9 月 24 日(火)	16:00	PC 教室開放	スライド(PPT)作成	ALT 個別指導
9 月 25 日(水)	昼休み	Lunch Meeting ④ Analysis		
9 月 30 日(月)			国内リサーチ Background/Methods 終了	
10 月 1 日(火)	16:00	PC 教室開放	スライド(PPT)作成	ALT 個別指導
10 月 2 日(水)	昼休み	Lunch Meeting ⑤ Discussion		
10 月 8 日(火)	16:00	PC 教室開放	スライド(PPT)作成	ALT 個別指導
10 月 9 日(水)	昼休み	Lunch Meeting ⑥ 2 年生よりプレゼンのアドバイス	国内リサーチ終了 英語スライド原稿 ALT チェック締切	
10 月 15 日(火)	16:00	PC 教室開放	スライド(PPT)作成	ALT 個別指導
10 月 31 日(木)	16:00		英語スライド・スクリプト(英語発表原稿)ALT チェック締切	

11 月 5 日(火)	午前中	台湾生徒と共にケアヴィラ伊丹 (介護老人保健施設)に訪問		台湾生徒と交流
11 月 7 日(木)	放課後	お別れパーティ		台湾生徒と交流
11 月 11 日(月)	16:00	A・C グループ プレゼンリハーサル①		ALT 個別指導
11 月 12 日(火)	16:00	B・D グループ プレゼンリハーサル①		ALT 個別指導
11 月 15 日(金)	16:00	プレゼンリハーサル 予備①		
11 月 19 日(火)	16:00	PC 教室開放	スライド(PPT)作成	ALT 個別指導
11 月 25 日(月)	16:00	A・C グループ プレゼンリハーサル②		ALT 個別指導
11 月 26 日(火)	16:00	B・D グループ プレゼンリハーサル②		ALT 個別指導
11 月 29 日(金)	16:00	プレゼンリハーサル 予備②		
12 月 13 日(金)	15:30	台湾 FW 参加者集会 日報について/パフォーマンス練習		法被配布
	17:00	第 2 回保護者会	発表原稿チェック	
12 月 16 日(月)	13:30	A・C グループ プレゼンリハーサル③ パフォーマンス練習		ALT 個別指導
12 月 17 日(火)	13:30	B・D グループ プレゼンリハーサル③ パフォーマンス練習		ALT 個別指導
12 月 18 日(水)	13:30	プレゼンリハーサル 予備③ / パフォーマンス練習		ALT 個別指導

（ウ）台湾フィールドワークの主な内容

(a) 台中市立台中第二高級中等学校の生徒宅でのホームステイ

台中に滞在中、本校生は台中二中生のホストファミリーの家でホームステイを行った。

生徒同士のマッチングは、11 月に実施された台中二中生受け入れ時のものを継承しており、受け入れた生徒宅でのホームステイができるようにしている。この形を採用することで、双方向の交流を深めることができた。台中二中生を受け入れていない生徒については、性別や趣味などを考慮した上で、台中二中の担当教諭にマッチングを依頼した。

(b) 各自の課題研究に関するプレゼンテーションとディスカッション

英語の授業 1 コマ（50 分）の中で、本校生が各自の課題研究について英語でプレゼンテーションを行った。課題研究の分野を考慮して振り分けた A～D のグループは、各々4 人で構成されるが、プレゼンテーションは個人で行った。

本校生 1 人につき、台中二中生 6～8 人がオーディエンスとなり、発表を聞いてもらった。発表のあと、内容に関するディスカッションを行い、意見交換を行った。本校生、台中二中生ともにディスカッションに対して非常に積極的な姿勢を見せ、有意義な活動となった。

(c) 台中市立台中第二高級中等学校での授業体験・パフォーマンス披露

本校生は、パートナー生徒の教室に入って、台中二中の平常授業を体験した。授業者によっては、本校生のためにオールイングリッシュで授業をしていただけたほか、日本と台湾の文化を互いに発表し合う活動や、世界的な社会問題についてディスカッションをする機会なども与えていただいた。

フィールドワーク 2 日目の職員朝礼と、3 日目の学校祭には、事前に練習してきたダンスパフォーマンスを披露した。その中に、けん玉などの日本文化を紹介する場面も盛り込むことができた。

(d) 各自の課題研究テーマに関する現地調査

各生徒が探究しているテーマについて、校内外で調査を行った。調査方法は、現地でのインタビューやアンケート、実物の見学などである。これらの活動を通して、英語で交渉する力や、質問する力が身についた。生徒は、ここで得たデータや情報を海外リサーチの結果として考察し、研究論文の作成に活かしていく。

また、生徒はフィールドワーク中、日報をインターネットの掲示板に投稿し、その日の活動、発見したことや考察したことについて記録する。担当者が、一人ひとりに対してすぐにフィードバックを返すことで、生徒がその反省を翌日の活動に生かせるようにし、より深い学びを促している。

（生徒が撮影した菜食レストランの様子）

台湾フィールドワーク日程表

日付等	時間	日　程	備考
12/20（金）	10:55	BR177 便にて関空から台北へ	関西空港 9:00 集合
	13:10	台北着（桃園国際空港）専用車で桃園駅へ	
	15:34	桃園駅出発　高速列車（新幹線）No.837	
	16:17	台中駅に到着　専用車で台中二中へ	
	17:00	台中市立台中第二高級中等学校到着	
	17:30～17:45	パフォーマンス練習・事前打ち合わせ	＊ホストファミリーと合流後、各家庭へ移動
12/21（土）	07:30～8:00	全校朝礼（挨拶とパフォーマンス）	＊全校朝礼でパフォーマンスを披露
	08:10～9:00 1 時間目	グループ B:プレゼンテーション準備	＊英語の授業の中で、4 グループがそれぞれプレゼンテーションと質疑応答を行う。 ＊プレゼン（or プレゼン準備）をしない時間は、パートナー
	09:10～10:00 2 時間目	グループ B:プレゼンテーション グループ A:プレゼンテーション準備	
	10:10～11:00 3 時間目	グループ A:プレゼンテーション グループ C:プレゼンテーション準備	

	11:10～12:00 4 時間目	グループ C:プレゼンテーション グループ D:プレゼンテーション準備	と授業に参加する。 ＊プレゼン準備 @career planning room ＊プレゼン実施場所 @language learning room
	12:10～13:00	昼食	
	13:10～14:00 5 時間目	グループ D:プレゼンテーション	
	14:10～16:00 6・7 時間目	調理実習:タピオカミルクティー作り	＊エプロン・三角巾・ マスク持参
	16:00	下校	
12/22 （日）	午前	パートナー生徒と学校祭に参加	＊学校祭でパフォーマンスを披露
	午後	下校（パートナーと校外フィールドワーク）	＊FW 計画を事前に相談しておく。
12/23 （月）	ホストファミリーデイ （代休）	ホストファミリーと自由行動	＊FW 計画を事前に相談しておく。
12/24 （火）	07:30～8:00	ホームルーム	＊パートナーのクラスで授業に参加する。
	08:10～9:00	1 時間目の授業に出席	
	09:10～10:00	2 時間目の授業に出席	
	10:10～11:00	3 時間目の授業に出席	
	11:10～12:00	4 時間目の授業に出席	
	12:00～16:00	フィールドワーク（昼食＋街頭リサーチ）	＊昼食は街中で台湾生徒と共にとる。
	16:00～17:00	学校で休憩　@図書館	
	17:00～20:00	お別れパーティ　@図書室	
12/25 （水）	07:30～8:00	ホームルーム	
	07:50～8:00	それぞれのクラスで別れのあいさつ	
	08:30	専用車で台中第二高級中等学校を出発	
	09:32	台中駅出発　高速列車（新幹線）No.612	
	10:09	桃園駅到着　専用車で空港へ	
	10:30	台北（桃園国際空港）到着	
	13:00	BR130 便で台北から関空へ	
	16:25	関西空港に到着	着後、解散

〔訪問学校先　台中市立台中第二高級中等学校 No.109, Yingshi Road, North District, Taichung City, 台湾 404〕

（エ）事後活動

・報告書と研究論文の作成（生徒成果集に掲載）
・台中二中受け入れ活動報告・紹介パネル（A0 サイズ）の作成
・台湾フィールドワーク活動報告・紹介パネル（A0 サイズ）の作成
・「第 7 回　高校生国際問題を考える日」（2020 年 2 月 11 日開催）ポスターセッションに 3 名参加
・3 学期終業式（2020 年 3 月 23 日）で 2 名が全校生徒に対して報告会
・PTA 広報「緑樹」に 1 名のフィールドワーク報告を掲載

（オ）活動の成果

(a) フィールドワーク準備指導の改善

昨年度、複数の生徒のプレゼンテーション準備が出発直前に集中した経緯があり、本年度は、フ

ィールドワーク準備計画を細分化し、それぞれの完成期限を早めに設定した。昨年度は、発表スライド完成までのプロセスを「スライドの草案（原稿）完成」「スライド（データ）完成」と、おおまかに示していたのに対し、今年度は(イ)事前指導の通り、プロセスの細分化を行った。その結果、いつまでに何をするべきかが明確になり、大多数の生徒は、こちらが提示した期限の中で計画的に準備を進めることができた。

今年度はタブレットを 9 月の初めに配布できたこともあり、順調に進められる生徒は、こちらが提示した以上のペースで準備を進めることができ、引率教員や ALT から、より発展的なアドバイスをもらうことができた。一方で、ペースに後れを取る生徒も数人いたが、そのような生徒には、ALT も交えて探究の糸口を手厚く指導することができた。

本校が実施する 3 種類の海外フィールドワークの中でも、台湾フィールドワークは参加者が最も多く、これまでも指導教員の負担が課題となってきた。しかしながら、今年度は出発直前期の過密さが大きく軽減されたというのが担当者の実感である。これは、前述の事由によって、比較的早期に生徒のつまずきを発見でき、手厚くフォローが入れられたことにある。

(b) プレゼンテーションリハーサルの充実

今年度のプレゼンテーションリハーサルは、英語でのグループディスカッション形式を採用した。研究の分野を考慮して振り分けたグループ A～D ごとに実施し、生徒 4 人に対して、引率教員 1 人、ALT 1 人が入って指導に当たった。この形式を採用したことで、より本番に近い形でリハーサルができただけでなく、発表技術を互いに参考にすることも可能となり、生徒間での良い刺激が生まれた。また、質疑応答の中でオーディエンス（他生徒・引率教員・ALT）から与えられるアドバイスをその場で共有することができるので、各自で参考にすることが可能となった。

(c) 積極性の向上

台湾フィールドワーク参加生徒 19 名のうち、大多数の生徒は海外渡航経験がなく、今回のフィールドワークが初めての海外渡航となった。台湾でのリサーチを進めるうえで、他者に英語で自分の意志・意見を伝えることは必要不可欠であり、そのような状況の中で、生徒たちは確実にコミュニケーション能力を向上させた。これまで学んできた英語の実用性を実感する一方で、「もっと英語が話せるようになりたい」という今後の英語学習へのモチベーションにもつながった。また、自分の英語が通じるという自己肯定感を高めることにもつながった。

フィールドワークに参加した生徒たちは、エントリー当初から「挑戦する意欲」を持ち合わせている生徒が多い傾向にある。しかし、中には積極的に前に出られない、自分の意志・意見を伝えることが苦手な生徒もいた。台湾での活動を通して、普段は自ら進んで人前には出ることのなかった生徒が積極的に前に出て話すなど、大きな変化が見られた。

4　企業・大学との連携

5 年間、様々な形で企業や大学との連携を行ってきた。今年度の取り組みは次の通りである。

(1)　企業との連携

本校と連携をしていただいている地元企業は、小西酒造株式会社、松谷化学工業株式会社、三井住友銀行株式会社の 3 社である。昨年度はプログラムの改善の中で、企業の方の講演会を組み入れることができなかったことが課題であった。今年度は、小西酒造株式会社と松谷化学工業株式会社に講演を依頼し、1 年生を対象とした「課題研究のテーマ設定」について、企業としての目線でお話をしていただいた。生徒たちは、今、授業でやっている「テーマ設定」を実際には企業でもやっており、テーマ設定するにあたっては様々な視点（会社の理念や、求められていることなど）で物事を考えなければいけないことを学び、テーマの修正へと活かすことができた。

また、1 月末に行われた令和元年度 SGH 課題研究成果発表会では、1 年生が発表する課題研究に、質問やアドバイスをしていただいた。（第 2 章 5(4)参照）

(2)　大学との連携

今年度は、立命館大学と神戸大学の先生方に講演や成果発表会での質疑の参加を依頼した。日時と内容は次の表の通り。

項目・日時	講師	内容
講演会「分野別講演会」 令和元年 5 月 10 日（木）6 限	立命館大学　准教授 小沢　道紀　氏	「食と文化」「食と自然」「食と人間」「食と社会」の 4 分野について。それぞれの分野で考えられる探究テーマ例あるいはキーワードなどを示していただいた。
講演会「探究テーマの決め方」 令和元年 5 月 18 日（金）6 限	神戸大学　教授 石川　慎一郎　氏	課題研究をスタートさせるにあたって必要な知識や気を付ける点についての講演をしていただいた。
校内成果発表会（1 年） 令和 2 年 1 月 17 日（金）5・6 限	神戸大学　教授 石川　慎一郎　氏	・代表 6 グループに対して質疑 ・講評
SGH 課題研究成果発表会 令和 2 年 1 月 30 日（木）午後	立命館大学　教授 井澤　裕司　氏 神戸大学　教授 石川　慎一郎　氏	・2 年生の発表に対して質疑 ・全体講評（井澤氏）

講演会では、これから課題研究をスタートさせる 1 年生に対して、どんな分野があり、食とどう関わっているのか、またテーマ設定の際にはどんな点に気を付ければよいのか、という内容を話していただいた。1 年生にとって、これから始まる課題研究の道しるべとなった。

校内成果発表会（1 年）の質疑では、それぞれのグループに対して、するどい質問がなされた。指導してきた教員にとっても大変刺激のある質疑応答となり、発表者だけでなく 1 年生全体が学びを共有する場となった。SGH 課題研究成果発表会での質疑では、“本当にそうなのか？”とひねくれてみる必要があるとご指導いただいた。（第 2 章 5(4)参照）

(3)　今後の取り組み

小西酒造株式会社、松谷化学工業株式会社、三井住友銀行株式会社との連携は、SGH プログラムが終了しても継続をお願いしている。来年度以降も課題研究は継続され、テーマの中には地域の問題を取り入れるグループも出てくると考えられる。地元とのつながりが今後も活かされていくと考える。

また、要所要所で大学との連携を取り入れることで生徒たちの学びに刺激が与えられている。この活動も今後もなるべく取り入れていきたい。

5　その他の活動

(1)　県伊祭（学校祭）

SGH 活動を校内外に知ってもらい地域への還元とするために、一教室を使用し展示を行った。今後の展示の仕方の参考にするために、アンケート調査に協力して頂いた。

（ア）展示内容

①睡眠に関する課題研究(英)
②ニューヨーク FW 地図
③緑茶とカテキンに関する課題研究(英)
④SHAKE SHACK の紹介
⑤ニューヨーク FW 動画
⑥イタリア FW 動画
⑦イタリア FW 地図
⑧減塩塩の課題研究(英)
⑨イタリアの給食メニュー
⑩ハーブコーナー
⑪スローフードの紹介(ポスター)
⑫スローフードの紹介(プレゼンテーション)
⑬食べ物の好き嫌いに関する課題研究
⑭糖尿病予防飲料に関する課題研究
⑮台風の影響に関する課題研究
⑯砂糖税に関する課題研究
⑰イタリア FW パネル
⑱台湾 FW パネル
⑲ニューヨーク FW パネル

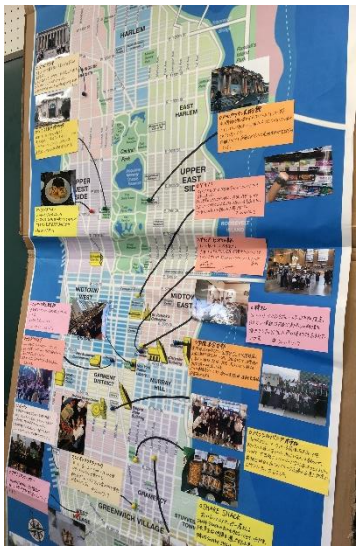
＊(英)は英語表記

（イ）SGH 展示教室　来訪者

属性	人数	%
在校生	69 人	34%
在校生保護者	90 人	45%
伊丹高職員	8 人	4%
外部高校生	4 人	2%
小中学生	6 人	3%
その他	23 人	12%
計	200 人	

（その他：OB 11 名、近隣住民 3 名、外部保護者 2 名、教育実習生 2 名、OB 保護者 1 名、不明 4 名）

在校生の保護者が一番多く、保護者は子どもの学校の活動に興味を持ち協力的であることが分かる。次いで在校生の人数が多く、普段 SGH の活動に関わっていない生徒にも SGH 活動の内容を知ってもらう良い機会になった。



（ウ）展示物の評価

Q：一番良かった展示物は？

1 位：ニューヨークフィールドワーク紹介の展示・・・　38 票
2 位：ハーブコーナー・・・・・・・・・・・・・・・・・　34 票
3 位：睡眠負債についての課題研究(英)・・・・・・・　27 票
4 位：緑茶カテキンについての課題研究(英)・・・・・　11 票
5 位：SHAKE SHACK 紹介・・・・・・・・・・・・・・　10 票
6 位：フィールドワーク動画・スローフード紙芝居
　　食べ物好き嫌い課題研究　・・・・・・・・・・・　各 8 票

Q：展示で改善すべきことは？

情報量が多い／クイズが難しい／タイトルが小さい／絵が欲しい／
小さくて読めない／説明して欲しい／順番が分りにくい／
日程と活動意義が知りたい／テーマを絞った方がいい／英語が難しい

上の 2 つの質問の回答から、「一番良かった展示物」で上位に選ばれたものに共通することは、ビジュアルに訴えるものである。地図・写真・イラスト・実物などを用いた展示、紙芝居での分か

りやすい説明が好評だった。一方「改善すべきこと」の回答から分かることは、文字が小さく情報量が多いものや英語で書かれて理解が難しいものは不評だったことである。

（エ）SGH 活動の理解度

よくわかった	85 人
わかった	96 人
あまりわからなかった	4 人
わからなかった	1 人
計	186 人

来訪者のほとんどが SGH 活動を理解してくれたことから、今回の展示は概ね成功したと言える。今後またこのような展示の機会があれば、発表会で使用したポスターを転用するのではなく、絵や写真を効果的に配置し、専門用語ではなく平易なキーワードを用いるような、分かりやすさを意識したポスターに作り変える必要がある。可能ならば、展示内容を説明する係を配置すべきだろう。

(2)　小学校英語アクティビティー出前授業

（ア）目的　　生徒が主体的に企画した発信活動の実施
　　SGH 活動の地域への還元

（イ）対象　　伊丹市内の小学校　3 年生

（ウ）参加生徒　3 年 18 名・2 年 10 名　　合計 28 名　のべ 53 名
　　（昨年度　3 年 7 名・2 年 20 名　　合計 27 名　のべ 36 名）

（エ）訪問先　4 小学校 13 クラス（昨年度 3 小学校 6 クラス）
　　笹原小（3 年 4 クラス）　　鴻池小（3 年 3 クラス）
　　昆陽里小（3 年 3 クラス）　摂陽小（3 年 3 クラス）

（オ）英語アクティビティー授業案
1) ウォームアップ（世界にどんな国がある？＋外国での活動を紹介）
2) 自己紹介（好きなもの 誕生日など）
3) いろんな気持ちの説明(Happy, Hungry, Cold, Hot, Angry, Tired, Sad, Sleepy)
4) 気持ちの単語を使ってジェスチャー・ゲーム
5) 気持ちの単語でフルーツ・バスケット
6) 振り返り・感想記入

（カ）日程概要

4 月 22 日(月)	伊丹市内の小学校へ案内送付
5 月 17 日(金)	各小学校から申込締切
5 月 29 日(水) ～6 月 7 日(金)	生徒・担当者・ALT　英語アクティビティー内容打合せ
5 月 29 日(水) ～6 月 7 日(金)	生徒と担当者で小学校へ訪問し事前打ち合わせ 生徒・担当者　担当小学校決定　授業案作成　模擬授業

7 月 8 日(月) ～7 月 17 日(水)	小学校へ訪問しアクティビティー出前授業実施
7 月 18 日(火) ～7 月 30 日(火)	お礼状送付
7 月 18 日(金)	報告書締切

（キ）生徒の報告書より

・出前授業に行くと決めた時やデモンストレーションを見た時は、ちゃんと授業が出来るのか本当に不安でした。人の前に立つことや目立つことが苦手な私には先生は向いていないのではないかと悩むときもありましたが、今回の出前授業に参加して、その悩みよりもむしろ先生になりたいと思いました。本当に参加して良かったと思います。それぐらい楽しく、貴重な充実した時間を過ごせました。この経験や今回で学んだことや反省点などを活かせるようにしていきたいです。

・私は今まで先生が 1 時間の授業のためにどのくらいの準備時間をかけているかと考えたことがありませんでした。しかし、今回小学校英語アクティビティーに参加して 1 時間のために何時間もかけて準備していることが分かり先生がすごかったことに気づきました。

・SGH の指定校が今年で終わってしまいます。ですがこの小学校英語アクティビティーは続いて欲しいです。いつも教えてもらう側にいる私たちが、教える側に立つ貴重な機会なので経験した方がいいと思います。

・小学生からの感想用紙を読んでいると thank you ございました。と書いてありました。その感想用紙に書いてあった thank you（ありがとう）という単語を見て頑張って書いてくれたんだと思うと、とても嬉しくて可愛いなと思いました。小さい子が苦手でしたが、貴重な体験ができてよかったです。

（ク）小学校の先生からのフィードバック

(a) 内容

・気持ちを表す英語は既習していたので、児童も自信を持って話すことができていた。体を動かすゲームをたくさん取り入れてくださったおかげで、飽きずに学習に集中できていた。振り返りの時間も十分にあった。

・ゲームの難易度はもう少し高くても良いのかな？と思いました。

・「気持ちバスケット」は hungry と angry の違いが聞きとれず、子どもたちも動きにくかったようだったので、真ん中でジェスチャーさせても良いかな、と思いました。

(b) 運営

・４人がしっかり役割分担できていたので良かった。事前に模擬授業を十分にしてきたのか、テンポよく授業できていました。説明の仕方も丁寧で良かったです。

・英語の通訳するところが、気配りができていると思いました。

・台本（授業案）が細かく設定されていたので学生さんも安心して授業ができたようです。強いて言うなら、英語や普通の話し方が速かった。緊張のためもあるが、緩急がつくと児童の聞く姿勢も変わってくると思う。

・終始笑顔で、子供たちがリラックスして受けられていました。時間配分もばっちりでした。

・堂々とハキハキした説明や進行が良かった。子どもたちとの距離が近くて良かった。

・最初の紹介は英語ではなく日本語でいいと思う。小学生にとって簡単で分かりやすい英語でも十分に指示や褒める言葉があるので（Classroom English）取り入れてみてはどうか？

・最後、時間が余った時に工夫して残り時間を活用していて良かった。

・しっかり言葉を聞こえたように真似させる事が第一目標なので、カタカナで黒板に書くことはしないで欲しい。

(c) その他

・どの生徒も一緒に楽しみながら授業を進められていたことが何よりも素敵なことだと思った。
・自ら学んだ英語を伝える場として小学生を選んでくださったことが嬉しかったです。教える立場に立つと、伝えることが難しいと実感し、もっと英語を頑張ろうという意識が芽生えてくるかもしれない。また、小学生にとっても「自分が高校生になれば、あんなに英語がしゃべれるんだ！」という未来のイメージも出来てよかった。
・とっても良い取り組みなので、これからも生徒のため、小学生のためにも続けてください。

（ケ）成果と今後の展望

(a) 成果

・プログラムの進化

3 年目の企画となり、先輩から後輩への引継ぎがスムーズに進んだ。昨年経験した 3 年生が模擬授業をして、初めて参加する 2 年生が授業のやり方を覚えた。本番では、予想外のことにも 3 年生が臨機応変に対応し、2 年生は多くを学んだ。授業内容もこれまでの経験に基づき改善が加えられた。

・活動の広がり

昨年より実施小学校数やクラス数が増え、より多くの生徒が参加した。昨年と同様、SGH 継続性以外の生徒が自発的に参加を希望し、SGH 活動を超えての広がりが定着してきている。

・生徒の成長

リハーサル時に先生役と小学生役になりきることで授業の疑似体験をし、想像力を働かせて様々な場面を想定して準備をすることができた。さらに、本番の授業を複数行った生徒は、反省点を他の生徒に伝え、授業改善につなげ、すぐに次の授業に生かすことができた。生徒主導で打合せから礼状送付・校内の報告会まで行ったことで、社会と関わるうえでの一連の流れを知り、身に付けることができた。

・相乗効果

小学生にとって高校生は憧れの存在であり、高校生にとって小学生は可愛らしいものである。双方の好意的な思いが拙いながらも一生懸命な英語の授業を何倍にも魅力的なものにしたようである。小学生は英語を楽しみながら学び、高校生は自信をつけることができた。小学校の先生方からも「勉強になった」という声が聞かれ、お互いに多くの気づきを得た。

・地域への発信・還元

本校の SGH 活動についてご存じない地域の方や小学校の先生方に発信・還元する機会ができた。

(b) 今後の展望

・スケジュール調整が難しいが、高校生が午後授業がない 7 月または１２月の期末考査後を活用し、小学校の午後の授業に入れていただける日程を提案し、SGH 終了後も継続していく。
・もともと小学校 3・4 年生に英語のアクティビティーが導入される時期に合わせ、地域貢献・発信活動として生徒が企画し 3 年前に始めた活動であるが、初年度から 5・6 年生での実施希望もあった。5・6 年生では、既に英語の授業が始まっているので、ご担当の先生方から、全て英語で実施してほしかったというご要望を事後にいただいたこともある。今年はすべて 3 年生だったので、日本語での説明も必要だったが、来年度 SGH 終了後は、英語のみの授業にも対応できるように準備していきたい。

(3)　海外大学フェア

（ア）目的　日本以外の大学について知ることで、広い視野で進路を考えることができるようになる。

（イ）実施日　7 月 12 日(金)　2・3・4 限　2 年生 315 名対象

（ウ）実施内容

・事前　参加 9 か国の大学進学に関する説明を読み、第 1～9 希望まで調査し参加国決定
　　生徒は 2 か国の分科会に参加する

・全体会（40 分）　講演：「高校生の将来を考えるグローバルセミナー」
　　講師：一般法人　台湾留学サポートセンター　センター長　安蒜　順子　氏

・国別分科会第Ⅰ部（30 分）、第Ⅱ部（30 分）（参加団体については表 1 を参照）

表 1：国別分科会参加団体一覧

番号	国・地域	講演者(敬称略)		
		団体名	役職	名前
1	アメリカ合衆国	駐大阪・神戸米国総領事館 広報部	EducationUSAアドバイザー	西部　由美
2	カナダ	株式会社ベネッセコーポレーション	西日本教育支援推進部	岡田　麗央奈
3	イギリス	株式会社Study International	留学カウンセラー	稲城　浩志
4	イタリア	イタリア文化会館 — 大阪	受付事務	高城　ちひろ
5	フランス	日仏文化協会	大阪ビューロー店長	鈴木　真由美
6	オーストラリア	株式会社ICC コンサルタンツ	支店統括ディレクター	今村　洋一
7	ニュージーランド	(株)留学ジャーナル	大阪支店　支店長	小林　良美
8	台湾	一般社団法人 台湾留学サポートセンター	センター長	安蒜　順子
9	韓国	神戸韓国教育院	室長	朴　正娥

（エ）生徒の国別分科会第Ⅰ部・第Ⅱ部参加状況

分科会	アメリカ	カナダ	イギリス	イタリア	フランス	ｵｰｽﾄﾗﾘｱ	ﾆｭｰｼﾞｰﾗﾝﾄﾞ	台湾	韓国
第Ⅰ部	89	39	42	34	34	39	16	10	12
第Ⅱ部	87	38	43	40	42	35	13		17

（オ）事前アンケートと事後アンケートの結果と考察

本講演会が生徒にどのような変化を与えたのかを知るために、生徒に対して事前と事後に海外進学（表 2）と海外留学（表 3）についてどのように考えているかを問うアンケートを実施し、下記にまとめた。

表 2：海外進学に対する意識

	事前	事後
1.海外進学を考えている	1 名	4 名
2.海外進学も少し考えている	19 名	45 名
3.海外進学はあまり考えていない	106 名	136 名
4.海外進学は全く考えていない	184 名	107 名

表 3：海外留学に対する意識

	事前	事後
1.海外留学を考えている	13 名	19 名
2.海外留学も少し考えている	73 名	109 名
3.海外留学はあまり考えていない	103 名	105 名
4.海外留学は全く考えていない	121 名	59 名

※「海外進学」は、高校卒業後、海外の大学に進学（入学）することを意味する。

※「海外留学」は、高校卒業後、日本の大学等に進学し、その後海外の大学に留学することを意味する。

昨年度までは、海外進学に対する意識調査のみを行っていたが、今年度は、日本の大学に進学した後に留学することについても調査を行った。生徒たちにとっては、進学に比べて留学の方が多少ハードルが下がるのか、事前調査の時点で数値は高いものとなった。

事前・事後の変化では、海外進学・留学ともに「1. 」「2. 」が大幅に増え、生徒の感想からも肯定的な意見が多数見られた。以上のアンケート結果から、海外進学・留学を、より身近のものに感じることで、生徒たちの進路探究の幅を広げるという目的は概ね達成された。

「海外大学フェア」を現在の規模で実施するのは、今年度が最後となる。この行事を経て海外進学・留学を視野に入れた生徒が多数いることから、来年度以降も形を変えて、生徒の将来の幅を広げられるような機会を設けることができればと思う。その際には、生徒がより意欲的に参加できる実施形態や、適当な講演者について検討する必要がある。

(4)　成果発表会

（ア）1 年生

時期	名称	内容
11 月 22 日(金) 11 月 29 日(金)	合同ゼミ成果発表会	・２つのゼミ合同で実施 ・1 ゼミ内の 5 グループがポスターを使って発表 ・聴衆の生徒も評価を行った。 ・ゼミ担当者は一番良かったグループ 1 つを選出
1 月 17 日(金)	校内成果発表会	・代表選考で選ばれた 14 グループのうち、企画部の選考を経て選ばれた 6 グループがパワーポイントを使って発表 ・外部講師により各発表に対して質疑を行っていただいた。 ・外部講師、教員、生徒の評価・投票により上位 3 グループを選出
1 月 30 日(木)	SGH 課題研究成果発表会 （校外成果発表会）	・校内成果発表会で選ばれた 3 グループがパワーポイントを使って発表 ・提携している企業から 3 名の方に質疑応答に参加していただく。

以下は詳細である。

・合同ゼミ成果発表会（場所：教室）

1 学期から継続してきた課題研究の成果を発表する場であった。ポスターを使って 4 分間の発表を行い、その後生徒同士の質疑応答の時間を設けた。生徒たちはルーブリック（第 4 章参照）に沿って評価をしながら発表を聞き、ゼミ担当者は 1 番良かったと思われるグループ 1 つを選出した。

・1 年生 SGH 校内成果発表会（場所：緑創館 2F ホール）

代表選考会で選出された 14 グループのうち、企画部教員 5 名でルーブリック（第 4 章参照）に沿ってポスターの評価を行った。その中で上位 6 グループが、パワーポイントの資料を作成し、校内成果発表会で発表をした。発表時間は 4 分、質疑応答 4 分の計 8 分間の発表であった。質疑応答には神戸大学教授の石川慎一郎氏に参加していただいた。石川氏と総合的な探究の時間の担当教員 11 名および生徒が評価をつけながら聞き、特によかったグループに投票する形で上位 3 グループを選出した。この 6 グループの指導は、授業だけではなく放課後にもおよび、選ばれた生徒たちの負担は大きかったと考えられるが、前向きに取り組む姿勢がみられた。

・SGH 課題研究成果発表会（場所：伊丹アイフォニックホール）

校内成果発表会で選出された 3 グループは、神戸大学の石川氏の助言も参考に、論理的な展開を考え発表内容に改善を加えて、校外での発表会に臨んだ（発表時間 4 分、質疑応答 3 分）。質疑では、本校と初年度から連携していただいている小西酒造株式会社、松谷化学工業株式会社、三井住友銀行株式会社の 3 社からそれぞれ 1 名ずつ参加していただいた。質問では、身近な疑問をテーマにした共感を得やすいテーマであることは評価されたが、リサーチクエスチョンは簡単には答えの出ない問いを立てると良いのではないか、とするどい指摘もいただいた。また、自分たちの研究に都合のよいデータに偏らず、もっと幅広くいろんな視野に立つべきだとアドバイスもいただいた。

（イ）2 年生

時期	名称	内容
11 月 7 日(木) 11 月 21 日(木)	国別成果発表会	・対象地域ごとでパワーポイントを使って発表 ・英語教員 2 名、ALT2 名の評価を元にそれぞれの国ごとで上位 3 名を選出
12 月 18 日(水)	校内成果発表会	・選出された 6 名がパワーポイントを使って発表（聴衆：2 年生） ・外部 ALT2 名、本校 ALT2 名、教員 5 名、生徒の評価によりそれぞれの国ごとで上位 1 名を選出

1 月 30 日(木)	SGH 課題研究成果発表会 （校外成果発表会）	・校内成果発表会で選ばれた 2 名がパワーポイントを使って発表 （聴衆：1 年生＆一般来場者） ・外部講師の方に質疑応答に参加していただく。

以下は詳細である。

・国別成果発表会（場所：図書室または会議室）

1 学期から継続してきた課題研究の成果を発表する場であった。パワーポイントを用いて 5 分の発表の後、3 分間の質疑応答の時間を設けた。質問者は ALT と英語教員である。発表も質疑応答もすべて英語で行った。ALT と英語教員はルーブリック（第 4 章 4 参照）に沿って評価をつけ、評価点の合計の高かった各国上位 3 名を選出した。

・2 年生 SGH 校内成果発表会（場所：緑創館 2F ホール）

国別成果発表会で選出された各国 3 名がさらに発表内容を改善し、リハーサルを重ねた状態で校内成果発表会に臨んだ。5 分の発表と 3 分の質疑応答を英語で行うのは国別発表会と同様であるが、質問者は外部講師の ALT　2 名（鳴尾高校 Tennille Richards さん, 県立西宮高校　Rachelle Ramos さん）にお願いした。外部講師 ALT2 名本校 ALT2 名、本校教員 5 名、生徒が評価をつけながら聞き、特によかった研究に投票する形で各国の一番良い発表 1 つを選出した。

・SGH 課題研究成果発表会（場所：伊丹アイフォニックホール）

アメリカを対象とした課題研究とイタリアを対象とした課題研究についてそれぞれ発表 5 分、質疑応答 5 分の 10 分間の発表を行った。質疑には立命館大学教授　井澤裕司氏と神戸大学教授　石川慎一郎氏に参加いただき、井澤氏には日本語で、石川氏には英語で質問をしていただいた。なお、発表は 1 年生や一般来場者にも内容が伝わるように、舞台端に日本語字幕も用意した。質疑では、トランス脂肪酸やグルテンが本当に健康に悪いと言い切れるのか、ひねくれたものの見方も必要だとアドバイスをいただいた。また、厳しい質問もあり、発表者としてはうまく質問に答えられず悔しい思いもあっただろうが、自分の研究についてより深められたことは今後につながると考えられる。

（ウ）成果と今後の取り組み

・1 年生

年間プログラムの中に、中間報告会 2 回、成果発表会 3 回（ゼミ内、校内、校外）を組み入れることで、要所要所で指導者のアドバイスや評価を得て、各グループの研究の修正を行うことが出来た。特に、校内や校外成果発表会では外部の方に質問や指摘を受けることで、発表者はもちろんのこと、1 年生全員が学びを共有することができた。また、校内や校外での発表者は選考によって決まることが生徒たちへ良い影響を与え、より積極的な活動につながったと考える。

・2 年生

発表会が年間を通した研究内容を伝える場として定着した。課題研究の初期指導を前年度の 2 月に前倒ししたことにより、より充実した研究となった。英語での発表準備や質疑応答の準備を ALT の助けを借りて重ねることで、スピーキング力の向上も見らえる。また、校外成果発表会で 2 年生が 1 年生全員に英語での発表を見せることは、発表者にとって良い経験になったことはもちろん、1 年生に対して「1 年後に目指すべき自分の姿」をはっきりと示すまたとない機会になった。

・今後の取り組み

来年度以降も課題研究を継続して行い、成果発表会もプログラムに組み入れる。時期としては、ゼミ内での発表会を 11 月頃、学年成果発表会を 2 年は 12 月、1 年は 1 月、1・2 年合同成果発表会を 3 月上旬に設定している。質疑等に企業や大学教授のご協力をいただける形ができればなお良いと考える。

第 3 章　課題研究活動の評価およびアンケート等の調査結果と分析

1　SGH 企画推進委員，および SGH 運営指導委員一覧と委員会の記録

(1)SGH 企画推進委員

お名前	お　役　職
井澤　裕司	立命館大学　食マネジメント学部　教授
石川　慎一郎	神戸大学　大学教育推進機構　教授
秋田　久子	兵庫県ＮＩＥ推進協議会　会長
西川　広之	小西酒造株式会社　総務部長
多鹿　直樹	松谷化学工業株式会社　社長戦略室　経営戦略課課長
阪辻　洋美	株式会社三井住友銀行　伊丹エリア支店長
有田　きみ	兵庫県教育委員会事務局　高校教育課　指導主事

(2)SGH 運営指導委員

お名前	お　役　職
武田　政義	兵庫県顧問　県社会福祉協議会顧問　元兵庫県教育長
佐藤　由紀子	伊丹市立美術館　館長　元伊丹市教育長
金子　治平	神戸大学大学院　農学研究科　教授
朝倉　敏夫	立命館大学　食マネジメント学部　学部長
有田　きみ	兵庫県教育委員会事務局　高校教育課　指導主事

(3)委員会の記録

（ア）第 1 回企画推進委員会

期日　　令和元年 5 月 27 日（月）14:00～15:00
場所　　兵庫県立伊丹高等学校　緑創館 1F 会議室
出席者　SGH 企画推進委員
　　秋田　多鹿　阪辻　松岡（有田委員代理）
　　本校職員
　　校長　教頭　事務長　専門官　中山　佐藤　村田　黒田　中村
　　乾　楠　五ノ井　正田　北村　大津

《出席委員への説明》

1　昨年度までの振り返りと今後の課題
2　「英語の型」による発信ができる 4 技能伸長プログラム開発について
3　令和元年度　課題研究について（年間計画・細案）
4　令和元年度　海外フィールドワークについて（報告・年間計画）
5　来年度以降（SGH 指定終了後）の計画

《出席委員からの指導助言》

1　課題研究、およびフィールドワークの課題
・インプットが多くなければアウトプットはできない。
・やらされているという感覚が、生徒の意欲減退につながっている。何をしたらいいのかがわからず、グループ全員で足踏みをしてしまい、その間にやる気をなくしてしまう。

・ゼミが主と副の２人体制というのは良い取り組みだと思うが、教師からの「指導」という形をとると、意欲減退が起こる。教師は、「カウンセリング」という形で生徒たちをフォローしていくと良いのではないか。
・全員がフィールドワークに参加するのは厳しいかもしれないが、周囲に与える波及効果を大切にしてほしい。

2　課題研究の評価、および情報発信
・県立伊丹の SGH 活動は、３年目の中間評価を受けて、より探究的でプロセス重視の活動になった。SGH が終われば活動が終了するのではなくて、それを来年度以降どう活かすのかを考えてほしい。
・SGH の活動をどのように地域に還元するか、今の活動を総括して、良いものにしていかなければならない。
・これまでに SGH に携わった方々（生徒・教師・OB・OG・地元の方）によるコメントをホームページで発信するのはどうか。SGH の活動を、関係者自身に語ってもらうことで、地域への還元になるのではないか。

（イ）第１回運営指導委員会
期日　　令和元年７月２日（火）14:00～15:00
場所　　兵庫県立伊丹高等学校　校長室
出席者　SGH 運営指導委員
　　武田　佐藤　金子　有田
　　本校職員
　　校長　教頭　専門官　事務長　中山　佐藤　村田　黒田　中村

《出席委員への説明》
1　昨年度までの振り返りと今後の課題
2　「英語の型」による発信ができる４技能伸長プログラム開発について
3　令和元年度　課題研究について（年間計画・細案）
4　令和元年度　海外フィールドワークについて（報告・年間計画）
5　来年度以降（SGH 指定終了後）の計画

《出席委員からの指導助言》
1　課題研究の評価
・県立伊丹高校の SGH は「食と健康」をテーマにしているが、出口が少し曖昧であるように思う。どんな未来像をもって探究活動に臨ませるかの部分が不足しているのではないか。
・出口が曖昧な活動に対して、どんな形で生徒の意欲を持続させるのか、あるいは自己研鑽させるのか。そこに難しさを感じる。
・テーマを「やりたい事」で選ぶのではなく「調査可能なこと」で選ぶべきである。生徒たちが、「どんな調査ができるのか」という視点をもってテーマ設定をしていけたらよいのではないかと思う。
・探究型というのは分かるが、探究のメソッドの部分が弱いように感じる。例えば、アンケート調査はどのようにとればよいのか、データはどのように読みとればよいのか、といったベースになる部分の教育を、教科との連携で行うことができるのでは。
・情報リテラシーを、早いうちに身に着けさせた方がよい。
・学年ごとにプログラムが分断されているように思う。先輩が後輩を指導するなど、活動の情報を上から下におろすという視点があっても良い。廊下や階段に高学年の生徒が作成した成果物を掲示するなどして、後輩たちに一定の目標を見せることも大事ではないか。

2　課題研究の成果の共有・情報発信
・うまくいきかけている学校との情報共有を行い、活動の取捨選択をする必要性を感じる。

・保護者は、県立伊丹高校の SGH に大変関心を持っており、SGH はこの学校の大きな魅力でもある。だからこそ、保護者にこの活動の内容をより知ってもらえるように広報すべきではないか。
・SGH の成果は、生徒 だけのものと考えてしまいがちだが、その成果は教員にも蓄積されている。それは、伊丹高校だけではなく、他の学校に異動しても活かされるものである。
・来年度以降、SGH の成果をどう活かしていくかということを、SGH の活動ではもちろん各教科の中でどう活かせるかを考え、できることから実践してもらいたいと思う。

（ウ）第 2 回企画推進委員会

期日　　令和 2 年 1 月 30 日（木）15:30～16:30
場所　　いたみホール　5F　会議室
出席者　SGH 企画推進委員
　　井澤　石川　西川　多鹿　阪辻　有田
　　本校職員
　　校長　教頭　専門官　中山　佐藤　村田　黒田　中村

《出席委員への説明》
1　5 年間の第 1～3 学年の取り組み（活動報告・成果）
2　「英語の型」による発信ができる 4 技能伸長プログラム開発について
3　来年度以降（SGH 指定終了後）の計画

《出席委員からの指導助言》
1　課題研究の評価
・今回の発表では、良くも悪くも方法論的な縛りがはっきり出ていた。教師が苦労して方法論的な指導したことがよくわかるが、逆に言うとあまりはみ出しがなく、方法論ばかりが前面に出てきている印象を受けた。しかし、これも教育の成果という意味では良かったのではないか。
・5 年間を振り返ってみて、伊丹高校にとって良かったのは、中間評価が厳しかったことではないか。そのときに、教師陣が人任せではなく、自分たちでどのように取り組みを変えていけば良くなるかを考えていったことが､SGH 後半のプログラムの充実につながったと思っている。
・生徒の発表を聞いていて、課題研究が予定調和的になっているという違和感があった。厳しい言い方にはなるが、答えが出ていることに対して、それに合う情報を集めただけに見える。果たしてそれが課題研究の目的なのだろうかと感じた。今回の発表は、手段が目的化している典型例のように思える。

2　来年度以降の取り組みに関して
・「良い研究」というのは、一義的には決められないが、少なくとも伊丹高校における「良い研究」とは何なのか、どのようなものが「良い成果」なのかを明確に定義し、指導者が完全に同じ意識をもって生徒に伝えていく必要がある。頑張っている生徒が、自分が与えられた目標に近づいていることが実感できるような仕組みを考えていってもらえたらと思う。
・近年、地域振興の核としての高等学校の機能強化の重要性が叫ばれている。プロジェクトを進める上で、育成すべき人材や能力を学校全体で共有して、組織的・計画的に進めていってほしいと思う。卒業生がグローバルな視点をもって、地域を支えていけるリーダーになることを願っている。
・5 年間の成果として「リサーチスキル」「思考力」「日英両言語による発信力」の向上が挙げられている。この事実について、指導している教員や、実際に発表を聞いた委員にとっては、生徒の能力が確かに向上している印象を持つ。しかし、これを社会に向けてどう発信していくかが難しい。
・例えば、SGH1 年目の生徒たちの探究のアウトプットと、現在の生徒たちの探究のアウトプットが、どういう点で良くなっているのかを数値化するなどして発信する必要がある。

（エ）第 2 回運営指導委員会

期日　　令和 2 年 2 月 20 日（木）14:00～15:00
場所　　兵庫県立伊丹高等学校　校長室
出席者　SGH 運営指導委員
　　武田　佐藤　金子　朝倉　有田
　　本校職員
　　校長　教頭　専門官　事務長　中山　佐藤　黒田　中村

《出席委員への説明》

1　5 年間の第 1～3 学年の取り組み（活動報告・成果）
2　SGH アンケート結果報告
3　「英語の型」による発信ができる 4 技能伸長プログラム開発について
4　来年度以降（SGH 指定終了後）の計画

《出席委員からの指導助言》

1　課題研究の評価

・国の SGH プログラムの目的は、「研究開発」であった。県立伊丹高校の探究プログラムの型が完成し、定着したということは、それをもって SGH プログラムが成功したと言えるのではないか。
・SGH のプログラムを通して、生徒の中に成果があらわれているが、一方で、このプログラムに携わった教員の側にも大きな成果があらわれているはずである。是非その成果を、今後の生徒たちや、新たに県立伊丹高校に赴任してくる教員にも波及させていってほしい。
・様々な分析が出ているが、この 5 年間で培ってきたものを再度確認して、職員全体で共有しておかなければならない。確認の作業の中で、成長を実感することが、来年度以降のエネルギーに変わっていくと思う。

2　来年度以降の取り組みに関して

・地域のために生徒が貢献するだけではなく、生徒の学びを通して地域創生が実現されていくプログラムを期待している。育成すべき能力や人間像を、学校以外の関係各所（大学・伊丹市など）に共有した上で新たなプログラムを進めていってほしい。
・他校の大学院生のサポートを受けるなど、ある程度の外注化を考えていかなければ、来年度以降の取り組みによって指導者の側が疲弊しきってしまう。普段の授業とのバランスも考慮しなければならない。
・大学院生のサポートを受ける場合には、文系・理系それぞれの中で、研究の進め方やプレゼンテーション方法なども異なるので、バランスをとったほうが良いと思う。
・新しく伊丹高校に赴任してくる教師にも、SGH5 年間で培ってきた財産を確認・共有しながらプログラムを進めてほしいと思う。

2　アンケート等の調査結果と成果分析

(1)　本校志望理由の変遷

平成 26 年度入学生より、本校を志望する理由をアンケート調査している。

（ア）質問内容

質問：本校を志望したポイントは何ですか。
次の選択肢の中から最も重視したものを１つだけ選び〇をつけてください。
１通学時間　２通学方法　３ＳＧＨ　４進学実績　５部活動　６教育課程（授業内容）
７学校行事　８設備　９伝統　１０その他（　　）＊具体的に記入

（イ）各学年の実施時期

69 回生…平成 28 年 3 月（比較を取るために 2 年生の 3 月に実施した。）
70 回生…平成 28 年 3 月（比較を取るために 1 年生の 3 月に実施した。）…SGH 初年度
71 回生…平成 28 年 4 月　…SGH 第 2 年次
72 回生…平成 29 年 4 月　…SGH 第 3 年次
73 回生…平成 30 年 4 月　…SGH 第 4 年次
74 回生…平成 31 年 4 月　…SGH 第 5 年次

（ウ）結果　(%)

	通学時間	通学方法	SGH	進学実績	部活動	授業内容	学校行事	設備	伝統	その他
74 回生	16.9	3.6	4.3	28.1	12.6	14	13.7	1.8	1.8	3.2
73 回生	11.6	2.5	10.1	28.9	11.9	12.9	13.5	0.3	1.9	6.3
72 回生	9.7	2.5	11.3	37.2	12.8	10.3	12.2	0.3	0.9	2.8
71 回生	9.3	3	12.6	31.8	17.9	13.6	7.9	1.3	2	0.7
70 回生	30.4	4.8	0.6	14.4	22.4	5.8	10.5	1	1.9	8.3
69 回生	26.8	2.2	0.3	18.8	16.9	8	7.6	0.3	4.1	15

（エ）考察

今年度が SGH の最終年ということもあり、中学生への説明会では SGH について広報することを控えていた。そのためか、SGH を主な目的として入学した生徒の数は昨年度までに比べると大きく減少した。SGH というキーワードを「課題研究」「課題探究」といった言葉で置き換えて今後は広報をし、SGH で開発したプログラムの継続に力を入れたい。

(2)　意識調査(平成 30 年度 1 年生総合的な学習の時間他)

（ア）目的　　昨年度の SGH プログラム（第 1 学年）の課題を把握し、今後の指導に活かす

（イ）対象　　2019 年度 73 回生（2 年生）315 名

（ウ）時期　　令和元年 7 月

（エ）内容　　図 1 の通り

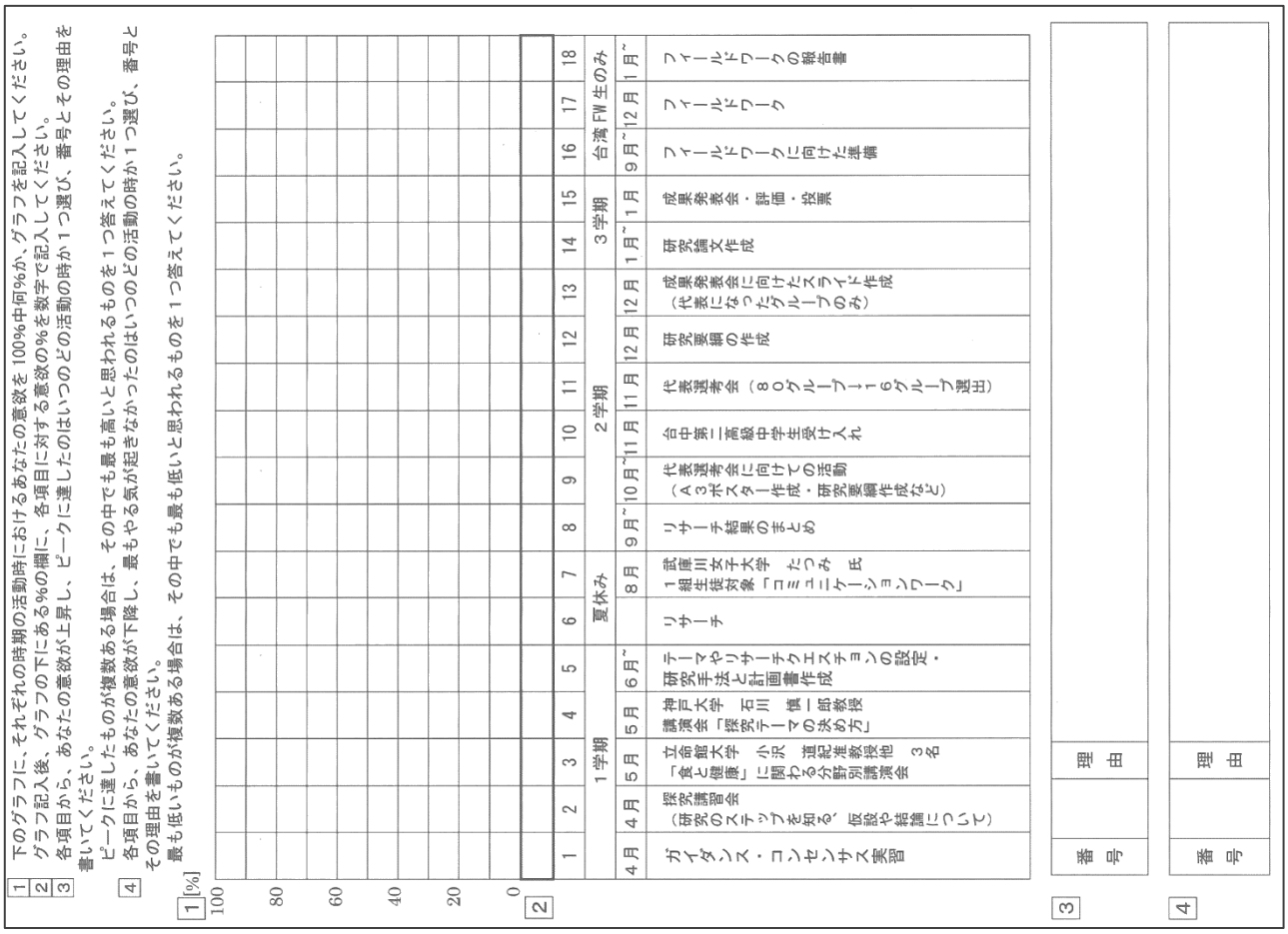


図１　平成 30 年度　SGH(総合的な学習の時間)の活動に対する意欲調査

なお、各項目の対象者については次の通り。

No	時期	月	内容（講演者／講演題目）	対象
1	1学期	4 月	ガイダンス・コンセンサス実習	全員
2		4 月	探究講習会（研究のステップを知る、仮説や結論について）	全員
3		5 月	立命館大学　小沢　道紀准教授　他 3 名 「食と健康」に関わる分野別講演会	全員
4		5 月	神戸大学　石川　慎一郎教授 講演会「探究テーマの決め方」	全員
5		6 月～	テーマやリサーチクエスチョンの設定・研究手法と計画書作成	全員
6	夏休み		リサーチ	全員
7		8 月	武庫川女子大学　たつみ　氏 1 組生徒対象「コミュニケーションワーク」	GLiS
8	2学期	9 月～	リサーチ結果のまとめ	全員
9		10 月～	代表選考会に向けての活動（A3 ポスター作成・研究要綱作成など）	全員
10		11 月	台中第二高級中学生受け入れ	受入生徒
11		11 月	代表選考会（80 グループ→16 グループ選出）	全員
12		12 月	研究要綱の作成	全員
13		12 月	成果発表会に向けたスライド作成（代表になったグループのみ）	代表生徒
14	３学期	1 月～	研究論文作成	全員
15		1 月	成果発表会・評価・投票	全員
16	台湾	9 月～	フィールドワークに向けた準備	SGH
17	FW	12 月	フィールドワーク	SGH
18	関係	1 月～	フィールドワークの報告書	SGH

（オ）集計結果

・質問1、2に関わる結果

生徒をタイプ別に分けて意欲の平均値をグラフにしたものが図 2 である。タイプ別とは、台湾フィールドワークに参加したものを『SGH』、1 組の生徒を『GLiS』、台湾の生徒を受け入れしたものを『受入』、台湾フィールドワークに参加していない者を『SGH 以外』として分けている。なお、項目 16～18 は台湾フィールドワークに参加した者のみの平均値をとっているため、SGH 以外の生徒のグラフは存在しない。比較をするため、図 3 に平成 28 年度と平成 29 年度の結果も掲載した。

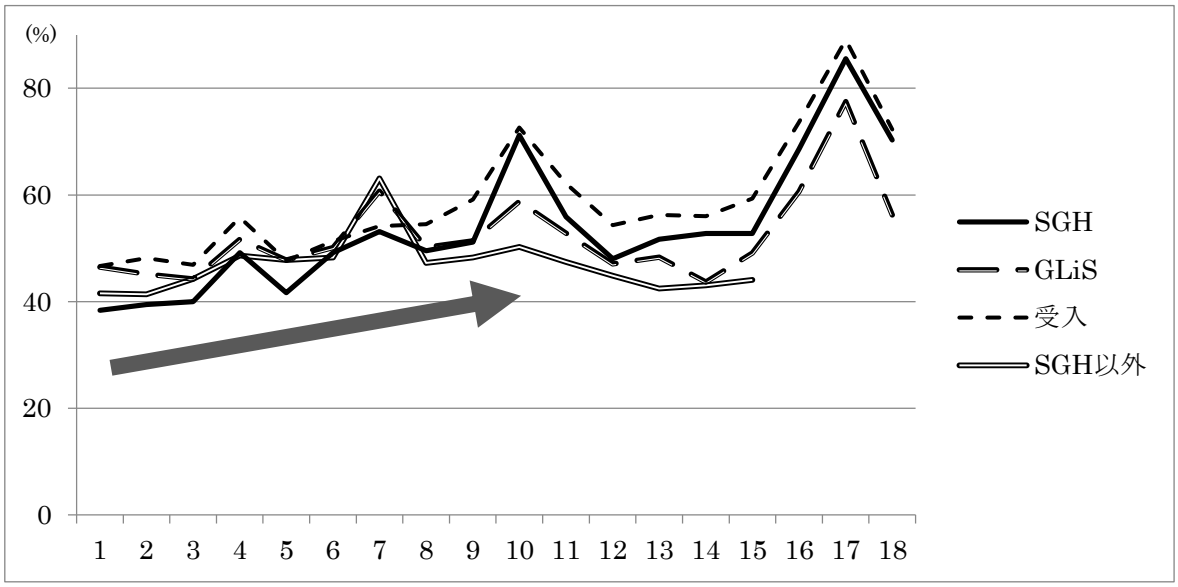


図 2　タイプ別に見る意欲の平均値の推移（平成 30 年度意識調査）

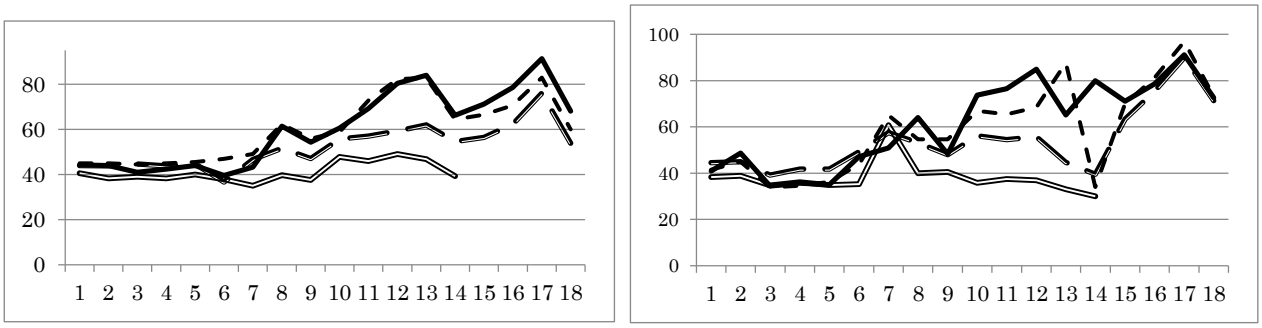


図 3　タイプ別に見る意欲の平均値の推移（左：平成 28 年度意識調査，右：平成 29 年度意識調査）

平成 30 年度は平成 29 年度の反省から、1 学期は講演会を 2 本のみとしテーマ設定に時間を取った。どのタイプでも、1 学期から 2 学期の「代表選考会に向けての活動」（項目 9）までの意欲の平均値が徐々に上がっており、平成 28 年度や平成 29 年度と比べると違いは明らかである。これより，プログラムの再編は成功であったと言える。研究要綱の作成、論文の作成といった言語化の活動になると意欲が低下することが今後の課題である。

・質問3，4に関わる結果

表 1 は最も意欲があった活動の数を各タイプ総数に対する割合で示した。上位に網掛けをしている。空欄は 0%である。

表 1　最も意欲があった活動　　（単位：%）

対象	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
SGH				11						11						11	67	
GLiS	3		3	12		3	29		3	9	6		3	6	6		18	
台湾受入	7		7	13						13						13	47	
SGH以外	9	3	5	13	7	11	5	4	8	12	9	1	2	7				

表 2 は最もやる気が起きなかった活動の数を各タイプ総数に対する割合で示した。上位に網掛けをしている。空欄は 0%である。

表 2　最もやる気が起きなかった活動　　（単位：%）

対象	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
SGH	17				6	11		11	11	6	6	11		11	6	8	3	3
GLiS	9	6	6	3	6	6	3		12	3	3	9	3	26	3	3	5	3
台湾受入	7				13	27		7	7	7	7	7		13		8	8	8
SGH以外	2	4	2	3	8	1	2	3	6	4	4	4	3	2				

SGH 生徒にとってはやはりフィールドワークが一番の意欲ある活動となっている。それに対し、SGH 以外の生徒は、探究入門の講演会（項目 4）やリサーチ（項目 6）、台湾生徒受け入れ（項目 10）といった活動で意欲が上昇している。

最もやる気が起きなかった活動として SGH 生徒はガイダンス・コンセンサス実習（項目 1）を挙げているが、理由としては『SGH に興味がなかった』『何をやるのかよくわかっていなかった』等がある。プログラムを進めていく中で、課題研究に興味を持ち、また台湾 FW に参加しようという意志が芽生えたことは大変喜ばしいことである。

項目 1 や 5（SGH についてのガイダンスやテーマ設定）をやる気の起きなかった活動として挙げている生徒の理由の多くが『何をすればよいかわからない』『決まらない』『難しそう』というやる前に抱えている不安が大きい。リサーチをやり始めて楽しいと感じた生徒もいれば、まとめる作業の中で面白さを感じる生徒も複数名いたことから、「やってみる」ということが 1 つの気持ちの転換になるといえる。

また、研究論文の作成（項目 14）はやる気の起きなかった活動としても多くの生徒が挙げているが、中には最もやる気が起きた活動に挙げている生徒もいる。理由としては、それまでのグループワークと違い『一人でやらなくてはいけない』という点や『自分でまとめる』という点でやりがいを感じたということがある。これらのことから、今後も研究自体はグループで取り組むが、最後のまとめは個人での作業という流れが最善であると考える。

（カ）成果と今後の取り組み

結果でも述べた通り、プログラムは生徒の意欲を引き出せるように組むことができたと考えられる。また、グループ研究から個人での論文作成という点も今後も継続していく。今後の課題としては、これまで外部に委託していた講演会を、別の予算あるいは本校職員で行っていけるように準備をしていくこと、評価については新課程に向けて精査の必要があることである。この 5 年間の SGH の取り組みによってプログラムが確立できたことは大きな成果である。今後はより生徒の課題研究が充実した活動となるように細かい部分で改善を重ねていきたい。

(3)　SGH アンケート結果

（ア）令和元年度本校在校生とその保護者

(a) 目的　これまでの SGH プログラムの成果を検証する

(b) 対象　令和元度本校在校生とその保護者、および教員

属性 2 の「生徒」は生徒全員、「SGH」はフィールドワークに一度でも参加したことのある生徒、「SGH 外」はフィールドワークに参加しなかった生徒、「保護者」は全学年全生徒の保護者の結果を示す。

(c) 時期　生徒……令和元年 12 月　　保護者……令和 2 年 1 月（3 年生保護者のみ令和元年 12 月）

(d) アンケート調査集計結果

【表 1】　アンケート集計結果（72 回生）

「好奇心」に関する項目

番号	質問項目 （生徒→自己評価・希望する度合） （保護者→子の評価・期待する度合）	属性１	属性２	大変そう思う	ややそう思う	あまり思わない	まったく思わない	１０点換算
9	高校入学以降、国際交流活動に積極的に関わるようになった。	3 年	SGH	25%	29%	27%	18%	5.4
		2 年	SGH	22%	29%	37%	12%	5.4
		1 年	SGH	18%	34%	42%	5%	5.5
		3 年	SGH 外	3%	14%	38%	45%	2.5
		2 年	SGH 外	2%	14%	46%	39%	2.6
		1 年	SGH 外	4%	14%	42%	40%	2.7
		3 年	生徒	7%	17%	36%	40%	3.0
		2 年	生徒	5%	16%	44%	34%	3.1
		1 年	生徒	6%	17%	41%	36%	3.1
		3 年	保護者	8%	22%	53%	18%	3.9
		2 年	保護者	4%	18%	55%	23%	3.4
		1 年	保護者	4%	18%	58%	20%	3.5
10	高校入学以降、チャレンジ精神が身についた。	3 年	SGH	37%	41%	14%	8%	6.9
		2 年	SGH	29%	49%	17%	5%	6.7
		1 年	SGH	42%	45%	13%	0%	7.6
		3 年	SGH 外	7%	44%	33%	16%	4.7
		2 年	SGH 外	5%	38%	41%	16%	4.4
		1 年	SGH 外	7%	45%	33%	16%	4.7
		3 年	生徒	12%	44%	29%	15%	5.1
		2 年	生徒	9%	40%	37%	14%	4.8
		1 年	生徒	12%	44%	30%	14%	5.1
		3 年	保護者	15%	43%	35%	7%	5.6
		2 年	保護者	8%	37%	46%	9%	4.8
		1 年	保護者	8%	44%	40%	9%	5.0
22	高校入学以降、グローバルな社会課題への関心が深まった。	3 年	SGH	29%	49%	16%	6%	6.7
		2 年	SGH	19%	52%	21%	7%	6.1
		1 年	SGH	24%	58%	13%	5%	6.7
		3 年	SGH 外	8%	41%	39%	13%	4.8
		2 年	SGH 外	8%	37%	37%	18%	4.5
		1 年	SGH 外	8%	38%	37%	16%	4.6
		3 年	生徒	12%	42%	35%	11%	5.1
		2 年	生徒	9%	39%	34%	17%	4.7
		1 年	生徒	11%	41%	34%	15%	4.9
		3 年	保護者	7%	44%	41%	8%	5.0
		2 年	保護者	4%	34%	53%	8%	4.5
		1 年	保護者	4%	35%	54%	7%	4.6

「多様性」に関する項目

2	自主的に他者と関わって社会貢献活動に取り組む意欲が向上した。	3年	SGH	25%	57%	12%	6%	6.7
		2年	SGH	14%	55%	24%	7%	5.9
		1年	SGH	32%	49%	16%	3%	7.0
		3年	SGH外	3%	42%	41%	15%	4.4
		2年	SGH外	4%	34%	45%	17%	4.2
		1年	SGH外	10%	45%	36%	9%	5.2
		3年	生徒	7%	45%	36%	13%	4.8
		2年	生徒	6%	38%	42%	15%	4.5
		1年	生徒	13%	46%	33%	8%	5.5
		3年	保護者	40%	48%	11%	1%	7.6
		2年	保護者	47%	46%	7%	0%	8.0
		1年	保護者	60%	37%	3%	0%	8.5
20	高校入学以降、異文化理解が深まった。	3年	SGH	37%	53%	6%	4%	7.5
		2年	SGH	43%	33%	14%	10%	7.0
		1年	SGH	39%	53%	8%	0%	7.7
		3年	SGH外	6%	51%	30%	12%	5.0
		2年	SGH外	7%	47%	32%	14%	4.9
		1年	SGH外	9%	55%	25%	11%	5.4
		3年	生徒	12%	52%	26%	10%	5.5
		2年	生徒	13%	45%	29%	14%	5.2
		1年	生徒	13%	55%	23%	9%	5.7
		3年	保護者	8%	51%	35%	6%	5.4
		2年	保護者	6%	41%	45%	8%	4.9
		1年	保護者	5%	45%	43%	6%	5.0
21	高校入学以降、グローバルなものの考え方ができるようになった。	3年	SGH	27%	49%	16%	8%	6.5
		2年	SGH	24%	40%	29%	7%	6.0
		1年	SGH	21%	63%	13%	3%	6.8
		3年	SGH外	6%	36%	44%	13%	4.5
		2年	SGH外	5%	37%	41%	17%	4.4
		1年	SGH外	5%	38%	45%	12%	4.5
		3年	生徒	10%	39%	39%	12%	4.9
		2年	生徒	8%	38%	39%	16%	4.6
		1年	生徒	7%	42%	41%	11%	4.8
		3年	保護者	9%	40%	46%	6%	5.1
		2年	保護者	5%	36%	51%	9%	4.6
		1年	保護者	4%	35%	54%	7%	4.6

「発信力」に関わる項目

1	積極的に他者と関わってコミュニケーションをとる意欲が向上した。	3年	SGH	45%	43%	8%	4%	7.6
		2年	SGH	45%	33%	19%	2%	7.4
		1年	SGH	45%	53%	3%	0%	8.1
		3年	SGH外	6%	48%	35%	10%	5.0
		2年	SGH外	7%	47%	31%	15%	4.9
		1年	SGH外	6%	48%	36%	9%	5.0
		3年	生徒	13%	47%	31%	9%	5.5
		2年	生徒	13%	45%	29%	13%	5.3
		1年	生徒	12%	48%	32%	8%	5.5
		3年	保護者	53%	42%	4%	0%	8.3
		2年	保護者	60%	37%	3%	0%	8.6
		1年	保護者	65%	32%	2%	0%	8.7
11	高校入学以降、プレゼンテーション力、表現力、発信力が身についた。	3年	SGH	41%	39%	14%	6%	7.2
		2年	SGH	43%	40%	10%	7%	7.3
		1年	SGH	61%	34%	5%	0%	8.5
		3年	SGH外	6%	45%	34%	15%	4.8
		2年	SGH外	7%	48%	33%	13%	4.9
		1年	SGH外	6%	43%	38%	13%	4.8
		3年	生徒	12%	44%	30%	13%	5.2
		2年	生徒	12%	46%	29%	12%	5.3
		1年	生徒	13%	42%	34%	11%	5.3
		3年	保護者	11%	46%	37%	6%	5.4
		2年	保護者	8%	36%	48%	9%	4.8
		1年	保護者	6%	37%	47%	9%	4.7

【表 2】アンケート集計結果（第 1 学年比較 71 回生・72 回生・73 回生・74 回生）

「好奇心」に関する項目

番号	質問項目 （生徒→自己評価・希望する度合） （保護者→子の評価・期待する度合）	属性1	属性2	大変そう思う	ややそう思う	あまり思わない	まったく思わない	10 点換算
9	高校入学以降、国際交流活動に積極的に関わるようになった。	71 回	SGH	10%	46%	36%	8%	5.3
		72 回	SGH	18%	34%	42%	5%	5.5
		73 回	SGH	88%	6%	6%	0%	9.4
		74 回	SGH	58%	16%	26%	0%	7.7
		71 回	SGH 外	5%	13%	43%	39%	2.8
		72 回	SGH 外	4%	14%	42%	40%	2.7
		73 回	SGH 外	5%	19%	48%	28%	3.4
		74 回	SGH 外	3%	12%	49%	35%	2.8
		71 回	生徒	6%	18%	42%	34%	3.2
		72 回	生徒	6%	17%	41%	36%	3.1
		73 回	生徒	10%	19%	45%	26%	3.8
		74 回	生徒	7%	12%	48%	33%	3.1
		71 回	保護者	5%	23%	53%	19%	3.8
		72 回	保護者	4%	18%	58%	20%	3.5
		73 回	保護者	5%	16%	55%	24%	3.4
		74 回	保護者	7%	17%	55%	21%	3.6
10	高校入学以降、チャレンジ精神が身についた。	71 回	SGH	32%	55%	11%	3%	7.3
		72 回	SGH	42%	45%	13%	0%	7.6
		73 回	SGH	82%	12%	6%	0%	9.2
		74 回	SGH	47%	42%	5%	5%	7.7
		71 回	SGH 外	9%	37%	40%	14%	4.7
		72 回	SGH 外	7%	45%	33%	16%	4.7
		73 回	SGH 外	17%	47%	29%	7%	5.8
		74 回	SGH 外	11%	45%	34%	9%	5.3
		71 回	生徒	13%	41%	34%	12%	5.2
		72 回	生徒	12%	44%	30%	14%	5.1
		73 回	生徒	21%	45%	28%	6%	6.0
		74 回	生徒	14%	45%	32%	9%	5.5
		71 回	保護者	10%	42%	42%	6%	5.2
		72 回	保護者	8%	44%	40%	9%	5.0
		73 回	保護者	9%	39%	42%	10%	4.9
		74 回	保護者	10%	46%	38%	6%	5.3
22	高校入学以降、グローバルな社会課題への関心が深まった。	71 回	SGH	23%	46%	26%	6%	6.3
		72 回	SGH	24%	58%	13%	5%	6.7
		73 回	SGH	59%	24%	18%	0%	8.0
		74 回	SGH	37%	47%	11%	5%	7.2
		71 回	SGH 外	9%	37%	38%	16%	4.6
		72 回	SGH 外	8%	38%	37%	16%	4.6
		73 回	SGH 外	11%	43%	37%	9%	5.2
		74 回	SGH 外	11%	41%	36%	13%	5.0
		71 回	生徒	11%	38%	36%	14%	4.8
		72 回	生徒	11%	41%	34%	15%	4.9
		73 回	生徒	14%	42%	35%	9%	5.4
		74 回	生徒	12%	41%	34%	12%	5.1
		71 回	保護者	4%	37%	51%	9%	4.6
		72 回	保護者	4%	35%	54%	7%	4.6
		73 回	保護者	6%	28%	55%	11%	4.3
		74 回	保護者	7%	33%	48%	11%	4.6

「多様性」に関する項目

2	自主的に他者と関わって社会貢献活動に取り組む意欲が向上した。	71 回	SGH	18%	60%	23%	0%	6.6
		72 回	SGH	32%	49%	16%	3%	7.0
		73 回	SGH	41%	47%	12%	0%	7.6
		74 回	SGH	26%	42%	32%	0%	6.5
		71 回	SGH 外	11%	47%	36%	7%	5.5
		72 回	SGH 外	10%	45%	36%	9%	5.2
		73 回	SGH 外	10%	48%	37%	4%	5.5
		74 回	SGH 外	7%	50%	37%	6%	5.2
		71 回	生徒	12%	49%	33%	5%	5.5
		72 回	生徒	13%	46%	33%	8%	5.5
		73 回	生徒	12%	49%	36%	4%	5.6
		74 回	生徒	8%	49%	37%	5%	5.3
		71 回	保護者	57%	39%	4%	1%	8.5
		72 回	保護者	60%	37%	3%	0%	8.5
		73 回	保護者	51%	47%	1%	0%	8.3
		74 回	保護者	55%	42%	2%	1%	8.4
20	高校入学以降、異文化理解が深まった。	71 回	SGH	37%	50%	13%	0%	7.5
		72 回	SGH	39%	53%	8%	0%	7.7
		73 回	SGH	59%	35%	6%	0%	8.4
		74 回	SGH	74%	21%	0%	5%	8.8
		71 回	SGH 外	11%	52%	25%	12%	5.4
		72 回	SGH 外	9%	55%	25%	11%	5.4
		73 回	SGH 外	13%	52%	27%	7%	5.7
		74 回	SGH 外	13%	49%	28%	9%	5.5
		71 回	生徒	14%	52%	24%	10%	5.7
		72 回	生徒	13%	55%	23%	9%	5.7
		73 回	生徒	16%	51%	26%	7%	5.8
		74 回	生徒	17%	47%	26%	9%	5.8
		71 回	保護者	7%	45%	41%	7%	5.1
		72 回	保護者	5%	45%	43%	6%	5.0
		73 回	保護者	7%	37%	48%	8%	4.8
		74 回	保護者	9%	33%	49%	10%	4.7
21	高校入学以降、グローバルなものの考え方ができるようになった。	71 回	SGH	34%	29%	32%	5%	6.4
		72 回	SGH	21%	63%	13%	3%	6.8
		73 回	SGH	47%	41%	6%	6%	7.6
		74 回	SGH	42%	47%	11%	0%	7.7
		71 回	SGH 外	7%	31%	46%	17%	4.3
		72 回	SGH 外	5%	38%	45%	12%	4.5
		73 回	SGH 外	11%	43%	37%	8%	5.2
		74 回	SGH 外	9%	41%	40%	10%	4.9
		71 回	生徒	10%	32%	43%	15%	4.6
		72 回	生徒	7%	42%	41%	11%	4.8
		73 回	生徒	13%	43%	35%	8%	5.4
		74 回	生徒	11%	42%	38%	10%	5.1
		71 回	保護者	4%	38%	49%	9%	4.6
		72 回	保護者	4%	35%	54%	7%	4.6
		73 回	保護者	5%	33%	53%	9%	4.5
		74 回	保護者	6%	30%	53%	11%	4.4

「発信力」に関する項目

1	積極的に他者と関わってコミュニケーションをとる意欲が向上した。	71 回	SGH	18%	70%	13%	0%	6.9
		72 回	SGH	45%	53%	3%	0%	8.1
		73 回	SGH	65%	29%	6%	0%	8.6
		74 回	SGH	63%	32%	5%	0%	8.6
		71 回	SGH 外	6%	47%	35%	11%	4.9
		72 回	SGH 外	6%	48%	36%	9%	5.0
		73 回	SGH 外	15%	59%	22%	4%	6.2
		74 回	SGH 外	16%	57%	23%	4%	6.2
		71 回	生徒	9%	50%	31%	9%	5.2
		72 回	生徒	12%	48%	32%	8%	5.5
		73 回	生徒	19%	57%	21%	4%	6.4
		74 回	生徒	19%	56%	22%	4%	6.3
		71 回	保護者	63%	35%	1%	1%	8.7
		72 回	保護者	65%	32%	2%	0%	8.7
		73 回	保護者	63%	35%	1%	0%	8.7
		74 回	保護者	64%	35%	0%	0%	8.8
11	高校入学以降、プレゼンテーション力、表現力、発信力が身についた。	71 回	SGH	48%	40%	13%	0%	7.9
		72 回	SGH	61%	34%	5%	0%	8.5
		73 回	SGH	65%	24%	12%	0%	8.4
		74 回	SGH	37%	58%	5%	0%	7.7
		71 回	SGH 外	10%	49%	29%	13%	5.3
		72 回	SGH 外	6%	43%	38%	13%	4.8
		73 回	SGH 外	10%	51%	30%	8%	5.5
		74 回	SGH 外	9%	48%	35%	8%	5.3
		71 回	生徒	15%	47%	27%	11%	5.5
		72 回	生徒	13%	42%	34%	11%	5.3
		73 回	生徒	14%	49%	29%	7%	5.7
		74 回	生徒	11%	48%	33%	8%	5.4
		71 回	保護者	8%	43%	43%	6%	5.1
		72 回	保護者	6%	37%	47%	9%	4.7
		73 回	保護者	6%	34%	51%	9%	4.6
		74 回	保護者	10%	32%	49%	8%	4.8

【表 3】アンケート集計結果（自発的な学習行動について）

「自発的な学習行動」について	属性 1	属性 2	④自分が納得する答えが見つかるまで、様々な方法を使ってとことん調べる。	③普段使っているツールや方法で分からない場合は人に聞く、著書を調べるなど、ある程度深く調べる。	②ネットやスマホ検索などで調べ、分からない場合はそれ以上調べることはしない。	①見たことや聞いた範囲で理解しようとする。それ以上は特に何もしない。	10 点換算
新しい何かに興味を持ったとき、あなたはどのように行動しますか。	3 年	生徒	12%	27%	54%	6%	4.8
	3 年	SGH	10%	35%	48%	6%	4.9
	3 年	SGH 外	13%	26%	55%	7%	4.9
	2 年	生徒	19%	23%	53%	5%	5.2
	2 年	SGH	24%	24%	48%	5%	5.6
	2 年	SGH 外	19%	23%	53%	5%	5.2
	1 年	生徒	18%	26%	49%	6%	5.1
	1 年	SGH	12%	35%	41%	12%	4.9
	1 年	SGH 外	19%	25%	50%	6%	5.2

(e) アンケート調査結果分析

調査の数値について、生徒は自己評価および自分の希望する度合いを示し、保護者は子の評価および期待する度合いを示している。【表 1】【表 2】はアンケート結果の中から、特に「好奇心」「多様性」「発信力」に関わる項目についてまとめたものである。【表 3】は「興味を持ったことに対する自発的な行動」についてまとめた結果である。

【表 1】では、72 回生 3 年次の結果に 2 年次、1 年次の調査結果を加え、3 年間の成果を比較した。生徒全体の自己評価においては、特に項目 20 の異文化理解、項目 1 のコミュニケーションをとる意欲、項目 11 のプレゼンテーション力で高い自己評価が得られている。これは、71 回生と同様の傾向である。SGH 生徒については、項目 10 チャレンジ精神、項目 22 のグローバルな社会課題への関心、項目 2 の社会貢献活動、項目 21 のグローバルなものの考え方、項目 1 のコミュニケーションをとる意欲、項目 11 のプレゼンテーション力の 8 項目中 6 項目で 6.0 点を超える特に高い自己評価が得られた。この結果から、SGH のフィールドワークに参加した生徒（SGH 生）については、活動の中で幅広く着実に力をつけていると自覚していることがわかる。一方で、フィールドワークに参加しなかった生徒(SGH 外)については、SGH 生と比較すると前向きな回答が得られにくい状況ではあるが、生徒全体と同様に項目 1 のコミュニケーションをとる意欲、項目 20 の異文化理解である程度の評価が得られている。これは、3 年間の「総合的な学習の時間」において、他者と協働する機会を多く設けたことが要因であると考えられる。

次に【表 2】では、71 回生、72 回生、73 回生の 1 年次の調査結果に、74 回生の 1 年次の結果を加え、4 学年間を比較した。（なお、70 回生の 1 年次は、実施したアンケートの項目が異なるため、比較対象からは除外している。）

SGH 生、SGH 外に関わらず、ほぼすべての項目で 73 回生が最も高い自己評価が得られている。74 回生は、73 と比較すると数値は低いが、項目 9 の国際交流以外の項目で 5 点以上の自己評価が得られている。73 回生と 74 回生について、活動の進め方に大きな違いはなかったが、73 回生は「SGH」を本校の志望理由にした生徒が全体の 10%であったのに対して、74 回生は 4.3%と、課題研究に期待するものが入学時点で異なっていた可能性がある。昨年度以降は、中間評価の結果を踏まえて、課題研究のテーマ設定を見直したことから、項目 10 のチャレンジ精神、項目 22 のグローバルな社会課題への関心、項目 21 のグローバルなものの考え方、項目 1 のコミュニケーションをとる意欲については大きく改善されている。来年度以降は、グループの探究テーマを自由に設定できるようにし、生徒たちが自らの興味・関心に合わせて、より意欲的に活動できるように改善していく予定である。

【表 3】は自発的な学習態度についての項目である。SGH 生の自己評価が SGH 外の生徒より少し高くなっている。1 年生については、SGH 生よりも、むしろ SGH 外の生徒の数値の方が高くなっている。3 学期 1 月に行われた校外成果発表会においても、1 年生から選抜された 3 グループのうち、台湾フィールドワークに参加した生徒を含むのは 1 グループのみであった。このことから、自発的な学習態度の養成には、必ずしも海外フィールドワークが必要というわけではないことが推察できる。換言すれば、海外フィールドワークに参加しない生徒(SGH 外)であっても、探究のプロセスを踏むことで、自分が納得する答えが見つかるまで調査をする態度が養われることが明らかになった。

生徒全体としてはある程度の結果が得られているが、一方で課題も見えてきた。SGH 終了後の取り組みの中では、生徒一人ひとりが主体的に興味・関心を持ち、自分が納得する答えが見つかるまで調べる姿勢を養えるような、時間的余裕も考慮したプログラムの改善を図ることが必要である。

（イ）令和元年度教員による SGH 自己評価

(a) 目的　　これまでの SGH プログラムの成果を検証する

(b) 時期　　令和 2 年 1 月

(c) アンケート調査集計結果

【表 1】担当する生徒の変化

「好奇心」に関する項目

番号	質問項目 （教員→ 生徒評価・期待する度合） （保護者→子の評価・期待する度合）	属性1	属性2	大変そう思う	ややそう思う	あまり思わない	まったく思わない	10 点換算
9	高校入学以降、国際交流活動に積極的に関わるようになった。	R1	教員	13%	59%	22%	6%	5.9
		H30	教員	15%	59%	24%	3%	6.2
		H29	教員	9%	56%	35%	0%	5.8
		H28	教員	8%	62%	28%	3%	5.8
10	高校入学以降、チャレンジ精神が身についた。	R1	教員	16%	47%	31%	6%	5.7
		H30	教員	0%	76%	18%	6%	5.7
		H29	教員	6%	71%	24%	0%	6.1
		H28	教員	13%	69%	15%	3%	6.4
22	高校入学以降、グローバルな社会課題への関心が深まった。	R1	教員	13%	61%	19%	6%	6.0
		H30	教員	15%	42%	42%	0%	5.8
		H29	教員	9%	52%	33%	6%	5.5
		H28	教員	8%	67%	23%	3%	6.0

「多様性」に関する項目

3	他者との共通点や違いを意識し、相互理解を図ろうとするようになった。	R1	教員	16%	59%	22%	3%	6.3
		H30	教員	6%	70%	18%	6%	5.9
		H29	教員	15%	62%	24%	0%	6.4
		H28	教員	5%	64%	21%	10%	5.5
20	高校入学以降、異文化理解が深まった。	R1	教員	19%	71%	6%	3%	6.9
		H30	教員	18%	55%	27%	0%	6.4
		H29	教員	6%	82%	12%	0%	6.5
		H28	教員	18%	59%	23%	0%	6.5
21	高校入学以降、グローバルなものの考え方ができるようになった。	R1	教員	13%	65%	16%	6%	6.1
		H30	教員	9%	52%	39%	0%	5.7
		H29	教員	6%	53%	41%	0%	5.5
		H28	教員	8%	56%	36%	0%	5.7

「発信力」に関わる項目

1	積極的に他者と関わってコミュニケーションをとる意欲が向上した。	R1	教員	16%	66%	16%	3%	6.5
		H30	教員	6%	71%	18%	6%	5.9
		H29	教員	9%	76%	15%	0%	6.5
		H28	教員	18%	59%	21%	3%	6.4
11	高校入学以降、プレゼンテーション力、表現力、発信力が身についた。	R1	教員	34%	50%	9%	6%	7.1
		H30	教員	21%	62%	9%	9%	6.5
		H29	教員	35%	62%	3%	0%	7.7
		H28	教員	23%	64%	10%	3%	6.9

【表 2】本校 SGH の活動で良かったと感じられた点

三方よしの精神	R1	教員	27%	全員参加型である	R1	教員	45%	総合的な学習・探究の時間の活性化	R1	教員	42%
	H30	教員	32%		H30	教員	50%		H30	教員	38%
	H29	教員	26%		H29	教員	35%		H29	教員	32%
	H28	教員	41%		H28	教員	31%		H28	教員	31%
課題の身近さ取り組みやすさ	R1	教員	9%	他の教科の学習への好影響	R1	教員	3%	教員の指導法	R1	教員	9%
	H30	教員	12%		H30	教員	0%		H30	教員	3%
	H29	教員	3%		H29	教員	0%		H29	教員	9%
	H28	教員	13%		H28	教員	8%		H28	教員	3%
研修旅行参加者の選抜方法	R1	教員	0%	選考に漏れても再挑戦の道がある	R1	教員	15%	専門家の支援が受けられた	R1	教員	30%
	H30	教員	6%		H30	教員	26%		H30	教員	41%
	H29	教員	6%		H29	教員	21%		H29	教員	29%
	H28	教員	5%		H28	教員	31%		H28	教員	33%
豊富で多彩な講師による講演会	R1	教員	15%	主体的な取り組みであること	R1	教員	27%	その他	R1	教員	0%
	H30	教員	24%		H30	教員	18%		H30	教員	3%
	H29	教員	35%		H29	教員	15%		H29	教員	3%
	H28	教員	33%		H28	教員	10%		H28	教員	3%

【表 3】本校 SGH 活動に感じられた問題点

受験に役立たない	R1	教員	0%	テーマ設定（食と健康）	R1	教員	39%	計画や見通し	R1	教員	15%
	H30	教員	3%		H30	教員	41%		H30	教員	24%
	H29	教員	0%		H29	教員	32%		H29	教員	26%
	H28	教員	5%		H28	教員	15%		H28	教員	36%
他の授業や考査との両立	R1	教員	30%	部活動との両立	R1	教員	39%	活動時間の不足	R1	教員	33%
	H30	教員	62%		H30	教員	44%		H30	教員	47%
	H29	教員	41%		H29	教員	41%		H29	教員	44%
	H28	教員	38%		H28	教員	41%		H28	教員	26%
パソコンなどの ICT 活用	R1	教員	33%	関連図書の整備	R1	教員	12%	研修旅行参加者の選抜方法	R1	教員	3%
	H30	教員	21%		H30	教員	12%		H30	教員	0%
	H29	教員	41%		H29	教員	9%		H29	教員	9%
	H28	教員	21%		H28	教員	10%		H28	教員	10%
教員の指導体制	R1	教員	30%	企業との連携	R1	教員	3%	大学や研究機関との連携	R1	教員	3%
	H30	教員	32%		H30	教員	0%		H30	教員	3%
	H29	教員	29%		H29	教員	0%		H29	教員	9%
	H28	教員	31%		H28	教員	5%		H28	教員	8%
力量に合っていない	R1	教員	15%	特になし	R1	教員	3%	その他	R1	教員	0%
	H30	教員	15%		H30	教員	0%		H30	教員	6%
	H29	教員	12%		H29	教員	0%		H29	教員	3%
	H28	教員	8%		H28	教員	3%		H28	教員	0%

【表 4】今年度自身に起こった変化

アクティブラーニングのスキル向上	R1	教員	24%	生徒の個別指導のスキル向上	R1	教員	17%	他の教師との協働性	R1	教員	24%
	H30	教員	9%		H30	教員	13%		H30	教員	22%
	H29	教員	6%		H29	教員	9%		H29	教員	29%
	H28	教員	21%		H28	教員	10%		H28	教員	18%
リーダーシップ	R1	教員	3%	語学力の向上	R1	教員	3%	グローバル課題に対する意識	R1	教員	17%
	H30	教員	3%		H30	教員	9%		H30	教員	19%
	H29	教員	0%		H29	教員	3%		H29	教員	15%
	H28	教員	0%		H28	教員	3%		H28	教員	28%
ビジネス課題に対する意識	R1	教員	17%	日本の将来に対する意識	R1	教員	21%	日本人としてのアイデンティティ	R1	教員	0%
	H30	教員	19%		H30	教員	31%		H30	教員	9%
	H29	教員	15%		H29	教員	12%		H29	教員	6%
	H28	教員	21%		H28	教員	13%		H28	教員	3%
専門家とのネットワーク構築	R1	教員	0%	フィールドワークの指導力向上	R1	教員	21%	ICT 活用能力の向上	R1	教員	17%
	H30	教員	3%		H30	教員	16%		H30	教員	6%
	H29	教員	3%		H29	教員	12%		H29	教員	9%
	H28	教員	3%		H28	教員	5%		H28	教員	3%
多忙感の増加	R1	教員	45%	充実感の増加	R1	教員	10%	その他	R1	教員	0%
	H30	教員	56%		H30	教員	13%		H30	教員	6%
	H29	教員	50%		H29	教員	12%		H29	教員	0%
	H28	教員	41%		H28	教員	5%		H28	教員	0%

(e) 自己評価　調査分析

調査は無記名、教職員対象で令和 2 年 1 月に実施した。【表 1】は担当する生徒の変容について、4:大変そう思う、3:ややそう思う、2:あまり思わない、1:全く思わない、の 4 段階で評価したものである。各調査結果は今年度を含め、過去 4 年間のデータを記した。（なお、SGH 1 年次の平成 27 年は、実施したアンケートの項目が異なるため、比較対象からは除外している。）

【表 1】について、全体としては、昨年度よりも高い評価となった。特に、項目 11 プレゼン力は高い評価となっている。課題研究を進める中で、多くのプレゼンの機会を設けることで生徒が着実に発信力を身につけていると感じている教員は多い。今年度は、項目 1 の他者とのコミュニケーションに関する項目で改善が見られた。「総合的な学習の時間」「総合的な探究の時間」の取り組みの中で、グループワークでの協働的活動に重点を置いた成果が現れたものと考える。

【表 2】について、全員参加型であること、総合的な学習・探究の時間の活性化、専門家の支援が受けられた、の 3 項目で高い評価が得られた。特に、総合的な学習・探究の時間の活性化については、4 年間連続で向上している。5 年間の SGH 指定期間で、特色ある探究学習の形を編み出せたことは、本校にとっての大きな財産である。

【表 3】については、計画や見通し、他の授業や考査との両立において大きく改善が見られた。一方で、ICT の活用に関して問題意識を持つ教員が多い。昨年度以降、グループワークで行う活動内容の幅は広くなったが、授業内にできる調査方法は限られているのが現状である。校内の ICT 機器の充実と、早い段階での生徒に対する ICT の活用法の指導が必要であると考える。

【表 4】の自身に起こった変化では、ICT 活用能力の向上、アクティブラーニングのスキル向上を感じた教員が多い。この結果から、5 年間年間の蓄積された指導力が活かされているといえるが、一方で、依然として多忙感の増加が大きいと感じている教員が多いことには今後も配慮が必要である。

(4)　GPS-Academic

（ア）目的　　SGH の活動によって、どのような力が身についたか測定する。

（イ）実施時期　令和元年 12 月

（ウ）実施内容

平成 28 年度より導入し、今年度は 4 回目の取り組みである。全学年を対象に実施した。GPS-Academic とは、株式会社ベネッセコーポレーションが展開する事業であり、汎用的能力として「批判的思考力」「協働的思考力」「創造的思考力」の 3 つの思考力を定義し、6 つの観点で到達度レベルを測定する。昨年度までは選択式・記述式どちらも共通して 5 段階（S、A、B、C、D）の評価であったが、今年度からは記述式においては 3 段階（A、B、C）に変更となっている。このような多少の変更はあったが、総合評価の 5 段階には大きな影響はないと考え、過年度のデータと同等に扱っている。6 つの観点およびテスト形式を表 1 に示す。

表 1　思考力と観点およびテスト形式

思考力	観点	テスト形式
批判的思考力	情報を抽出し吟味する	選択式
	論理的に組み立てて表現する	記述式
協働的思考力	他者との共通点・違いを理解する	選択式
	社会に参画し人と関わりあう	記述式
創造的思考力	情報を関連づける・類推する	選択式
	問題をみいだし解決策を生み出す	記述式

また、学校独自の質問として次の 3 つのことを質問した。

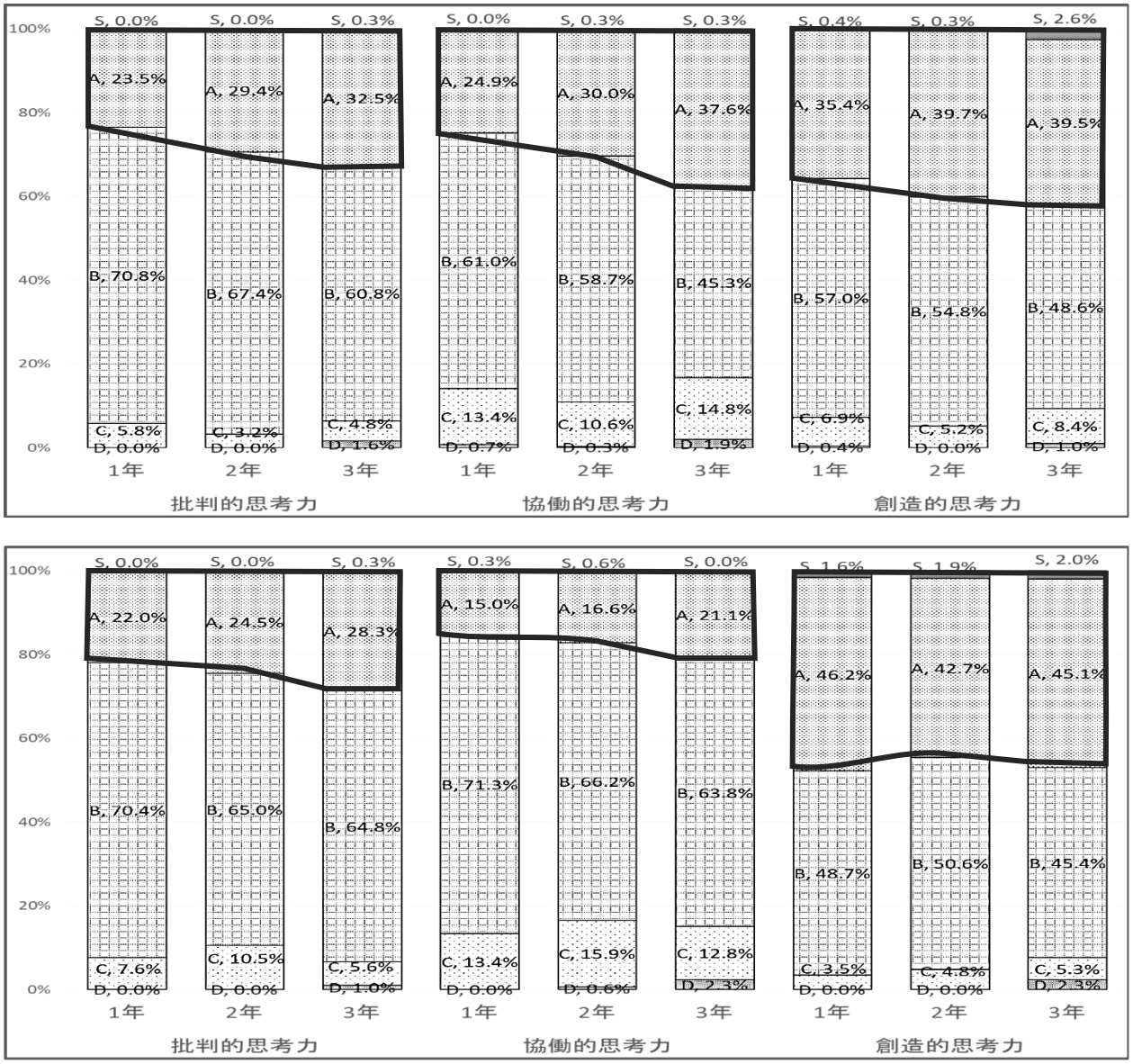
1　GPS-Academic を受験してみて、最も役に立ったと思える高校での授業・活動を一つ選んでください。
2　GPS-Academic を受験してみて、2 番目に役に立ったと思える高校での授業・活動を一つ選んでください。
3　GPS-Academic を受験してみて、3 番目に役に立ったと思える高校での授業・活動を一つ選んでください。

＜選択群＞

（AA）　国語　（AB）　数学　（AC）　英語　（AD）　理科
（AE）　地歴・公民　（AF）　保健体育　（AG）　家庭　（AH）　情報
（AI）　芸術　（AJ）　総合的な学習の時間
（B）　部活動
（C）　学校行事

（エ）思考力についての結果

図 1 は今年度と昨年度の 3 つの思考力の総合評価を学年別にグラフ化したものである。今年度は昨年度と比較すると協働的思考力の枠が大きい。また、3 年生はすべての思考力において 3 割から 4 割弱が到達度レベル A 以上に属しており、3 つの思考力のバランスが良い。創造的思考力は昨年度よりも微減となっている。到達度レベル C 以下の割合は昨年度とほぼ変化はない。昨年度との比較から、学年が進行するにつれて上位のレベルが増えていることもわかり、力がついていることが読み取れる。

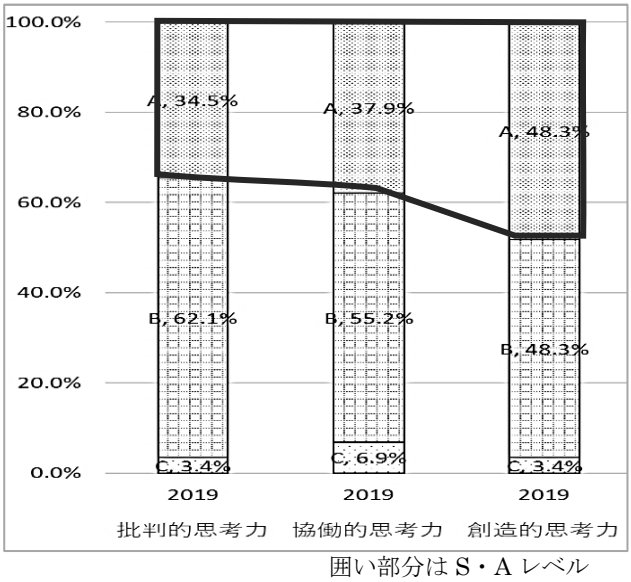


囲い部分はS・Aレベル

図１　3つの思考力の総合評価　学年別　（上：今年度，下：昨年度）

図2は、今年度SGH生徒29名について、3 つの思考力の総合評価をグラフにしたものである。図1と比べて、SGH生徒のS・Aレベルの割合が高いことがわかる。特に、創造的思考力については、SGH生徒の約半数が高校卒業時に目標としているAレベルに達している。

図3～図5は、GPS-Academic受検生の過年度比較をしたものである。学年総数に対するS・Aレベルの比率とC・Dレベルの比率をグラフ化した。項目によっては上下動があるが、この4年間で、どの学年においてもC・Dレベルが減少し、S・Aレベルを増加することができている。



囲い部分はS・Aレベル

図２　3つの思考力の総合評価（SGH生徒）

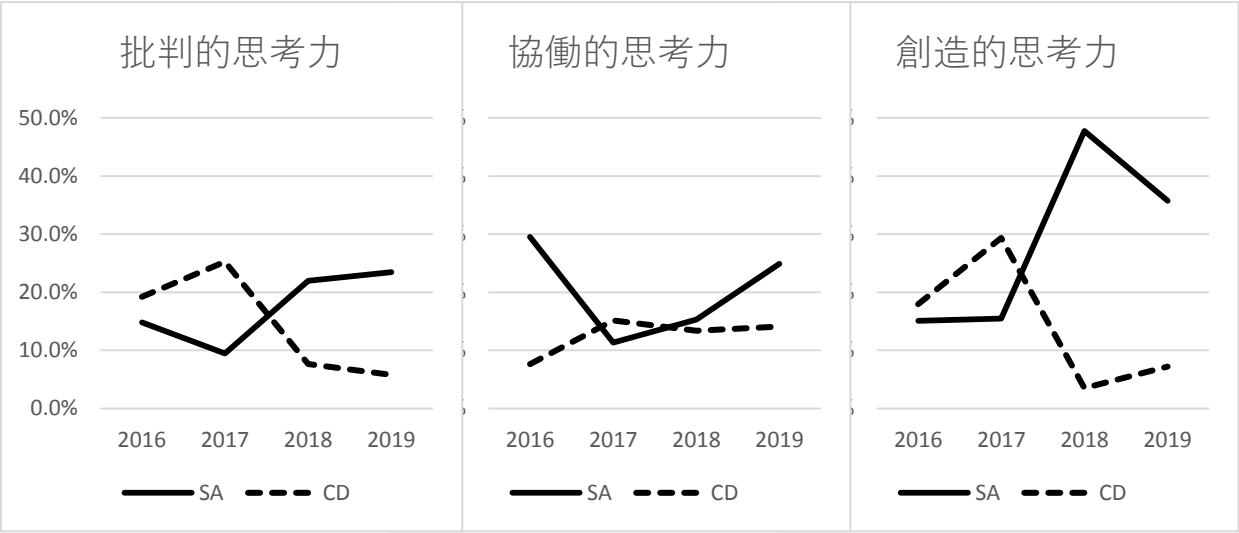


図 3　過年度比較(1 年生)

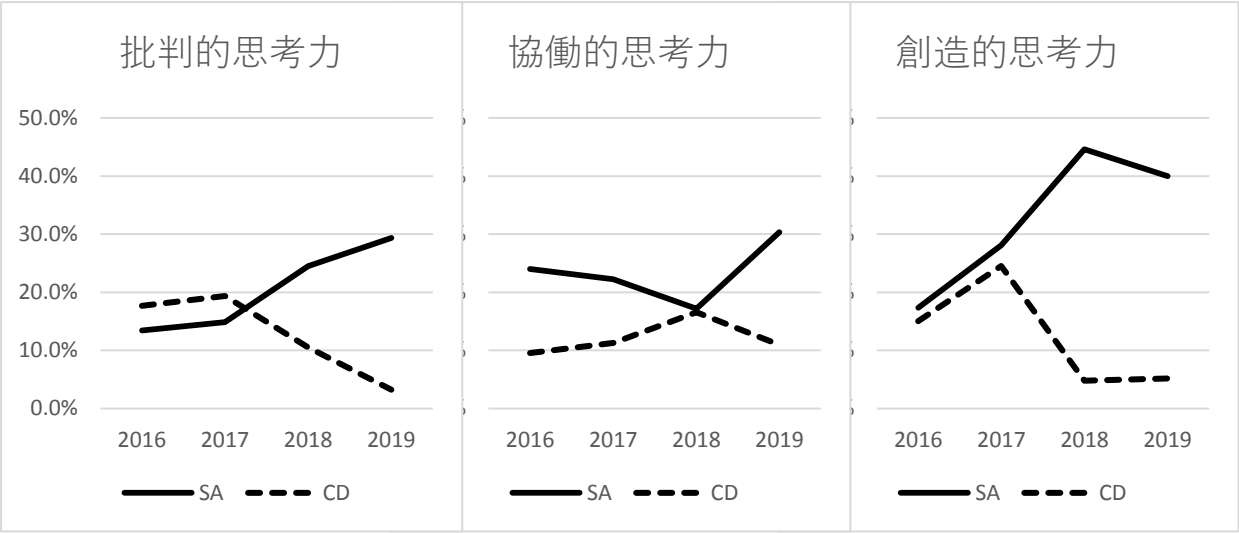


図 4　過年度比較(2 年生)

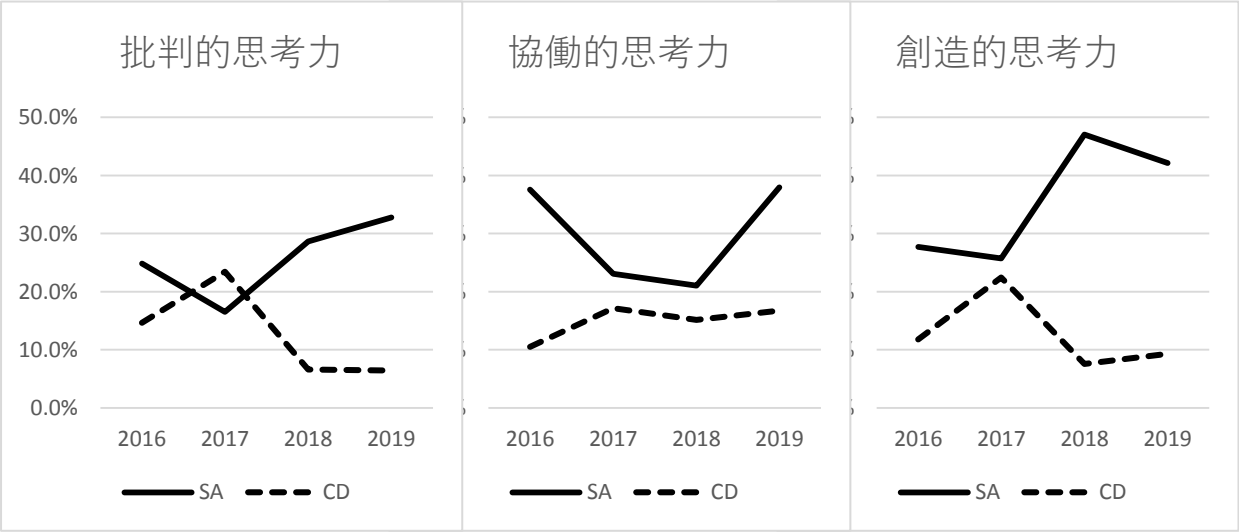


図 5　過年度比較(3 年生)

（オ）思考力についての考察

SGH 最終年度は、課題研究のプログラムもほぼ確立し、1 年生のグループ研究や 2 年生の SGH 個人研究、そして来年度以降を見越しての 2 年生の論述総合や実験科学講座内での課題研究も進められた。これらの活動の結果が思考力の数値として現れたように感じる。また、3 年生では様々な考え方を言語化していく論述表現の講座を通して、記述力の育成にも力を入れたことが思考力 UP につながったと考えられる。

SGH 生徒はテーマ設定から研究論文作成までの間、担当教員や ALT と研究のやり直しや修正といったやり取りを何度となく行っている。これらの活動が、3 つの思考力の伸長に大きく影響していると考える。

過年度比較のグラフより、学年が上になればなるほど、批判的思考力や協働的思考力の上位レベルが増加している。これらは課題研究のプログラムが生徒の思考力へ良い影響を与えてきたからと考える。1 年生については伸びも見られるが 2 学年や 3 学年ほどではない。課題研究をスタートした 1 年目では、まだまだ深い部分までの思考には至っていない。この点を踏まえ、2 年生の課題研究ではより深い探究をさせていきたい。

（カ）学校独自質問についての結果と考察

表 2 は質問 1 の回答について上位 5 つの授業・活動を並べたもの、表 3 は 3 つの質問の合計数で上位 5 つが学年全体のどれぐらいを占めているかを示した表である。

昨年度の調査と同様、総合的な学習（探究）の時間や国語がどの学年も上位に位置している。昨年度と変わった点は、数学が上位に入ってきたことだ。これは、調査分析を行う際に、数的処理の必要性を感じる機会が増えたことが考えられる。また、思考力を身につけていくためには、教科学習以外に学校行事や部活動が有効であることの認識は昨年度と変わらない。引き続き、本校の特色を活かしつつ、課題研究に取り組みたい。

表 2　最も役に立ったと思える授業・活動の順位

順位	1 年	順位	2 年	順位	3 年	順位	SGH 生徒
1	国語	1	国語	1	総合的な学習の時間	1	総合的な学習の時間
2	総合的な探究の時間	2	総合的な学習の時間	2	国語	2	国語
3	部活動	3	部活動	3	部活動	3	地歴・公民
4	学校行事	4	数学	4	学校行事	4	家庭
5	数学	5	英語	5	数学	4	学校行事

表 3　最も役に立った授業～3 番目に役に立った授業・活動の上位 5 つの全体に占める割合

順位	1 年		順位	2 年		順位	3 年		順位	SGH 生徒	
1	国語	75%	1	国語	72%	1	国語	72%	1	総合的な学習	93%
2	総合的な探究	62%	2	総合的な学習	60%	2	総合的な学習	71%	2	国語	76%
3	部活動	32%	3	部活動	33%	3	部活動	34%	3	学校行事	31%
4	数学	30%	4	数学	27%	4	学校行事	31%	4	部活動	24%
5	学校行事	29%	5	学校行事	26%	5	地歴・公民	21%	5	地歴・公民	21%

(5)　英語外部検定結果

英語外部検定の結果による「英語の型」による発信ができる 4 技能伸長プログラム開発の検証

（ア）検証方法と目的

8 年前の平成 23 年度入学生より 3 年計画で生徒の英語力向上と自律学習者を育てるため，次の 3 つの目的から年 2 回×3 年間全員受検を導入した。①高校 3 年間でどれだけ英語力が伸びたのかを検証する。②結果を受けて進路実現に活かす。③生徒主体の学習スタイルを確立し，生徒の英語学習意欲を育てる。いくつかの外部英語検定のスコアで追跡をしているため、ヨーロッパ共通言語参照枠(CEFR)で経年データも参考にしつつ、生徒の英語力の伸長を検証し今後のプログラム開発に活かす。

（イ）CBT からペーパーテストへの移行とデータ追跡

5 年前、SGH1 期生の平成 27 年度入学生より、それまでの 3 技能型ペーパーテストから 4 技能の CBT に移行した。しかし、実施当初からシステムの不備や校内の PC 環境の限界、業者の撤退が続き、非常に困難を極めた。その後、新規業者になってからも、試験自体が導入初期ということもあり、オフィシャル受検の手続きの煩雑さや会場のキャパシティーの限界、学校へのデータ提供の難しさ、学校実施の IP 版のシステム不備、その影響から受検結果スコアの再三の修正など多くの問題があった。平成 29 年度で学校実施の IP 版の提供終了が決定し、昨年度から移行期間として学年によっては CBT を併用しつつ、ペーパーテストとスピーキングのタブレット受検の 4 技能英語外部検定に変更した。変更当初は発注や機材準備など組織内外の連絡系統に混乱も生じたが、3 技能型ペーパーテストは 8 年前の平成 24 年の導入から 5 年間採用していたため、実施側のこれまでの経験等蓄積にも助けられ、新たにスピーキングのタブレット受検に慣れた 2 回目以降は大きな問題なく実施できている。しかし、英語外部検定の新入試を見据えた変換期でもあり、平成 29 年 7 月、平成 30 年 2 月と 2 回引き続き CEFR との相関表が大幅改訂となり、一概にデータの追跡をすることが難しくなっている。また、大学入学共通テストへの英語民間試験を利用する制度が延期となり、新入試の方向性が不透明な状況が続き対応に苦慮している。しかし、英語 4 技能のバランスよい育成の重要性は変わらないと考えるので、本校では引き続き英語外部検定で英語力の伸長を検証していく。制度延期に伴う新入試の方向性や各大学の動向が早期に提示されることが望まれる。

（ウ）英語外部検定の結果による過年度比較

ヨーロッパ共通言語参照枠で見る過去 8 年間の外部検定の結果を表 1 に示す。表 2 では SGH1～3 期生の 3 年時の B1 レベルの人数と割合を 3 年間の SGH 活動参加別で示す。表 3～6 では、2 期生と 3 期生の SGH フィールドワーク参加別、1・2 年の活動継続別の GTEC の 1 年初回から 3 年受験までの点数の伸長を示す。1 期生については、1 年初回の TOEFL Junior COMPREHENSIVE が 2 年途中で撤退し 2 年 2 回目受験からは GTEC CBT に移行したので、点数データの追跡はできていない。

表 1　ヨーロッパ共通言語参照枠で見る過去 8 年間の英語外部検定の結果

ヨーロッパ共通言語参照枠 ： CEFRによる外部英語検定の結果

（Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment）

	CEFR	英検	TOEFL IBT	TOEFL Junior COMPREHENSIVE -2016	GTEC CBT -2016	GTEC CBT 2017	GTEC for STUDENTS -2016	GTEC 2017	GTEC 2018-	CEFR Scale
		3・4技能	4技能	4技能	4技能	4技能	3技能	4技能	4技能	
熟練した言語使用者	C2									聞いたり読んだりした、ほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができる。
	C1	1級	110-		1400	1370-1400			1350-1400	いろいろな種類の高度な内容のかなり長い文章を理解して、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会生活を営むため、また学問上や職業上の目的で、言葉を柔軟かつ効果的に用いることができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細な文章を作ることができる。
自立した言語使用者	B2	準1級	87-	341-352	1250-1399	1160-1369	720-740	1190-1280	1190-1349	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。
	B1	2級	57-	322-340	1000-1249	880-1159	680-720	960-1189	960-1189	仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。
基礎段階の言語使用者	A2	準2級		300-321	700-999	510-879	460-680	690-959	690-959	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。
	A1	3-5級		-300	-699	-509	-460	-689	270-689	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。

【出典：ブリティッシュカウンシル・ケンブリッジ大学英語検定機構・ベネッセ・文部科学省】

GTEC for STUDENTS 3技能

68回生		1年(平成25年度)				2年(平成26年度)				3年(平成27年度)			
2015年度卒業生		4月	7月	12月	1月	7月	12月	1月	3月	6月	7月	10月	11月
熟練した言語使用者	C2												
	C1												
自立した言語使用者	B2												
	B1										1		
基礎段階の言語使用者	A2	16		50		91	127				150		
	A1	303		269		226	190				160		

※2年12月よりAdvanced受験開始

GTEC for STUDENTS 3技能

69回生		1年(平成26年度)				2年(平成27年度)				3年(平成28年度)			
2016年度卒業生		4月	7月	12月	1月	7月	12月	1月	3月	6月	7月	10月	11月
熟練した言語使用者	C2												
	C1						1			1			
自立した言語使用者	B2						0			0			
	B1					1	0			1			
基礎段階の言語使用者	A2	41		75		113	149			187			
	A1	279		243		204	167			119			

※2年7月よりAdvanced受験開始

TOEFL Junior COMPREHENSIVE 4技能 ・ GTEC CBT 4技能

SGH1期生		1年(平成27年度)				2年(平成28年度)				3年(平成29年度)			
2017年度卒業生		4月	7月	12月	1月	7月	12月	1月	3月	6月	7月	10月	11月
熟練した言語使用者	C2												
	C1												
自立した言語使用者	B2												
	B1		1	1		7		3→18			41		1
基礎段階の言語使用者	A2		52	91		122		171→271			199		0
	A1		262	217		164		125→10			15		4

※2年1月よりGTEC CBTに変更　※3年11月は3年7月未受験者のみ受験
※平成29年度の改訂相関表で読み替え　※2017年7月よりCEFRとの相関表が改訂

GTEC CBT 4技能

SGH2期生		1年(平成28年度)				2年(平成29年度)				3年(平成30年度)			
現3年生(71回生)		4月	7月	12月	1月	7月	12月	1月	3月	6月	7月	10月	11月
熟練した言語使用者	C2												
	C1												
自立した言語使用者	B2												
	B1				0→1	4			6		15		
基礎段階の言語使用者	A2		26→217		123→295	275			142		151		
	A1		294→103		190→17	28			88		27		

※平成29年度の改訂相関表で読み替え　※2017年7月よりCEFRとの相関表が改訂　※2018年2月よりCEFRとの相関表が改訂

GTEC CBT 4技能 ・ GTEC Advanced 4技能

SGH3期生		1年(平成29年度)				2年(平成30年度)				3年(令和元年度)			
現3年生(72回生)		4月	7月	12月	1月	7月	12月	1月	3月	6月	7月	10月	11月
熟練した言語使用者	C2												
	C1												
自立した言語使用者	B2												
	B1		4	3		2	7				19		
基礎段階の言語使用者	A2		280	276		224	264				271		
	A1		34	36		86	43				15		

※2017年7月よりCEFRとの相関表が改訂　※2018年度よりGTEC Advancedに変更
※2018年2月よりCEFRとの相関表が改訂

GTEC Advanced 4技能

SGH4期生		1年(平成30年度)				2年(令和元年度)				3年(令和2年度)			
現2年生(73回生)		4月	7月	12月	1月	7月	12月	1月	3月	6月	7月	10月	11月
熟練した言語使用者	C2												
	C1												
自立した言語使用者	B2												
	B1			2		2	13						
基礎段階の言語使用者	A2		154	265		255	270						
	A1		165	48		52	27						

GTEC Advanced 4技能

SGH5期生 現1年生(74回生)		1年(令和元年度)				2年(令和2年度)				3年(令和3年度)			
		4月	7月	12月	1月	7月	12月	1月	3月	6月	7月	10月	11月
熟練した言語使用者	C2												
	C1												
自立した言語使用者	B2												
	B1			2									
基礎段階の言語使用者	A2		211	247									
	A1		67	24									

表２　１期生・２期生・３期生　参加活動別３年時 B1 レベル人数と割合

		１期生（70 回生）				２期生（71 回生）				３期生（72 回生）			
		全体	３年時			全体	３年時			全体	３年時		
			受検者	B1	%		受検者	B1	%		受検者	B1	%
３年時	全体	303	260	42	16.2	306	193	15	7.8	312	305	19	6.2
	SGH 継続 1・2 期生：イタリア FW	11	11	8	**72.7**	3	3	1	**33.3**	19	19	5	**27.8**
	SGH 外	292	249	34	13.7	303	191	14	7.3	293	287	14	4.9
２年時	SGH 継続	22	19	12	**63.2**	33	25	7	**28.0**	20	19	5	**26.3**
	NY・FW	12	12	9	**75.0**	10	10	3	**30.0**	7	7	2	**28.6**
	イタリア FW	－	－	－	－	－	－	－	－	10	10	3	**30.0**
	国内 FW	10	7	3	42.9	23	15	4	26.7	3	2	0	0
	SGH 外	281	241	30	12.4	273	168	8	4.8	292	286	14	4.9
１年時	台湾 FW	20	15	12	**80.0**	16	12	6	**50.0**	19	18	1	5.6
	東京 FW	20	19	6	31.6	－	－	－	－	－	－	－	－
	秋田 FW	－	－	－	－	12	9	2	22.2	20	20	2	10.0
	神戸 FW	－	－	－	－	12	11	1	9.1	－	－	－	－
	FW 外	265	226	24	10.6	267	161	6	3.7	273	267	16	6.0

＊割合は３年時の受検者数で数字を出している。

表３　SGH2 期生(71 回生)フィールドワーク参加別外部英語検定３年間の伸長点数平均比較

	FW	人数＊1	Reading	Listening	Writing	Speaking	Total	学年平均との差＊2				
	学年	192/306	31.0	27.1	109.0	59.0	226.0	Reading	Listening	Writing	Speaking	Total
１年	台湾	12/16	54.3	67.4	142.6	90.5	354.8	23.3	40.3	33.6	31.5	128.8
	秋田	9/12	43.3	19.9	105.6	48.2	217.0	12.3	-7.2	-3.4	-10.8	-9.0
	神戸	11/12	20.4	23.5	89.1	54.3	187.2	-10.6	-3.6	-19.9	-4.7	-38.8
	その他	160/266	29.3	24.7	108.0	57.5	219.5	-1.7	-2.4	-1.0	-1.5	-6.5
２年	SGH	25/33	46.2	49.2	132.9	73.7	302.0	15.2	22.1	23.9	14.7	76.0
	国内	15/23	46.5	51.4	131.7	68.5	298.1	15.5	24.3	22.7	9.5	72.1
	NY	10/10	45.7	46.0	134.7	81.5	307.9	14.7	18.9	25.7	22.5	81.9
	SGH 外	167/273	28.8	23.7	105.4	56.7	214.6	-2.2	-3.4	-3.6	-2.3	-11.4
３年	イタリア	3/3	50.0	17.7	117.7	74.3	259.7	19.0	-9.4	8.7	15.3	33.7

＊1　人数は、在籍人数とその内、外部英語検定を１年生の第１回と３年生の両方を受験しデータがある者の人数を示す。

＊2　学年平均との差は、学年平均を上回っている箇所に網掛している。

表 4　SGH2 期生(71 回生)
1・2 年次フィールドワーク参加継続別外部英語検定 3 年間の伸長点数平均比較

		人数＊1	Reading	Listening	Writing	Speaking	Total					
学年		192/306	31.0	27.1	109.0	59.0	226.0					
2 年 SGH		25/33	46.2	49.2	132.9	73.7	302.0					
1 年 FW	2 年 FW	人数＊1	Reading	Listening	Writing	Speaking	Total	それぞれの全体平均との差＊2				
台湾	全体	12/16	54.3	67.4	142.6	90.5	354.8	Reading	Listening	Writing	Speaking	Total
	SGH	12/16	54.3	67.4	142.6	90.5	354.8	-	-	-	-	-
	NY	7/7	50.3	54.3	114.9	84.1	333.6	-4.0	-13.1	-27.7	-6.4	-21.2
	国内	5/9	59.8	85.8	139.4	99.4	384.4	5.5	18.4	-3.2	8.9	29.6
秋田	全体	9/12	43.3	19.9	105.6	48.2	217.0	Reading	Listening	Writing	Speaking	Total
	SGH	7/8	39.6	41.9	120.0	64.3	265.7	-3.7	22.0	14.4	16.1	48.7
	NY	2/2	27.5	6.0	151.5	78.5	263.5	-15.8	-13.9	45.9	30.3	46.5
	国内	5/6	52.2	41.8	108.2	56.4	258.6	8.9	21.9	2.6	8.2	41.6
	SGH 外	2/4	37.0	-21.0	53.0	-2.5	66.5	-6.3	-40.9	-52.6	-50.7	-150.5
神戸	全体	11/12	20.4	23.5	89.1	54.3	187.2	Reading	Listening	Writing	Speaking	Total
	SGH	3/4	52.2	41.8	108.2	56.4	258.6	31.8	18.3	19.1	2.1	71.4
	国内	3/4	52.2	41.8	108.2	56.4	258.6	31.8	18.3	19.1	2.1	71.4
	SGH 外	8/8	21.9	24.8	78.4	56.0	181.0	1.5	1.3	-10.7	1.7	-6.2
その他	全体	160/266	29.3	24.7	108.0	57.5	219.5	Reading	Listening	Writing	Speaking	Total
	SGH チャレンジ	3/5	46.0	47.0	138.3	56.0	287.3	16.7	22.3	30.3	-1.5	67.8
	NY	1/1	50.0	68.0	30.0	69.0	217.0	20.7	43.3	-78.0	11.5	-2.5
	国内	2/4	44.0	36.5	192.5	49.5	322.5	14.7	11.8	84.5	-8.0	103.0

＊1　人数は、在籍人数とその内、外部英語検定を 1 年生の第 1 回と 3 年生の両方を受験しデータがある者の人数を示す。

＊2　それぞれの全体平均との差は、全体平均を上回っている箇所に網掛している。

表 5　SGH3 期生(72 回生)フィールドワーク参加別外部英語検定 3 年間の伸長点数平均比較

	FW	人数＊1	Reading	Listening	Writing	Speaking	Total	学年平均との差＊2				
	学年	303/311	-16.9	9.5	105.3	100.1	196.8	Reading	Listening	Writing	Speaking	Total
1 年	台湾	18/19	-8.2	18.5	111.2	104.9	226.4	8.7	9.0	5.9	4.8	4.8
	秋田	20/20	-8.2	19.5	110.3	108.9	230.5	8.7	10.0	4.9	8.8	33.6
	その他	267/272	-19.9	6.7	103.0	97.1	185.3	-3.0	-2.8	-2.4	-3.1	-11.5
2・3 年	SGH	18/19	-12.3	25.5	111.7	96.2	221.1	4.6	16.0	6.3	-3.9	24.3
	国内	2/2	-29.5	5.5	136.0	118.5	230.5	-12.6	-4.0	30.7	18.4	33.7
	NY	7/7	-19.7	42.6	90.1	96.6	209.6	-2.8	33.0	-15.2	-3.6	12.7
	イタリア	9/10	-2.7	16.7	123.0	91.0	228.0	14.2	7.1	17.7	-9.1	31.2
	SGH 外	285/292	-17.7	8.4	104.7	100.0	194.1	-0.8	-1.2	-0.6	-0.1	-2.8

＊1　人数は、在籍人数とその内、外部英語検定を 1 年生の第 1 回と 3 年生の両方を受験しデータがある者の人数を示す。

＊2　学年平均との差は、学年平均を上回っている箇所に網掛している。

表 6　SGH3 期生(72 回生)
1・2 年次フィールドワーク参加継続別外部英語検定 3 年間の伸長点数平均比較

		人数＊1	Reading	Listening	Writing	Speaking	Total					
学年		303/311	-16.9	9.5	105.3	100.1	196.8					
2・3 年 SGH		18/19	-12.3	25.5	111.7	96.2	221.1					
1 年 FW	2 年 FW	人数＊1	Reading	Listening	Writing	Speaking	Total	それぞれの全体平均との差＊2				
台湾	全体	18/19	-8.2	18.5	111.2	104.9	226.4	Reading	Listening	Writing	Speaking	Total
	SGH	5/6	-7.2	24.2	127.4	98.8	243.2	1.0	5.7	16.2	-6.1	16.8
	イタリア	4/4	-6.0	22.3	125.5	92.0	233.8	2.2	3.8	14.3	-12.9	7.4
	国内	1/1	-12.0	32.0	135.0	126.0	281.0	-3.8	13.5	23.8	21.1	54.6
	SGH 外	13/13	-8.5	16.3	105.0	107.2	220.0	-0.3	-2.2	-6.2	2.3	-6.4
秋田	全体	20/20	-8.2	19.5	110.3	108.9	230.5	Reading	Listening	Writing	Speaking	Total
	SGH	5/5	1.2	33.8	117.4	114.4	266.8	9.4	14.3	7.1	5.5	36.3
	NY	3/3	-8.0	42.3	114.7	121.3	270.3	0.2	22.8	4.4	12.4	39.8
	イタリア	2/2	15.0	21.0	121.5	104.0	261.5	23.2	1.5	11.2	-4.9	31.0
	SGH 外	15/15	-11.3	14.7	107.9	107.1	218.3	-3.1	-4.8	-2.4	-1.8	-12.2
その他	全体	267/272	-19.9	6.7	103.0	97.1	185.3	Reading	Listening	Writing	Speaking	Total
	SGH チャレンジ	8/9	-23.9	21.1	98.3	83.3	178.8	-4.0	14.4	-4.7	-13.8	-6.5
	NY	4/4	-28.5	42.8	71.8	78.0	164.0	-8.6	36.1	-31.2	-19.1	-21.3
	イタリア	3/4	-10.0	6.3	120.7	81.0	198.0	9.9	-0.4	17.7	-16.1	12.7
	国内	1/1	-47.0	-21.0	137.0	111.0	180.0	-27.1	-27.7	34.0	13.9	-5.3

＊1　人数は、在籍人数とその内、外部英語検定を 1 年生の第 1 回と 3 年生の両方を受験しデータがある者の人数を示す。
＊2　それぞれの全体平均との差は、全体平均を上回っている箇所に網掛している。

（エ）過年度比較の分析と考察

表 1 から、さまざまな受検上のトラブルや相関表の度重なる改訂による追跡の困難さはあったものの、入学時から 3 年までで順調に英語力が伸びていることがわかる。

以下、限られたデータ数ではあるが、SGH 活動参加別の結果を見ていく。表 2 より、3 年次に B1 レベルに達した生徒を比較すると、SGH 活動を継続していた生徒が約 3 割以上の割合を占めている。1 期生・2 期生では、1 年次に台湾フィールドワークに参加した生徒の 3 年次での B1 レベル到達度が 80%、50%とかなり高くなっている。一方で、3 期生については 5.6%と、全体の割合とあまり変わらない。この原因として考えられることは、3 期生は 1 年の台湾フィールドワークを経験したあと SGH 活動を辞めてしまった者が多かったことである。3 期生では、1 年時にフィールドワークに参加できなかったが、2 年時でチャレンジ枠として SGH に参加し、初めて海外フィールドワークに参加した生徒が半数近く、2 年次で SGH に参加した生徒の到達率としては 2 期生と変わらない。

表 3 から、2 期生の秋田・神戸フィールドワーク参加者の点数が伸びていないが、それ以外はフィールドワークに参加した生徒がほぼすべての技能において得点を伸ばしていることが分かる。秋田の不調については、このフィールドワークが初年度であり積極的な生徒が集まらなかったことが理由として考えられ、神戸については、フィールドワークの内容として英語での発表がなかったことが、英語力の伸長につながらなかったと考えられる。

表 4 より、2 期生は 2 年次に海外フィールドワーク参加の有無にかかわらず、SGH プログラムに参加した生徒が概ね平均以上点数を伸ばしている。これは、2 年次の SGH プログラムで英語のプレゼンテーションと質疑応答をし、英語論文にまとめる活動が影響していると考えられる。その中で、1 年次に台湾、2 年次にニューヨークフィールドワークに参加した生徒は、2 年次に国内フィールドワークに参加した生徒よりも伸びていない。1 年次秋田フィールドワーク参加者については、特に 2

年次にニューヨークに参加した者がトータルの得点が高いが、それ以外もすべての技能において伸長を遂げている。1 年次に神戸、2 年次に国内フィールドワークに参加した者はスピーキング以外のすべての技能において伸びが顕著である。このことから、1 年次と 2 年次で連続して海外フィールドワークに行くことよりも、SGH プログラム自体が英語力伸長に寄与したと考えられる。また、2 年からチャレンジ枠として参加した生徒はスピーキングの伸びが平均より少ないことから、1 年次での日本語での発表経験と英語でのコミュニケーションの経験は、その後のスピーキングの伸びに影響している可能性がある。

表 5、表 6 より、3 期生に関しても、技能別では多少ばらつきがあるものの、フィールドワーク経験者が総合的に英語力を伸ばしている。また、1 年から 2 年で SGH 活動を継続した生徒と継続しなかった生徒の伸長に大きな差がみられる。3 期生に関しては、1 年次でフィールドワークに参加できず、チャレンジ枠で 2 年から SGH 活動に参加した生徒の伸長が芳しくなかった。3 期生に関しては、2 年次の SGH プログラムだけでなく、1 年次での英語の発表経験と、2 年次で継続して SGH 活動に参加していることが、生徒の英語力の伸長に深くかかわっていることが考えられる。

（オ）SGH3 期生：現 3 年生の結果

現 3 年生は、1 年時は GTEC CBT を 2 回継続して受検したが、校内受検の IP 版の提供終了に伴い、昨年度 2 年時より GTEC Advanced のペーパーテストとスピーキングのタブレット受検に移行している。その結果を表とグラフで示す。表 7・8 の Pre-A1 レベルは平成 30 年 2 月の相関表改訂から新たにできたものである。ここで示すグラフは、技能ごとに 1 年時の 1 回目の人数を 100 としたときの、伸び率を表す。テストが変わったこと、さらには英語外部検定の転換期で GTEC の 4 つのテストが 1 つのスケールに統合され、CEFR との相関表が改訂になった。そのためか、2 年時 7 月の結果では各技能とも大幅人数下落という腑に落ちない結果となったが、その後は、順調に伸びてきている。

表 7　SGH3 期生の Speaking と Writing のレベル別人数

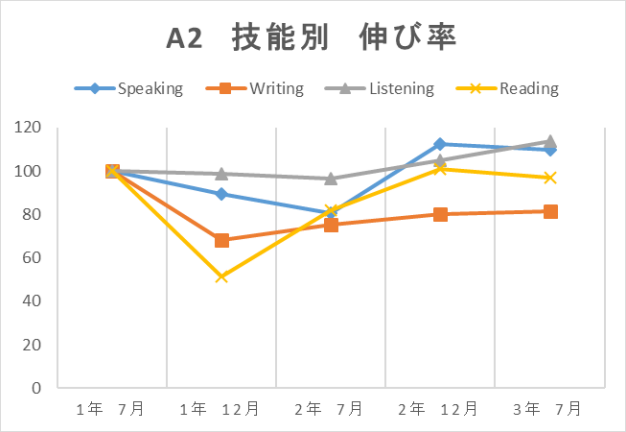
	Speaking					Writing				
	1 年 7 月	1 年 12 月	2 年 7 月	2 年 12 月	3 年 7 月	1 年 7 月	1 年 12 月	2 年 7 月	2 年 12 月	3 年 7 月
B2	0	0	0	4	3	0	0	0	0	0
B1	43	24	0	9	8	28	64	29	26	49
A2	243	217	196	273	267	265	181	199	212	216
A1	13	19	118	27	26	6	15	87	75	40
Pre-A1	―	―	2	0	1	―	―	2	0	0

※相関表改訂※相関表改訂　※相関表改訂※相関表改訂

表 8　SGH3 期生の Listening と Reading のレベル別人数

	Listening					Reading				
	1 年 7 月	1 年 12 月	2 年 12 月	2 年 3 月	3 年 7 月	1 年 7 月	1 年 12 月	2 年 7 月	2 年 12 月	3 年 7 月
B2	2	3	1	1	2	0	11	0	0	0
B1	12	38	21	39	48	29	99	4	8	36
A2	170	168	164	178	193	260	134	213	262	252
A1	115	51	129	96	62	10	16	98	44	17
Pre-A1	―	―	0	0	0	―	―	―	0	0

※相関表改訂※相関表改訂　※相関表改訂※相関表改訂



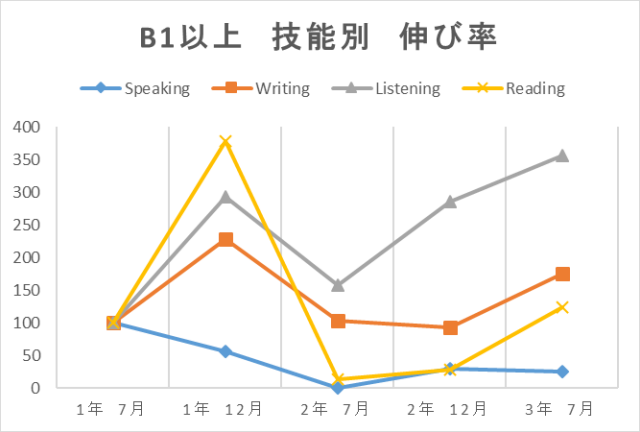


図 1　SGH3 期生の各レベル別技能伸び率

（カ）SGH3 期生：現 3 年生の結果分析・考察

2 年から 3 年時の推移のみを考える。

Reading スコアは A1 が減少し、A2、B1 へと向上した。演習問題を多数取り組んだ 1 学期の成果が反映していると思われる。短時間で長い文章を読む経験を今後とも積むことでさらなる伸長が期待できる。

Listening についても Reading と同様である。演習問題により、択一の問題には対応できるようになってきた。今後は音読やディクテーションにかける時間を授業では十分とることができなかった。学校教材が逐次開発されているので、早期の導入によってさらなる伸長が期待できる。

Writing は A1 が減少し、B1 が増加した。エッセイライティングの授業課題が短期間で成果が見られた生徒がいた。教師の手を必ずしも経ずに、生徒相互評価課題を活用し続けることで、全生徒に伸長を促したい。

Speaking に関しては、受験会場の問題があり、40 人前後がタイムラグなしで同時に発話する必要がある、という特殊な設定をする必要があった。ノイズキャンセルヘッドホンの早期導入が望まれる。実際、タイミングがずれた瞬間以降、発話ができなくなった生徒が複数見られた。授業中のペアワークのスピーキング活動の教材が複数出版されているので、導入による効果が期待できる。

（キ）SGH4 期生：現 2 年生の結果

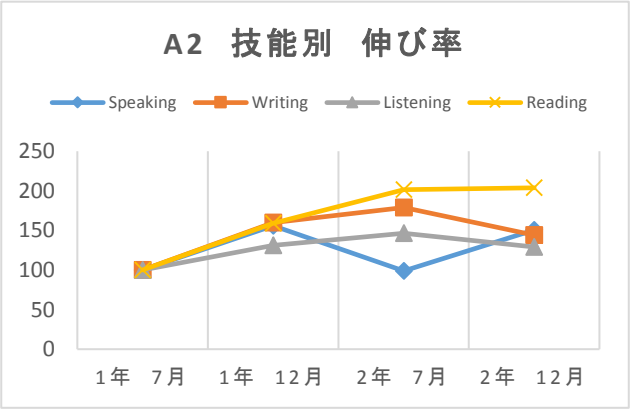
現 1 年生は、入学時から継続して GTEC Advanced のペーパーテストとスピーキングのタブレット受検となっている。その結果を表とグラフで示す。ここで示すグラフ（図 2）は、技能ごとに 1 年時の 1 回目の人数を 100 としたときの、伸び率を表す。1 年初回で B1 レベルが 0 人の場合は、B1 を便宜上「1」として伸び率をグラフ化している。

表 5　SGH4 期生の Speaking と Writing のレベル別人数

	Speaking				Writing			
	1 年 7 月	1 年 12 月	2 年 7 月	2 年 12 月	1 年 7 月	1 年 12 月	2 年 7 月	2 年 12 月
B2	0	2	0	0	0	0	0	0
B1	0	4	5	5	11	25	28	71
A2	170	265	168	256	147	235	263	212
A1	147	44	137	48	161	55	22	26
Pre-A1	2	0	0	1	0	0	0	2

表 6　SGH4 期生の Listening と Reading のレベル別人数

	Listening				Reading			
	1 年 7 月	1 年 12 月	2 年 7 月	2 年 12 月	1 年 7 月	1 年 12 月	2 年 7 月	2 年 12 月
B2	0	1	1	1	0	0	0	0
B1	1	9	21	28	0	1	8	17
A2	138	181	202	178	132	210	266	269
A1	179	124	89	104	187	104	39	25
Pre-A1	1	0	0	0	0	0	0	0



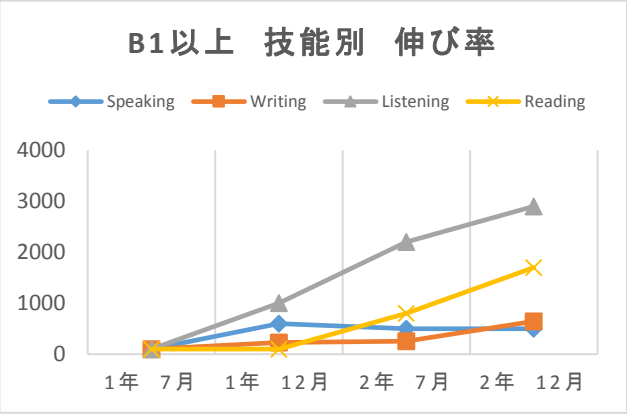


図 2　SGH4 期生の各レベル別技能伸び率

（ク）SGH4 期生：現 2 年生の結果分析・考察

Speaking スコアは B1 以上で大きな変化が見られなかった一方で、A 1 レベルから A2 レベルへの移行が大きく見られた。また、Listening スコアにおいて A レベルで大きな伸び率が見られなかったものの、B1 以上で顕著な伸び率が見られた。Writing においては 2 年 7 月から 1 2 月かけて A レベルから B レベルへの人数の移行が多く見られた。Reading においても A 1 から A2 へ、A2 から B1 への段階的な移行が確認できる。

Speaking と Writing で言えるのは 1 月に控えた本校初の海外修学旅行で姉妹校提携先の台湾の学校との生徒間での交流がある程度影響しているものと思われる。積極的にコミュニケーションを取らざるをえない状況に備えた必然的に学習に取り組んだと思われる。

Listening で上位層の B で伸び率が高いものの下位層で伸びが低いのはリスニングにもある程度語彙力が必要で関連性があるものだと推測される。

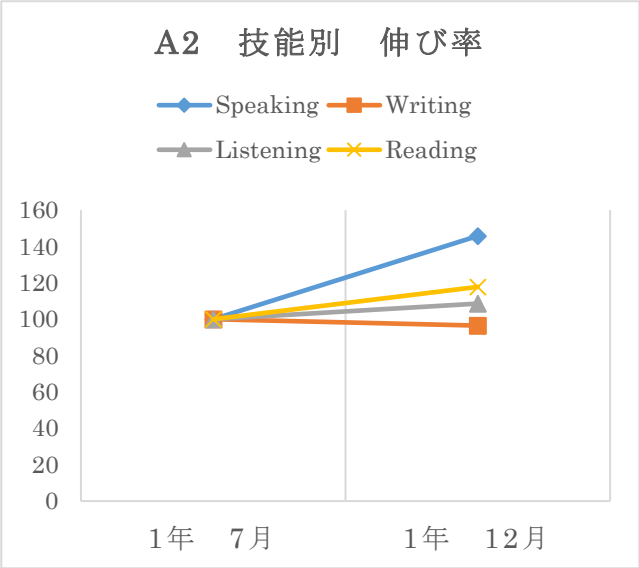
今後はさらなる語彙力の増強とリスニングの機会を増やしていきたい。

（ケ）SGH5 期生：現 1 年生の結果

現 1 年生は、入学時から継続して GTEC Advanced のペーパーテストとスピーキングのタブレット受検となっている。その結果を表とグラフで示す。ここで示すグラフ（図 3）は、技能ごとに 1 年時の 1 回目の人数を 100 としたときの、伸び率を表す。1 年初回で B1 レベルが 0 人の場合は、B1 を便宜上「1」として伸び率をグラフ化している。

表 7　SGH4 期生の各技能のレベル別人数

	Speaking		Writing		Listening		Reading	
	1 年 7 月	1 年 12 月	1 年 7 月	1 年 12 月	1 年 7 月	1 年 12 月	1 年 7 月	1 年 12 月
B2	0	1	0	0	0	0	0	0
B1	0	5	17	34	10	14	0	1
A2	166	242	230	222	162	176	191	225
A1	110	25	32	18	107	86	87	50
Pre-A1	2	1	0	2	0	0	0	0



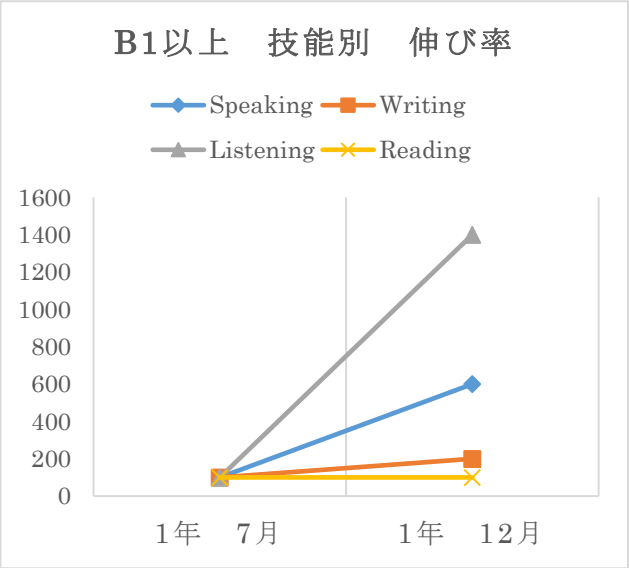


図３　SGH4 期生の各レベル別技能伸び率

（コ）SGH5 期生：現１年生の結果分析・考察

(Reading)　B1 の１名を含め、A2.2 に達した者は６６名である。２年生では、A2.2、B1 まで生徒の能力を伸ばしたい。課題は大意を把握する力であり、今後のリーディング指導で重点的に行いたい。

(Listening) 7 月からの伸びを見ると、B1 が１０名から１４名、A2.2 まで累積４４名から６３名、A2.1 までが累積１２８名から１２７名である。リスニングの伸長のため、継続して音声に触れる時間を確保したい。1 年生では、長期休業中の課題にリスニング教材を取り入れた。今後も、授業、長期休業中の時間にできるだけ音声を活用し、加えて生徒が主体的にリスニング活動に取り組むような指導導を工夫していきたい。

(Writing)7 月の時点で、すでに B1 が 17 名、累積では約９割の生徒が A2 に達していた。12 月では、B1 が３４名、A2.2 まででは累積 125 名である。4 月から、レッスンごとにエッセイライティングに継続的に取り組んできた成果である。今後もこの活動を続けることによって B1 まで伸ばしていきたい。

(Speaking)12 月の時点で、約９割の生徒が A2 に達した。授業を工夫し、スピーキング活動、インタビュー活動を定期的に実施してきた成果である。今後は、自分の主張を、理由を明確にして伝える力をつけ、B1 のスピーキング力を付けた生徒を増やしていきたい。

(6)　SGH 辞退者の追跡調査

（ア）目的　　SGH 辞退者の辞退理由を把握し、プログラムを振り返る。

（イ）実施時期　令和 2 年 1 月

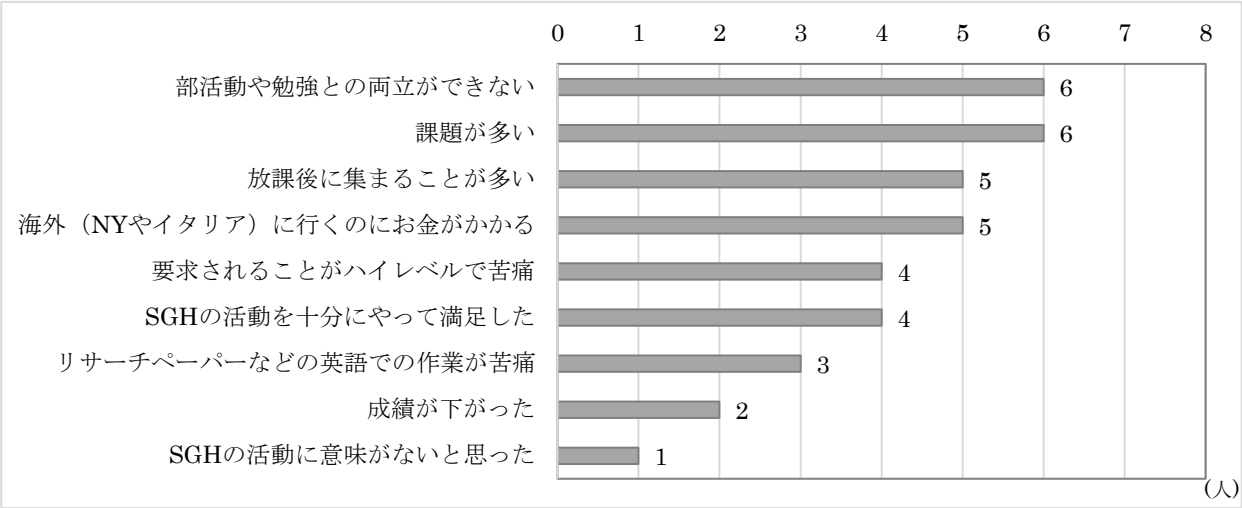
（ウ）実施内容

2019 年度 73 回生（2 年生）SGH 辞退者 11 名を対象に実施した。
内容は以下の通りである。

①SGH の活動にいつまで参加したか。
（1 年生 3 月末、2 年 1 学期中間考査までの 2 択）
②SGH を辞めた理由な何ですか。（複数回答可とし、選択肢 9 つとその他）
③辞退を決意したときと現在となにか気持ちの変化はありますか。あれば書いてください。

（エ）結果

11 名の辞退理由の結果をグラフ 1 にした。



グラフ 1　辞退理由

（オ）分析と考察

分析と考察を示す前に、SGH 辞退者の人数の推移を挙げたい。（表 1）

表 1　回生別　SGH 辞退者数

	70 回生	71 回生	72 回生	73 回生
辞退者数	22 名	43 名	28 名	11 名

72 回生までは、1 年生の 12 月に成果発表会の中で 40 名の FW 参加生を決め、2 年生以降も SGH の継続をさせるプログラムであった。そのため、SGH を希望しない生徒も含まれやすく、辞退者が多くなっていたと考えられる。73 回生からは、1 年生で台湾 FW を希望する生徒から選考を経て 20 名の SGH 生徒を決定していた。そのため、2 年生以降で辞退する生徒も減ったと考えられる。

この 5 年間で、常に『課題が多い』ことと『部活動や勉強との両立ができない』ことは辞退の理由の上位に挙げられている。しかし、成果発表会での内容や GPS－Academic の結果を見ると、SGH を継続した生徒は経験を積んだ分だけ成長がみられる。教科の学習と部活動、課題研究の 3 つの間で生徒たちの葛藤もあると思うが、それを悩むことも 1 つの経験である。SGH の活動を十分にやって満足したという生徒の数をもう少し上げることができればなお良かったと考える。

(7)　卒業生追跡調査

（ア）Web アンケート

(a) 目的　卒業後の進路や専攻分野に高校での SGH 活動が影響を与えているのかを検証する。

(b)対象　平成 29 年度卒業生（SGH1 期生）、平成 30 年度卒業生（SGH2 期生）全員

(c) 時期　令和元年 8 月～令和 2 年 2 月

(d) 方法　卒業生へ文書で案内を送り、Web 上のアンケートフォームに回答を依頼する。

(e) 質問内容

1　あなたの回生を入力してください。

2　お名前をご記入ください。

3　今現在の状況について教えてください。

　　大学　／　専門学校　／　就職　／　浪人　／　フリー

4　高校在学中の SGH 活動について教えてください。

　　1 年生のときのみ　／　2 年生の途中まで継続　／　3 年生まで継続

5（大学に在籍している方）高校での SGH や総合的な学習の時間の活動が大学の専攻分野の選択に影響があったと感じますか。

　　感じる　／　感じない　／　わからない

6（大学に在籍している方）今年度中（2019 年 4 月～2020 年 3 月）に留学または海外研修に行く予定はありますか。

　　ある　／　ない

7　6 で、”ある”にチェックを入れた方は、行先（国、大学、期間）を教えてください。

(f) 調査結果

・回答率

平成 30 年度卒業生（SGH1 期生）303 名と平成 31 年度卒業生（SGH2 期生）306 名に対して、アンケート調査を行った。表 1 はその回答数と回収率である。

表 1　SGH 継続期間と回答数・回収率

SGH継続期間		属性人数(人)	回答数(人)	回答率
1年生のときのみ	SGH1期生	261	28	11%
	SGH2期生	273	39	14%
2年生の途中まで継続	SGH1期生	30	5	17%
	SGH2期生	27	5	19%
3年生まで継続	SGH1期生	12	4	33%
	SGH2期生	6	2	33%
全体	SGH1期生	303	37	12%
	SGH2期生	306	46	15%

SGH を継続した期間が長ければ長いほどアンケート回答率も高くなっている。SGH 活動が長ければ長いほど、SGH に関することへの意識が高まると考えられる。アンケートの依頼方法をハガキに変更し、QR コードの読み取りでアンケートへアクセスを良くしたためか、昨年度より回答率は上がった。しかし、依然回答率は低いので、どう回答率を上げるかが今後の課題である。

・5 の回答について

『(大学に在籍している方) 高校での SGH や総合的な学習の時間の活動が大学の専攻分野の選択に影響があったと感じますか。』という問いに対し、83 名の回答を得た。図 1 は SGH 継続期間で分け 3 つの回答（感じる、わからない、感じない）の割合を SGH1 期生、SGH2 期生別で示したものである。

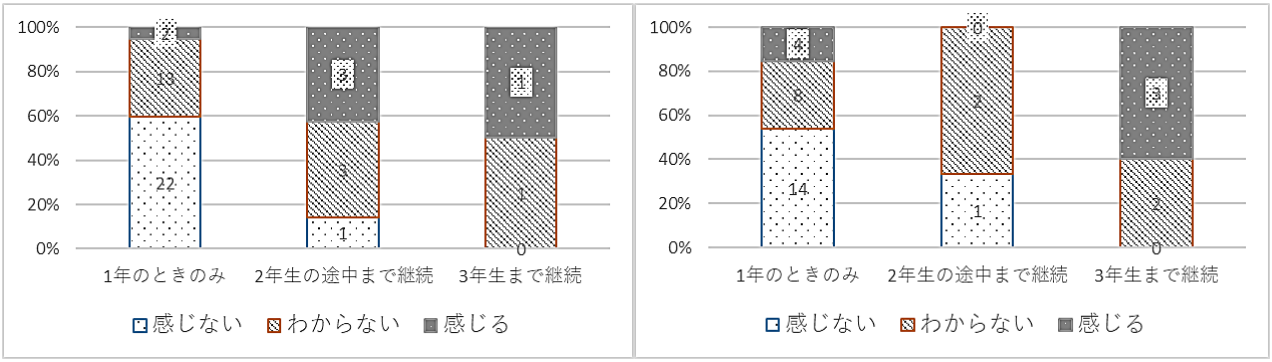


図 1　SGH や総合的な学習の時間の活動の専攻分野の選択への影響
（左：SGH1 期生　右：SGH2 期生）

SGH を 3 年生まで継続した者の半分以上が専攻分野に影響を与えていることがわかる。

・6 の回答について

『(大学に在籍している方）今年度中（2019 年 4 月～2020 年 3 月）に留学または海外研修に行く予定はありますか。』の問いに対して 81 名の回答を得た。表 2 はその数をあらわしている。

表 2　今年度中の留学・海外研修の予定

SGH 継続期間		ある(人)	ない(人)
1 年生のときのみ	1 期生	2	24
	2 期生	4	34
2 年生の途中まで継続	1 期生	0	4
	2 期生	1	6
3 年生まで継続	1 期生	1	4
	2 期生	0	1
全体	1 期生	3	32
	2 期生	5	41

予定があると答えた 8 名の行先は、カナダ 2 名、マレーシア 1 名、ドイツ 1 名、イタリア 1 名、ヨーロッパ 1 名、記入無し 2 名であり、期間は最短が 10 日間、最長が 8 か月であった。この問いに関しては SGH 継続期間との相関は特に見られない。

(g)分析と考察

SGH を 3 年間継続した者には卒業後も連絡を取れる環境を作り、その他の者へはハガキで案内を送り協力を依頼したが、回答率が高くない。卒業後の進路や専攻分野への影響の結果を見ると、SGH 活動を 1 年で辞めた者よりも 2 年 3 年と継続していた者のほうが影響を感じる傾向がある。これは 3 年間の取り組みの肯定的な評価であると考える。SGH1 期生の「2 年生の途中まで継続」の生徒では影響を感じる生徒が 0 であったが、これはトータルで 3 人のみの回答しか得られなかったためということもある。来年度のアンケート結果はまた違った結果が出てくる可能性もある。今後も継続して追跡していきたい。

（イ）自由記述アンケート

(a) 目的　卒業後の進路や専攻分野に高校での SGH 活動が影響を与えているのかを検証する。

(b) 対象

平成 29 年度卒業生(1 期生)のうち 3 年まで SGH 活動を継続し連絡先を登録した生徒:12 名
平成 30 年度卒業生(2 期生)のうち 3 年まで SGH 活動を継続し連絡先を登録した生徒:4 名

(c) 時期　令和 2 年 1 月

(d) 方法

卒業生へ卒業時に登録してもらった連絡がつく E-mail アドレスに文書を送り、A4:1 枚程度の回答を依頼する。

(e) 質問内容

近況：新しい環境で、どうしていますか?
SGH の活動は今どのように影響していますか?
今振り返ってみて、SGH の活動をどのように感じますか?

(f) 調査結果

・回答率(2 月 10 日現在)

平成 29 年度と平成 30 年度の卒業生の SGH1・2 期生のうち、3 年生まで SGH 活動を継続し、卒業後も連絡が可能な E-mail アドレスを登録してくれた 1 期生 12 人と 2 期生 4 人の生徒に対して、自由記述でアンケート調査を行った。表 3・4 でその回答数と回収率を SGH 活動の入試活用の有無と進学先と共に表す。

表 3　SGH3 年生まで継続生の SGH 活動の入試活用の有無と進学先別回答数・回収率(1 期生)

	属性人数	進学先			回答数	回収率
		SGU	SGU 外	海外	(人数)	%
SGH 活動を入試に活用して進学	3	3	0	0	1	33.3%
SGH 活動を入試に活用せずに進学	9	1	7	1	3	33.3%
全体	12	4	7	1	4	33.3%

表 4　SGH3 年生まで継続生の SGH 活動の入試活用の有無と進学先別回答数・回収率(2 期生)

	属性人数	進学先			回答数	回収率
		SGU	SGU 外	海外	(人数)	%
SGH 活動を入試に活用して進学	2	2	0	0	1	50.0%
SGH 活動を入試に活用せずに進学	2	0	2	0	1	50.0%
全体	4	2	2	0	2	50.0%

全体としては 40%弱の回収率となり、前年度の 70%弱の回収率より大幅に下がっている。特に、1 期生は昨年度に続き回答を依頼したため、昨年度より大幅に回収率が下がった。卒業から時間が経過していくにつれて、追跡調査は一層難しくなってきている。

・回答内容

＜近況＞

積極的に大学内外の活動に参加している様子を報告してくれる生徒が多い。1 期生は大学に入学して 2 年近くが経過し、3 回生でのゼミやキャリア選択についての記述も見られる。

＜SGH 活動の現在への影響＞

1 期生は、3 回生を目前にしてゼミやキャリア選択に SGH 活動が影響していると答えている。自

分の特性ややりたいことを再認識し、それが SGH に取り組んでいた時からのものであったという生徒もいる。また、昨年度から一貫して、高校時代に SGH で培った PC スキル、プレゼンテーション、論文・レポート作成、研究の基礎的な経験が大学での課題等に取り組む上で大いに助けになっていると答えている。

＜SGH 活動を今振り返ってみて＞

特に 1 期生は、昨年度より SGH 活動やその影響について、書く内容に深みが出てきたように思う。SGH 活動に取り組んでいる当時は、多忙さと必死さで振り返る余裕もなかったのかもしれない。活動自体が稀有で素晴らしいものだったと述べ、それが自信や現在ならではの気づきにもつながっているようである。

(g) 分析と考察

非常に限られた回答数ではあるが、1 期生を 2 年続けて追跡できたことで、SGH の活動がキャリア選択等にも影響していることがあることがわかった。また、卒業後 1 年目は大学内外で積極的に活動している報告が多く、2 年目になるとそれ以外のキャリアやゼミ選択、自分自身について SGH の活動の影響を冷静に認識しているものが多い。総じて言えることは、SGH の活動での PC スキル、プレゼンテーション、論文作成、探究活動の基礎が大学での課題等をする上でとても助けになっていることである。そして、多くの生徒に共通しているのは、SGH の活動やフィールドワークで、外部の方や外国人の方とお話しする機会に恵まれたことが、その後の積極性につながっているということである。

(h) 参考資料

以下、卒業生による自由記述の抜粋である。一部大学名・個人名等は編集している。

この内容については、本校の HP や公式ブログにも掲載している。

・1 期生(女子)

私は後輩や母校に対して力説出来る経験など露ほどもありませんが、今振り返って感じる SGH の恩恵などを連ねていこうと思います。

大きく分けて 3 つあります。1 つ目は、英語を使うことに対して、また他のことにも積極的になれた事。授業中に誰も発言していないから、自分も黙っていようと思ったことは皆あるはずです。かつ、わかっているのに、誰か言うのを待つというのは非常に無駄な時間だと感じる人も少なくないはずです。英語を積極的に使っていこうとする姿勢は、多かれ少なかれそのような空気を自分から打破していこうとする姿勢に繋がると、私は思います。9 月に大学のプログラムとして 4 週間のマレーシアフィールドワークに参加しました。2 週間だけ現地の語学学校に通い、あとの 2 週間はテーマに沿ったフィールドワークとして現地の日本企業やビジネス機関等を訪問しました。語学学校では出来るだけ日本人割合の少ない IELTS クラスを希望し、その学校でトップの少人数クラスに参加しました。アジア系、中東系、国籍は様々です。もちろん授業中は質問意見が飛び交いますが、それが良いという事ではありません。発表することが正義という事はもちろんないです。(発言したら加点方式は大学でも散見されますが…)空いた時間で自分を高め、自信を持った上で知識を交換する姿が格好良いのだと思います。大学などは目的が勉強のみではないので手を抜こうと思えばどこまででも抜ける環境です。その中で、私は自分を高める人物像を目指したいと思っています。日常的に留学生交流イベントに参加する、留学生と会話する language hub 室に通う、定期的に TOEFL itp を受ける。それ以上の事は今現在していませんが、続けていく事が大事かなと思っています。

2 つ目は価値観が変わったことです。よく言われる事ですが、中高時代に海外フィールドワークやホームステイに出る事は必要だと思います。周りの評価を気にして過ごしがちだと自覚している人達こそ、社会的に個性を肯定する国へ行く事は非常に重要であると感じています。自分が何かをしようとした時、他人の評価は気にしなくていいのだと気づいた事が私にとって高校で得た最も有用な感覚の 1 つです。チャレンジを抑制するコミュニティなどつまらない以外の何物でもありません。

3 つ目に、物事には様々な側面があると知れたことがあります。課題研究を通してテーマに沿って様々な情報を得ていく過程で、自分が良しとする事でも他人はそう感じるとは限らない事。自分達は日本食が健康に良いとしてアピールするが、他の国の人達にとっては自分達の食文化およびアイデンティティを脅かされかねないものとして見る事があること。煙草は身体的健康に悪いとされるが、精神的健康・安定にはどうなのか？そのような側面を知った上で当事者への言動を起こす事が必要ではないのか。その為に自分で情報を取捨選択するということも必要です。

最後に、SGH 活動を振り返って。私にとって素晴らしい経験であったと思います。私立の余裕のある学生とは違い留学機会の薄い私達にとって、努力すれば未知の体験ができるという目標を与えて頂けたのは感謝にたえません。日常的に支えて頂いた先生方をはじめ、普段関わりのないユニークな人達と接点を持てたのも他に替えがたい経験です。色々な人がいて、尊敬する精神を持つ同級生と出会ったり、SGH の講演会を通して自分の慢心を自覚させてくれた大学の先生もいます。学校という閉鎖的な環境で過ごす学生が、開けた社会的な経験を積むこと。それは個人にとっても、ひいては社会にとっても有意義な投資であると感じます。私はこの活動、および母校が取り組もうとする社会的活動すべてを応援しています。

・1 期生(女子)

今の大学生活の中で、SGH の活動が直接的に関係していたり、役立っている事はあまりありませんが、SGH の活動を通して得た、人前で話す力やコンピュータを扱う力は役立っているなと感じる場面があります。

私は教育学科に通っており、自分の将来のために子どもと関わるボランティアをしています。具体的には、子ども達を引率して山や川などの自然が豊かな場所へ出かける野外活動をしています。月に一度行われる定例プログラムや、夏休みなどの長期休暇に行われる特別プログラムがあり、活動当日に向けて何度かミーティングを行います。ミーティングでは当日の活動のねらいやプログラム内容をどうしたいか学生が意見を出し合って決める事がほとんどで、そのような場面で自分の意見や考えをきちんと話す事が出来ているなと感じます。私が提案したプログラム案が採用される事もあり、そのような時は提案して良かったなと思います。SGH の活動に参加する前の私は人前で話す事がとても苦手で、グループワークでもなかなか発言する事が出来なかったので、SGH の活動を通して自分の意見や考えを順序立てて上手く人に伝えられるようになった事が私の中での一番の大きな変化だと思っています。また、自分の意見を言えるようになり、それが受け入れられるようになった事で自分の考えに自信を持つことができ、積極的に動く事が出来るようになってきているなとも感じます。

また日常生活では、大阪駅など観光客が多くいる場所を利用している時、海外の方に電車やバスの乗り換えや施設の行き方などについてよく質問をされる事があり、そのような時とっさに英語が出てこなくて、もどかしい気持ちになります。高校生の時はもっと話せていたのにやはり、英語は使い続けないと忘れてしまうのだなあとそのような時に実感します。英語の表現が出てこなくても、単語や動作などで何とか伝えようとしますが、上手く伝わらない事も多いので、普段から英語をもっとちゃんと勉強しようと思います。SGH の活動を通してたくさんの海外の人と関わり、英語でコミュニケーションを取ることの楽しさを感じる事が出来たため、海外の人と話をする事には全く抵抗は感じなくなりました。これも SGH で得た力の一つだと感じています。

普段 SGH の事を意識して生活する事はあまりありませんが、このように定期的に活動を振り返って今の自分を見つめ直してみると、SGH の活動をきっかけに、プラスの方向に変わった事がたくさんある事に気がつきました。当時はしんどい思いもたくさんしましたが、3 年間 SGH の活動に参加して本当に良かったと思っています。

・1 期生(男子)

＜近況と SGH 活動への現在の考え＞

はじめに近況ですが、9 月からのゼミ選考にて、来年 4 月から所属するゼミが決定しました。私は統計学を専門とする先生のゼミへの所属が決定しました。その先生の学習方針から 11 月よりプ

レゼミとしてすでにゼミ活動を開始し、パソコンの基礎、統計学の基礎の学習、ゼミ運営の手伝いなど忙しく過ごしています。その中で特にパソコンでのスキルについては SGH 活動での経験が活きていると感じています。パワーポイント、ワードでの作業を高校時代から行うことで、大学生になり、レポートを書く機会が増えても戸惑うことなくスムーズに進めることができています。SGH 活動の一環として、授業でもレポートの書き方があったのも大変ありがたいと感じています。

＜SGH 活動の現在への自分への影響＞
SGH 活動でパソコン作業が多かったため、ゼミでパソコンと長く向き合うことも難なくできています。また、SGH 活動を通して海外研修に行かせていただいた経験は非常に大きいです。海外やビジネスに興味を持つようになったきっかけとなったことには本当に感謝しています。ゼミでも観光マーケティングをメインテーマとして研究するなど、将来に向けての影響も大きいです。高校時代に力をいれたこととして、話すことができる経験だと考えています。

＜卒業から２年近く経った今振り返ってみて、SGH の活動をどのように感じるか＞
高校生の間から世界に目を向けて実際に海外に行くことができる活動はレアでありがたい活動だったなと大学生になってかもひしひしと痛感しています。海外への興味をより大きくしてくれた活動であり、ゼミ選びなど重要な決定にも影響を与える活動でした。一方でまだまだ未熟だったこともあり、僕個人としては勉強との両立や、部活動との両立がうまくできていなかったなとも感じています。現在もゼミ活動やアルバイトで日々忙しいですが、高校時代よりもタイムマネジメントができるようになりました。
高校時代の SGH 活動は、大学でも自慢できるほどに頑張り、価値のある活動でした。今後の大学生活の中で、SGH 活動以上に頑張ったと胸を張って言えるように、日々の精進します。

・1 期生(女子)
私は、現在経済学部の 2 回生で、主に社会保障や労働経済学について学んでいます。最近では、もうすぐ 3 回生になると言うことで、就活について考えるようになってきました。また、学んでいる分野の関係もあり、働き方について深く考えるようになりました。私はまだ、どういう会社に就職してどんな仕事がしたいのかはっきりと決まっていません。会社について自分の目で知るためには、インターンシップや説明会に参加する必要があると思っています。私が今まで企業の方からお話を伺う機会はどんなものがあったのか振り返ってみると、SGH を通して知ったことが多くを占めていました。高校 1 年生の時には、東京研修で ANA のケータリングの工場見学や伊藤忠商事などを訪れ、この時に初めて商社がどういうものなのか知ることができました。東京研修は私たちの年だけでしたが、今になってこの貴重な経験が出来て良かったと思っています。また、伊丹の企業さんのお話や、イタリアで小規模生産者を訪れたことなど、働く方のお話を聞く機会がたくさんあったなと今振り返って感じています。
これらのことは、私が SGH の活動をしていたころには、あまり深く考えていなかったことです。しかし、今になって SGH の活動について、こういう発見があったんだと別の視点から考えることができて、たくさんの意味を持つ活動だったんだと感じています。現在、高校生の方からすると、受験勉強に関係ないやんと思うかもしれないですが、今後色んな場面で SGH の活動を思い出すときが来るでしょう。

・2 期生(女子)
SGH の公募推薦で大学を受験して早 1 年が経ちますが、これまでの大学生活を振り返ると高校での SGH 活動が役立っていると感じることが多々あります。
大学では「人文演習」という総合の授業のような時間が週に 1 回あります。春学期の人文演習では、3 人グループで研究テーマや研究方法などを自分たちで決め、クラスで発表を行いました。大学生になって間もないうちから研究を行うということに驚きましたが、SGH で自分のビジネスプランに対して沢山考えてきたおかげで、研究の進め方や発表の仕方などのイメージが湧きやすかっ

たです。研究の成果はまだまだ未熟なものでしたが、大学 4 年間のうちに理論的な思考を鍛え、まとめ方や発表の仕方のテクニックを身に着けたいと考えています。

私は英語が小学校の時から好きで、SGH での国際交流が楽しかったこともあり、大学でも英語を勉強したいと考え英米文学英語学を希望しました。しかし、大学で初めて受けた TOEIC で結果が悪く、英語に対しての自信を完全に失いました。そして、英語を勉強しないと…と思いながらもアルバイトを 3 つも掛け持ち、バイトと遊びに没頭する日々が続いていました。バイトも社会勉強になり、いろんな友達と関わることで、楽しいのはもちろんのこと、様々な価値観に触れられ新鮮でした。しかし、自分は英語を勉強するためにこの学部を選んだはずなのに、英語を勉強しなくていいのか…と悩んでいました。そんなある日、転機が訪れました。アルバイトで塾の講師をしているのですが、「プロジェクト」という塾の問題を見つけ、それを解決するために様々なことを企画するというものがあります。夏休みに他の教室の人たちの発表を聞き、とても刺激を受けました。英語に自信が無くなりやる気が出ないのなら、いっそのこと英語にあまりこだわらず、別のことを頑張ってもいいのでは？と思い、後期の「プロジェクトリーダー」になることを決意しました。私は理論的思考とスケジュール通りに行動する能力が弱いことを自覚しているので、そこが成長できるように現在も何とか頑張っています。高校の SGH 活動でも感じましたが、やはり自分は企画することが好きだと改めて思います。将来も発想力が求められる仕事に就きたいなと現時点では思っています。(ちなみに英語に対するやる気も回復しつつあります。)

サークルも 3 つ掛け持っていますが、その中でも学祭委員はとてもやりがいを感じられるサークルです。私はライブを担当しており、今年は ORANGERANGE さんのライブの運営をしました。学祭が全部で 7 日間もあり、朝から晩まで働いているので大変です。また、統括などの仕事もあるので責任は大きいです。しかし、ここでも SGH 活動のように形無いところから、何かを完成させる喜びが好きだと改めて思いました。来年はライブに関しては中心学年なのでさらに責任が大きいですが、同時に喜びが生まれることを知っているので頑張りたいと思っています。

大学生活は 4 年間と限られていますが、楽しみながら日々成長したいです。

・2 期生(女子)

大学に入ってまず Listening と Speaking 担当の先生(以下 M)に恵まれました。M はとてもフレンドリーで話しやすく、楽しんで英語を学ぶスタイルの授業でした。英語を上達させたいと相談すると、多読を勧められ研究室に呼ばれました。たくさんの英語の本があって、初めは抵抗があったが、いきなり本の話になる訳でもなく、研究室で友達とボードゲームが始まり、その横で気軽に本の話をしてくれ、まずは絵本のようなレベルの本からスタートしてもいいからとりあえず沢山読むことを始めました。

他には、ピザパーティをひらくからおいでと声をかけられ、友達といくとそこは M の友達、海外の英語の先生達ばかりですごい空間に来てしまったなと思ったけど、優しく受け入れてもらい、色んなことを吸収した。その後も何回もパーティーを開いてくれ、色んな交流ができました。そのおかげで本当に少しずつではあるが、英語が前より聞き取れるようになったり、読むスピードが早くなったり、成果が最近になって感じられるようになりました。

M とは英語の勉強のはなしもするけれど、それ以上に友達のように悩み、相談から色んな話をして、考え方も広がるし、何より気軽に行ける研究室が楽しいです。

また、近くの熊本大学である welcome party という留学生の歓迎イベントも M が紹介してくれました。そこにはすごい多国籍の沢山の学生が来ていて、初めは緊張しましたが、オードブルをつまみながら色んな人達と話しました。そこで初めて自分の大学の留学生とも交流しました。その日出会った何人かの留学生の中でも特に仲良くなったのが台湾人の Y とフランス人の C です。C は得意のフランス料理をご馳走してくれたり、朝まで友達と C の家でずっと話していたり、とても楽しい時間を過ごしました。後期になると、Y の大学から留学してくる子が増え、台湾人何人かと遊ぶことが増えました。みんな日本語が話せるから、それに頼ってしまうことも多いけれど、日本人が私だけの時が多いため台湾人同士で話す時は台湾語になります。その空間にいると、私もその話聞きたい！といつも思います。そこから中国語も学びたいと最近思うようになりました。

他にも同じアパートに住んでいる日本で働いてるベトナム人の友達ができたり、バイトの先輩の紹介で留学生や ALT と英語で話すコミュニティと繋がれたり、新しい出会いと発見がいっぱいの毎日です。

もう 1 つ話したいのは、私は 4 月から今年 1 年間 Tabippo という企業さんの学生スタッフを今やっている事です。「旅で世界を、もっと素敵に」というのをビジョンとして、「若者が旅する文化を創る」というのをミッションとして活動してます。私は福岡支部で活動していて 2/27 にある BackPackFesta という 2000 人規模の大きなイベントに向けて企画運営をしていくというのをメインに活動してます。がむしゃらにでも努力してみんなが自分の得意な部分を活かしていくことで、やっと、1 歩ずつ進んでいけます。大学が違ったり、学年が違ったり、みんな違う環境なため、モチベーションもそれぞれ変化して大変な面もあるけれど、素敵な仲間たちとつくれてることを幸せに感じます。夢をかたれる場所、素直に想いを発信できる場所であるから、自分の夢、悩みを話したり、色んな人の夢を聞けたりできてとても楽しいです。先週末、私のチーム企画の小規模イベントが最終回を迎えました。最終回で、初めて司会（ファシリテーター）を務めて、今まで任せてきてた部分、色んな人があちこちで動いてくれていること見えてない動きの凄さ、至る所に感謝の想いが溢れました。

大阪でも BackPackFesta が 2/25 にあるので、良かったら来てください。福岡の 2 日までなのでその時の状況によりますが、私も運営を手伝いに行くつもりです。

https://bpf.tabippo.net/2020/
https://tabi-daigaku.jp/lessons/950

＜SGH へ＞

大学の授業で論文を書いたり、プレゼンテーションの発表をしたりする授業があってもそこまで抵抗がなく出来るのは、高校の時にあれだけ準備して、練習して、プレゼンテーションをした経験があるからです。そして、それが選抜であったからこそ、1 年の台湾で落ちた時にめっちゃ悔しい思いをして、2 年の NY に向けて頑張れ、3 年の活動まで続いたと思います。また、3 年のイタリアでは各自のテーマで考えられて、オーガニックについて探求したことで自分の食に関する考え方や、世界的な視点の広げ方がわかったり、その経験が自分の進路の選択肢が広がったり、決定打になったりしました。

大学に入って授業をもってくれた M に英語を授業以外にもっとやりたいと自分から声をかけれたこと、こうして今たびっぽの活動ができていること、留学生とのコミュニティに参加してコミュニケーションをとってること、どれも高校時代の SGH の活動があったからです。

高校時代に海外へ行ったり、留学生と交流したり、世界的な見方で考えたりすることは今後の考え方に大きく繋がると最近感じます。あの時は色んな考え方、今までと違う当たり前に悩んだり、向こう側の視点にたって準備したり、大変なことだらけだったけど、いまの自分があるのはそのおかげだから、高校時代の経験に感謝しています。

平成３１年度　教育課程（７２回生～７４回生）

兵庫県立伊丹高等学校

必履修科目

第１学年（第74回生）

単位数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
科目	国語総合					現代社会		数学Ⅰ			数学A			物理基礎		生物基礎		体育			保健	音楽Ⅰ 美術Ⅰ 書道Ⅰ		コミュニケーション英語Ⅰ			英語表現Ⅰ		家庭基礎		総合探究	LHR

第２学年（第73回生）

単位数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
人文社会類型	現代文B		古典B			世界史A 日本史A		日本史B※ 世界史B※			数学Ⅱ				選択		化学基礎/地学基礎		体育		保健	コミュニケーション英語Ⅱ			英語表現Ⅱ			実践英語Ⅰ	社会と情報		総合学習	LHR
自然科学類型	現代文B		古典B		地理B		数学Ⅱ				数学B		化学基礎		化学		物理※ 生物※		体育			保健	コミュニケーション英語Ⅱ			英語表現Ⅱ			情報の科学		総合学習	LHR

選択：国語表現，数学Ｂ，生物※，総合音楽，ビジュアルデザイン，総合書道，総合英語，ライフデザイン

第３学年（第72回生）

単位数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
人文社会類型Ⅰ	現代文B			古典B			日本史B※ 世界史B※				選択A		選択B		選択C		選択D		選択E 選択G		選択F		体育		コミュニケーション英語Ⅲ				英語表現Ⅱ		総合学習	LHR
人文社会類型Ⅱ	現代文B			古典B			日本史B※ 世界史B※				政治・経済		人文数学研究α		人文数学研究β		選択H		選択I 選択K		選択J		体育		コミュニケーション英語Ⅲ				英語表現Ⅱ		総合学習	LHR
自然科学類型	現代文B		古典B		地理B		世界史A		数学Ⅲ 自然数学研究α			自然数学研究β		自然数学研究γ	化学				物理※ 生物※				体育		コミュニケーション英語Ⅲ				英語表現Ⅱ		総合学習	LHR

※の選択科目は2，3年継続履修

選択A：世界史研究，日本史研究，現代社会研究　　選択B：現代文研究，古典研究，よむかく日本語　　選択G：生物※，フードデザイン
選択C～F：現代社会研究，実用数学α，実用数学β，実験科学，化学研究，生物研究，地学研究，スポーツⅡ，演奏研究，ソルフェージュ，器楽，素描
実用書道，探究書道，英語会話，英語探究，子どもの発達と保育，ファッション造形基礎，情報デザイン，情報の表現と管理
選択H～J：世界史研究，日本史研究，倫理，総合数学，物理研究，化学研究，生物研究，地学研究，英語探究，化学，生物
選択K：地理Ｂ，世界史Ｂ，日本史Ｂ，化学，生物

選択Kと選択Hの化学，生物は必ず両方選択する（片方だけの選択は不可）

2　評価ルーブリック(1年生)

74回生 SGH（総合的な探究の時間）

校内成果発表会の評価について

評価項目	最高レベル 4	高レベル 3	中レベル 2	低レベル 1
A プレゼン	声の大きさや話の速さが適切で理解しやすい。アイコンタクトやボディランゲッジがあり、聴衆を引き付ける魅力や工夫がある。 また導入・根拠・結論の構成がすばらしく、展開が論理的で説得力がある。	声が大きく明瞭で適度な間があり、理解できる。アイコンタクトやボディランゲッジ等の工夫がある。 また、導入、根拠や結論など、話の構成がしっかりしている上、話の展開が論理的で説得力がある。	声が大きく明瞭で適度な間があり、理解できる。アイコンタクトやボディランゲッジ等の工夫がある。 もしくは、導入、根拠や結論など、話の構成がしっかりしている上、話の展開が論理的で説得力がある。	声が聞き取りにくく、原稿を読み上げている感じが否めない。アイコンタクトやボディランゲッジ等の工夫がない。 また、導入、結論など、話の構成の一部はできているが、話の展開が論理的でない。
B テーマ	学術や社会に貢献できるテーマであり、オリジナリティが感じられる。高校生の課題研究として非常に高いレベルの課題であり、興味深いリサーチクエスチョンが明確に示されている。	学術や社会に貢献できるテーマである。高校生の課題研究として高いレベルの課題であり、リサーチクエスチョンが明確に示されている。	学術や社会への貢献を意識したテーマである。高校生の課題研究として適切なレベルの課題である。リサーチクエスチョンは示されているが、改良の余地を含んでいる。	テーマは学術や社会への貢献があまり意識されていない。高校生の課題研究として適切なレベルの課題であるとはいえない。 リサーチクエスチョンが示されていない、もしくは不明瞭で理解しにくい。
C リサーチ	テーマに関連する先行研究や類似の研究についてよく調べられている。 仮説の根拠がはっきり示され、論理的で説得力がある。 またインタビューやアンケート、実験等のリサーチが充実している。	テーマに関連する先行研究や類似の研究について調べられている。 仮説の根拠が示され、論理的で説得力がある。 またインタビューやアンケート、実験等のリサーチが充実している。	テーマに関連する先行研究や類似の研究について調べられ、仮説の根拠が示されているが、やや説得力に欠ける。 また、インタビューやアンケート、実験等のリサーチがなされている。	テーマに関連する先行研究や類似の研究について調査がない。仮説の根拠が不明で説得力に欠ける。 インタビューやアンケート、実験等の詳細なリサーチがなされていない。

3　ポスター審査のルーブリック(1年生)

評価項目		最高レベル 4	高レベル 3	中レベル 2	低レベル 1
A テーマ	研究背景	4	3	2	1
		研究背景が明らかであり、テーマに合った先行研究や事例が複数挙げられている。	研究背景が明らかであり、テーマに合った先行研究や事例が挙げられている。	研究背景は明らかであるが、テーマに合った先行研究や事例が挙げられていない。	研究背景が明らかになっておらず、先行研究や事例を挙げていない。
	リサーチクエスチョン	4	3	2	1
		リサーチクエスチョンと根拠、仮説が論理的に述べられている。	リサーチクエスチョンと根拠、仮説が明確である。	リサーチクエスチョンが明確であるが、根拠と仮説が明らかではない。	リサーチクエスチョンと根拠、仮説があいまいである。
	研究目的	4	3	2	1
		社会に貢献できる研究目的・意義を述べており、全体的にストーリー性がある。	社会に貢献できる研究目的・意義を述べている。	研究目的・意義を述べている。	研究目的・意義が明らかではない。
B リサーチ	研究手法	4	3	2	1
		研究テーマに適した具体的な研究手法が複数挙げられている。	研究テーマに適した具体的な研究手法が挙げられている。	具体的な研究手法を挙げている。	具体的な研究手法が挙げられていない。
	結果	4	3	2	1
		インタビューやアンケート、実験等のリサーチが充実している。情報量は豊富で、必要な取捨選択がされている。出典がはっきりしている等、情報の扱いは適切で信頼度が高い。	インタビューやアンケート、実験等のリサーチが複数ある。情報量は豊富であり出典をあきらかにしている等、情報の扱いが適切で、ある程度信頼できる。	インタビューやアンケート、実験等のリサーチが１つはある。情報量は少ないが出典をあきらかにしている等、情報の扱いが適切で、ある程度信頼できる。	インタビューやアンケート、実験等のリサーチがない。情報は不足しており、情報の扱いや出典等に不適切な部分が多く、情報の信頼度が低い。
	考察	4	3	2	1
		根拠に基づいた説得力のある考察と今後の見通しが述べられている。	根拠に基づき、説得力のある考察がなされている。	根拠のある考察が述べられている。	根拠のある考察が述べられていない。

SGH Presentation Evaluation Sheet　　Presenter _____　Evaluator _____

Category		Superior Level 4	High Level 3	Average Level 2	Low level 1
A Presentation	Poster	Visually appealing font size and color, and arrangement of the layout. Sections, pictures, and chart are effectively used. Has an overall sense of unity, easy to understand and attractive poster.	Visually appealing font size and color, and arrangement of the layout. In addition, sections, pictures and charts are effectively used.	Visually appealing font size and color, and arrangement of the layout. Or, sections, pictures, and charts are effectively used.	Many words, difficult to understand. Or, too few words and level of completion low. Font size and color, layout arrangement is lacking/poor.
	Speech	Speaking volume and speed is appropriate and easy to understand. Has eye contact and body language, draws in listeners. In addition, introduction, body, and conclusion have excellent organization and develop logically and persuasively.	Speech is loud and clear with appropriate pauses, can be understood. Uses eye contact, body language etc. to some extent. Also, in addition to the introduction, body, and conclusion being complete, their speech's progression is persuasive and logical.	Speaking volume is loud and clear to a suitable degree, can be understood. Uses eye contact, body language etc. to some extent. Or, in addition to the introduction, body, and conclusion being complete, their speech's progression is persuasive and logical.	Voice is difficult to hear and understand, undeniably sounds like reading from notes. No eye contact or body language. Also, some of introduction, body, etc. are done but speech does not progress logically.
B Theme	Background	Background is clear and cites several previous research or case studies/examples that fit the theme.	Background is clear and cites previous research or a case study/example that fits the theme.	Background is clear but does not cite research or a case study that fits the theme.	Background is unclear and does not cite prior research or a case study.
	Research Question	Research question, evidence, and hypothesis are logically stated	Research question, evidence, and hypothesis are clear.	Research question is clear but evidence and hypothesis are unclear.	Research question, evidence, and hypothesis are vague/unclear.
	Research Goal/ Significance	States the significance or goal that can contribute to society, has an overall flow.	States the significance or goal that can contribute to society.	States the goal or significance.	Goal or significance is unclear.
C	Methods	Gives several specific research methods to suit the theme.	Gives specific research methods to suit the theme.	Gives specific research methods.	Does not give concrete research methods.
	Results	Research for interview, survey, experiment etc. has been completed. Abundance of data with essential points selected. Sources are clear, handling of information is appropriate and has a high degree of credibility.	Has more than 1 of interview, survey, experiment, etc. Abundant information with clear sources, information is handled appropriately and has a degree of credibility.	Has research for 1 of either interview, survey, or experiment. Volume of information is low but sources are clear, information is handled appropriately and has a degree of credibility.	No research for interview, survey, or experiment. Information is lacking, much of the information is not appropriately handled or cited. Credibility is low.
	Discussion	Conducts a persuasive evidence-based discussion with future consideration.	Conducts a persuasive, evidence-based discussion.	Conducts an evidence-based discussion.	Does not conduct an evidence-based discussion.
D	Q & A	8	6	4	1
		Understands questions immediately, answers them accurately in English.	Understands questions or asks to repeat them for understanding, can answer them in English.	Tries to understand questions, but fails to answer all of them.	Does not understand questions or can't answer them in English.